

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第87集

泉佐野市湊・旭町・大宮町所在

# 湊 遺 跡 他

—南海本線(泉佐野市)連続立体化工事(第1工区)に伴う発掘調査報告書—

2003年2月

財団法人 大阪府文化財センター





調査区遠景（北東から）



B地区（湊遺跡）全景（南西から）



F地区（上町東遺跡）全景（東から）



C地区（溝遺跡）地滑り痕



D-1地区（上町東遺跡）線路盛土断面



B地区（溝遺跡）土器出土状況



B地区（溝遺跡）製塩土器出土状況

## 序 文

大阪府の南部に位置する泉佐野市は、古くは和泉国に属しており、茅渚と称していた地域にあたります。『日本書紀』によると、允恭天皇がこの地に「河内茅渚宮」をつくり、日根野においてしばしば遊獵に興じたことが記載されています。日根野の地は、泉佐野市域の中でもやや山側の地域ですが、中世には日根荘がおかれており、荘園に関する絵図や日記などの文献資料が残っていることから、中世荘園研究者のあいだでは著名な荘園の一つとなっています。

さて、泉佐野はもともと大阪湾沿岸地域の漁業の中心地として栄えた町であります。明治時代以降、繊維工業が進出してきたことから、大きな工場がつくられ、漁村のイメージはなくなっていきました。繊維工業から発展したタオル生産は、いまでも泉佐野を代表する産業の一つとなっています。さらに近年、沖合に埋め立てによる人工島をつくり、国際空港が開港したのに伴い、先の日根野の地を縦断する空港連絡道路や海岸部分を埋め立てたりんくうタウンなどの建設が相次ぎ、景観が随分変わりました。

今回の南海本線連続立体交差事業は、泉佐野駅から分岐して関西空港線へ向かう鉄道建設と連動しています。この事業（第1工区）により、湊遺跡・上町東遺跡・若宮遺跡の3遺跡の調査が必要となりました。湊遺跡は、弥生時代後期の製塩土器が多く出土することで知られています。今回の調査でもまとまった状況で製塩土器が検出されましたが、製塩炉などの作業場はみつかっていません。集落の規模も未知数ですが、大阪湾沿岸地域では最も大規模な製塩遺跡ということができ、今後の調査に期待したいところです。上町東遺跡では、中世の掘立柱建物が検出され、集落が営まれていたことがわかりました。現在の市街地の初期段階にあたるものかもしれません。また、この地域の鉄道は、100年以上も歴史があるということで、調査にあたっては、遺跡とは違った意味での歴史の重みを感じる点もありました。

最後に、調査の実施にあたり、大阪府土木部岸和田土木事務所をはじめ、大阪府教育委員会、泉佐野市教育委員会、南海電気鉄道株式会社の関係各位の方々より多大なご指導やご協力を得ることができ、心から感謝の意を表します。今後とも当センターへのご支援を賜りますようお願いいたします。

平成15年2月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好





## 例 言

- 1、本書は、大阪府泉佐野市湊1丁目他に計画された、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業（第1工区）に伴う、遺遺跡他の発掘調査報告書である。今回は、平成10～12年度に現地調査をおこなった部分についての報告である。
- 2、本調査地は、泉佐野市湊1丁目・旭町・大宮町地内に所在する。南海本線上り線路部分の調査であるため、非常に狭長な調査区となっている。そのため調査対象地は、周知の湊遺跡と上町東遺跡、若宮遺跡の範囲にまたがっており、本書では各遺跡を分けて報告する。
- 3、本調査は、南海電気鉄道株式会社の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、（財）大阪府文化財調査研究センターが実施した。現地調査は、調査部長 井藤 徹、参事兼調整課長 中西靖人、調整係長 藤永正明、南部調査事務所長 瀬川 健および同所調査第1係長 松岡良憲の指示のもと、同所調査第1係技師 田中龍男（平成11年3月まで）、中村淳磯（平成11年4月より）、島崎久恵が担当した。遺物整理は、調査部長 井藤 徹（平成14年3月まで）、玉井 功（平成14年4月より）、調整課長 赤木克祝、調整係長 藤永正明（平成13年3月まで）、森屋直樹（平成13年4月より）、南部調査事務所長 瀬川 健（平成14年3月まで）、渡邊昌宏（平成14年4月より）および同所調査第1係長 松岡良憲（平成13年3月まで）、橋本高明（平成13年4月より）の指示のもと、同所調査第1係技師 中村淳磯、島崎久恵（平成14年3月まで）が担当した。また、遺物の写真撮影は南部調査事務所主任技師 立花正治がおこなった。なお、組織統合のため平成14年4月より、（財）大阪府文化財センターと改称した。
- 4、現地調査は、平成10年12月22日から平成11年11月30日までと平成12年8月25日から平成12年11月10日まで実施した。基本的な整理作業は、現地調査と併行して現地事務所でおこない、現地調査終了後は、引き続き南部調査事務所でおこなった。平成12年4月1日から平成13年3月31日までは、南部調査事務所でも遺物整理作業を実施した。平成14年度に印刷製本をおこない、平成15年2月の報告書の作成をもって、すべての作業を完了した。
- 5、調査に際しては、川崎地質株式会社に出土木材の放射性炭素年代測定（AMS法）を依頼し、その結果を掲載した。
- 6、調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所をはじめ、関係諸機関や下記の方々のご援助を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）  
〈調査指導〉玉井 功（大阪府教育委員会）、鈴木陽一・冨田博之（泉佐野市教育委員会）、寒川旭（独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター）、藤田正篤（泉佐野市文化財愛護推進委員）、森村健一（堺市教育委員会）

- 7、 本書の作成・編集は中村と島崎が担当し、中村が執筆した。
- 8、 遺構写真の焼き付けは、フジカラー近畿に依頼した。
- 9、 本調査に関わる遺物、写真、カラースライド、実測図などの各種記録類は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡 例

- 1、 本書中のレベルはすべてT.P.（東京湾平均潮位）を用いている。本書中における座標値は、国土地院系に基づいており、すべてkm単位とする。
- 2、 本書中の方位は、国土地院第Ⅵ座標系の座標北を示している。調査地点で座標北は、磁北より東へ $6^{\circ} 17'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 23'$  振れる。
- 3、 土色の記述は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖20版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修（1997）に準拠した。
- 4、 実測図の縮尺は、各トレンチ平面図は1/300、基本層序断面図は縦1/40、横1/100、遺構図は平面図1/60、断面図1/40、遺物の実測図は1/4を原則とするが、必要に応じて縮尺を変えたものもある。
- 5、 遺構番号は、トレンチ毎で検出順に通し番号を付けている。したがって、必ずしも時代順にはなっていないため、時期の前後するものもある。
- 6、 写真の縮尺は任意である。

# 目 次

序 文	
例 言・凡 例	
第1章 位置と環境	1
第1節 位置と周辺の遺跡	1
第2節 文献による歴史的記録	4
第2章 調査にいたる経緯と経過	7
第3章 調査の方法	11
第4章 調査成果の概要	18
第1節 基本層序	18
第2節 遺構・遺物の概略	29
第5章 淡遺跡の調査成果	31
第1節 A地区	31
第2節 B地区	45
第3節 C地区	63
第4節 小 結	73
第6章 上町東遺跡の調査成果	74
第1節 D-1地区	74
第2節 D-2地区	87
第3節 E地区	98
第4節 F地区	107
第5節 小 結	126
第7章 若宮遺跡の調査成果	127
第1節 層序・遺構	128
第2節 遺物	129
第3節 小 結	132
第8章 既往の調査成果	133
第1節 淡遺跡	133
第2節 上町東遺跡	136
第3節 若宮遺跡	138
第9章 まとめ	139
第10章 分析・考察	141
第1節 <sup>14</sup> C年代測定	141
第2節 地形と景観復原	145
第3節 南海鉄道の変遷	147
遺物一覧表	
参考文献	

# 挿図目次

図1	泉佐野市位置図	1
図2	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
図3	佐野川左岸条里復原図 (「泉佐野市史」より)	5
図4	周辺地形図 (1/20,000 昭和7年陸軍陸地測量部作成)	6
図5	調査区周辺図 (1/5,000)	8
図6	調査区位置図	9・10
図7	施工順序図1	12
図8	施工順序図2	13・14
図9	調査高模式図	15・16
図10	基本層序図1 (A地区・B地区)	21・22
図11	基本層序図2 (C地区・D-1地区)	23・24
図12	基本層序図3 (D-2地区・E地区)	25・26
図13	基本層序図4 (F地区・若宮遺跡)	27・28
図14	A地区最終掘削面平面図	32
図15	A地区ピット群・土坑平・断面図	33
図16	土坑A-9平・断面図	34
図17	溝A-12・13平・断面図、溝A-13遺物出土状況1	36
図18	溝A-13遺物出土状況2	37
図19	A地区第2・3面平面図	39
図20	A地区出土遺物1 (溝A-13)	42
図21	A地区出土遺物2	43
図22	B地区最終掘削面平面図	45
図23	B地区第8-b面平面図	46
図24	溝B-86平・断面図	48
図25	B地区流路群平・断面図	49
図26	B地区土器群1・2遺物出土状況	50
図27	B地区土器群3・4遺物出土状況	51
図28	B地区第8面平面図	52
図29	溝B-38平・断面図	53
図30	土坑B-32・溝B-37平・断面図	54
図31	B地区第6面平面図	55
図32	B地区第3面平面図	56
図33	溝B-1平・断面図	57
図34	B地区出土遺物1 (土器群1・2)	58
図35	B地区出土遺物2 (土器群3・4)	59
図36	B地区出土遺物3 (土器群5・6)	60

図37	B地区出土遺物 4	61
図38	C地区最終掘削面平面図	63
図39	C地区地滑り痕平・断面図	64
図40	C地区第5面平面図	65
図41	C地区第4面平面図	66
図42	土坑C-12断面図	67
図43	溝C-9平・断面図	67
図44	溝C-7平面図、調査区横断面図	68
図45	溝C-8平・断面図	69
図46	C地区第3面平面図	69
図47	C地区第2面平面図	70
図48	C地区出土遺物1 (溝C-7・8・9)	71
図49	C地区出土遺物2	72
図50	D-1地区段丘崖コンター図・土層断面図	75
図51	D-1地区最終掘削面平面図、土層確認トレンチ断面図	77
図52	D-1地区礫群完掘状況平・断面図	78
図53	D-1地区礫群遺物出土状況	79
図54	D-1地区第2面平面図	80
図55	D-1地区調査区横断面図	81
図56	D-1地区線路盛土平面図	82
図57	D-1地区出土遺物1 (礫群)	84
図58	D-1地区出土遺物2	85
図59	D-2地区最終遺構面平面図	88
図60	D-2地区・協会調査区掘立柱建物模式図	89
図61	D-2地区ビット列平・断面図	90
図62	ビットD-16遺物出土状況・断面図	91
図63	D-2地区ビット平・断面図	91
図64	土坑D-44平・断面図	92
図65	土坑D-46礫検出状況図	93
図66	D-2地区出土遺物1 (土坑D-44・46)	95
図67	D-2地区出土遺物2	96
図68	E地区最終遺構面平面図	99
図69	E地区ビット群平面図	100
図70	E地区ビット断面図、ビットE-89平・断面図	101
図71	E地区溝群平面図	102
図72	E地区溝断面図	103
図73	E地区第3面平面図	104
図74	E地区出土遺物	105
図75	F地区・泉佐野市教委96-5区掘立柱建物模式図	108

图76	F地区最終遺構面平面図	109・110
图77	F地区建物1平・断面図	111
图78	F地区建物2平・断面図	113・114
图79	F地区建物3平・断面図	115
图80	溝F-174平・断面図	116
图81	溝F-154平・断面図	117
图82	溝F-76・土坑F-74・77平・断面図	118
图83	土坑F-80・176平・断面図	119
图84	土坑F-155・178平・断面図	120
图85	土坑F-175平・断面図	121
图86	F地区第3・4面平面図	122
图87	F地区出土遺物	125
图88	若宮遺跡最終遺構面平面図	127
图89	若宮遺跡井戸1平・断面図	128
图90	若宮遺跡出土遺物1(井戸1)	130
图91	若宮遺跡出土遺物2	131
图92	湊遺跡製塩土器・蛸壺・土錘出土地点	134
图93	上町東・若宮遺跡蛸壺・土錘出土地点	137
图94	$^{14}\text{C}$ 年代測定試料採取地点断面図	143
图95	$^{14}\text{C}$ 年代測定暦年補正資料	144
图96	調査区周辺コンター図	146

# 図版目次

- 図版 1 A地区(湊遺跡)遺構  
1 最終掘削面(航空写真)
- 図版 2 A地区(湊遺跡)遺構  
1 最終面北半部(難波側から) 2 第4面中央部(和歌山側から)  
3 第4面全景(難波側から) 4 第4面全景(和歌山側から)
- 図版 3 A地区(湊遺跡)遺構  
1 溝A-13 全景(北から) 2 溝A-13土器群 全景(海側から)  
3 溝A-13土器群 細部1 4 溝A-13 断面
- 図版 4 A地区(湊遺跡)遺構  
1 溝A-13土器群 細部2 2 溝A-13土器群 細部3  
3 溝A-13土器群 細部4 4 溝A-13土器群 細部5  
5 溝A-13土器群 細部6 6 溝A-12 断面  
7 溝A-23 土器出土状況
- 図版 5 A地区(湊遺跡)遺構  
1 土坑A-9 断面 2 溝A-21 断面  
3 溝A-15 断面 4 壁断面  
5 第3面全景(難波側から) 6 第2面全景(難波側から)
- 図版 6 B地区(湊遺跡)遺構  
1 第8面(航空写真)
- 図版 7 B地区(湊遺跡)遺構  
1 最終掘削面全景(難波側から) 2 第8-b面全景(難波側から)  
3 第8面北半部(難波側から) 4 第8面全景(難波側から)  
5 第8-b面(航空写真)
- 図版 8 B地区(湊遺跡)遺構  
1 ビットB-11 断面 2 ビットB-14 断面  
3 ビットB-21 断面 4 ビットB-48 断面  
5 溝B-83 土器出土状況 6 溝B-83 製塩土器出土状況  
7 壁断面南部 8 壁断面南部(砂層攪拌状況)
- 図版 9 B地区(湊遺跡)遺構  
1 土器群1 全景1 2 土器群1 全景2  
3 土器群1 細部1 4 土器群1 細部2  
5 土器群2
- 図版10 B地区(湊遺跡)遺構  
1 土器群3付近土層断面 2 土器群4  
3 土器群3 4 土器群6  
5 壁断面 6 流路群土層断面1(海側から)

- |      |                     |                          |
|------|---------------------|--------------------------|
|      | 7 溝B-86 断面          | 8 溝B-1 断面                |
| 図版11 | B地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 第6面北部(難波側から)      | 2 第6面南部(和歌山側から)          |
|      | 3 溝B-7・8 断面         | 4 溝B-4 断面                |
|      | 5 第3面南半部            | 6 第3面 畝溝検出状況             |
|      | 7 第2面中央部(和歌山側から)    | 8 第2面 畝溝検出状況             |
| 図版12 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 最終掘削面全景(難波側から)    | 2 最終掘削面全景(和歌山側から)        |
|      | 3 最終掘削面中央部(和歌山側から)  | 4 最終掘削面中央部(難波側から)        |
|      | 5 地滑り痕全景(難波側から)     |                          |
| 図版13 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 地滑り痕全景(海側から)      | 2 地滑り痕土層断面1(難波側から)       |
|      | 3 地滑り痕土層断面2(和歌山側から) | 4 地滑り痕検出状況1              |
|      | 5 地滑り痕検出状況2         |                          |
| 図版14 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 溝C-9断面            | 2 壁断面                    |
|      | 3 調査区横断面1(難波側から)    | 4 調査区横断面2〔溝C-7付近〕(難波側から) |
|      | 5 第5面中央部(和歌山側から)    | 6 第5面南半部(難波側から)          |
|      | 7 第5面全景(難波側から)      |                          |
| 図版15 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 第4面(航空写真)         |                          |
| 図版16 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 溝C-9 土器出土状況1      | 2 溝C-9 土器出土状況2           |
|      | 3 溝C-9 完掘状況         | 4 土坑C-12 断面              |
|      | 5 溝C-8 断面           | 6 溝C-8 木製品出土状況           |
|      | 7 溝C-7 全景           |                          |
| 図版17 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 溝C-7 北部           | 2 溝C-7 南部                |
|      | 3 溝C-7 中央部          | 4 溝C-7 石敷表面              |
|      | 5 第3面全景(和歌山側から)     |                          |
|      | 6 第3面南部             | 7 第3面鋤溝群                 |
| 図版18 | C地区(湊遺跡)遺構          |                          |
|      | 1 第2面全景(難波側から)      | 2 第2面全景(和歌山側から)          |
|      | 3 盛土層上面(難波側から)      | 4 盛土層上面(航空写真)            |
| 図版19 | D-1地区(上町東遺跡)遺構      |                          |
|      | 1 最終掘削面西半部(航空写真)    | 2 トレンチ3土層断面              |
|      | 3 トレンチ4土層断面         | 4 トレンチ5土層断面              |
|      | 5 トレンチ6土層断面         |                          |



- 図版20 D-1地区(上町東遺跡)遺構
- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1 第3面相当面全景(和歌山側から) | 2 第3面相当面全景(難波側から) |
| 3 調査区横断面(難波側から)    | 4 礫群全景            |
| 5 礫群検出状況           | 6 第2面西部           |
| 7 盛土層下土管検出状況(海側から) |                   |
- 図版21 D-1地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |                |
|------------------|----------------|
| 1 最終掘削面東半部(航空写真) | 2 第2面全景(難波側から) |
| 3 第2面東半部(難波側から)  |                |
- 図版22 D-1地区(上町東遺跡)遺構
- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1 盛土層除去面〔第2面〕(航空写真) |  |
|---------------------|--|
- 図版23 D-1地区(上町東遺跡)遺構
- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1 線路盛土上面全景1(難波側から) | 2 線路盛土上面全景2(和歌山側から) |
| 3 線路盛土上面全景3(難波側から) | 4 線路盛土上面全景4(和歌山側から) |
- 図版24 D-1地区(上町東遺跡)遺構
- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1 線路盛土断面細部1 | 2 線路盛土断面細部2 |
| 3 線路盛土検出状況1 | 4 線路盛土検出状況2 |
| 5 線路盛土断面    |             |
- 図版25 D-2地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 最終遺構面中央部(航空写真) | 2 最終遺構面西半部(航空写真) |
|------------------|------------------|
- 図版26 D-2地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| 1 最終遺構面全景(難波側から) | 2 最終遺構面中央部(和歌山側から) |
| 3 ビットD-6 断面      | 4 ビットD-13 断面       |
| 5 ビットD-16 断面     | 6 ビットD-22 断面       |
- 図版27 D-2地区(上町東遺跡)遺構
- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 ビットD-29 断面   | 2 ビットD-40 断面  |
| 3 土坑D-44 断面    | 4 土坑D-44 完掘状況 |
| 5 土坑D-46 礫検出状況 |               |
- 図版28 E地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 最終遺構面中央部(航空写真) | 2 最終遺構面西半部(航空写真) |
|------------------|------------------|
- 図版29 E地区(上町東遺跡)遺構
- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 1 最終遺構面全景(難波側から)  | 2 最終遺構面全景(和歌山側から)   |
| 3 最終遺構面西半部(難波側から) | 4 最終遺構面西半部中央(難波側から) |
- 図版30 E地区(上町東遺跡)遺構
- |              |                  |
|--------------|------------------|
| 1 壁断面        | 2 ビットE-29 断面     |
| 3 ビットE-88 断面 | 4 ビットE-89 断面     |
| 5 溝E-19 断面   | 6 溝E-28 断面       |
| 7 溝E-51 断面   | 8 第3面西端部(和歌山側から) |
- 図版31 F地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1 最終遺構面東半部(航空写真) | 2 最終遺構面中央部(航空写真) |
|------------------|------------------|

- 図版32 F地区(上町東遺跡)遺構
- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1 最終遺構面西半部(航空写真)  | 2 最終遺構面全景(難波側から) |
| 3 最終遺構面全景(和歌山側から) | 4 壁断面 東部         |
| 5 壁断面 西部          |                  |
- 図版33 F地区(上町東遺跡)遺構
- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1 建物1全景      | 2 ビットF-34 断面  |
| 3 ビットF-35 断面 | 4 ビットF-177 断面 |
| 5 建物1柱穴完掘状況  |               |
- 図版34 F地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |              |
|------------------|--------------|
| 1 建物2全景          | 2 ビットF-37 断面 |
| 3 ビットF-40・230 断面 | 4 ビットF-53 断面 |
| 5 建物2柱穴完掘状況      |              |
- 図版35 F地区(上町東遺跡)遺構
- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1 建物3全景      | 2 ビットF-83 断面  |
| 3 ビットF-92 断面 | 4 ビットF-180 断面 |
| 5 建物3柱穴完掘状況  |               |
- 図版36 F地区(上町東遺跡)遺構
- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 溝F-76 遺物出土状況1 | 2 溝F-76 遺物出土状況2 |
| 3 溝F-76 断面      | 4 溝F-154 遺物出土状況 |
| 5 土坑F-74        | 6 土坑F-74 断面     |
| 7 土坑F-77 断面     | 8 土坑F-80 断面     |
- 図版37 F地区(上町東遺跡)遺構
- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 土坑F-175 遺物出土状況 | 2 土坑F-176 断面      |
| 3 第4面西半部(難波側から)  | 4 第4面東半部(和歌山側から)  |
| 5 第3面東半部(和歌山側から) | 6 第3面西半部(難波側から)   |
| 7 第3面西端部(和歌山側から) | 8 西端追加トレンチ(難波側から) |
- 図版38 若宮遺跡 遺構
- |           |         |
|-----------|---------|
| 1 西半部     | 2 近代の池  |
| 3 東半部     | 4 東壁断面  |
| 5 井戸1上部断面 | 6 井戸1断面 |
- 図版39 A地区(湊遺跡)遺物  
溝A-13出土土器
- 図版40 A地区(湊遺跡)遺物  
溝A-13出土土器
- 図版41 A地区(湊遺跡)遺物  
溝A-13・23出土土器
- 図版42 A地区(湊遺跡)遺物  
溝A-1・土坑A-9・包含層出土土器、包含層出土石製品

- 図版43 B地区(淡遺跡)遺物  
土器群1出土土器
- 図版44 B・C地区(淡遺跡)遺物  
B地区土器群2・6・C地区包含層出土土器
- 図版45 B地区(淡遺跡)遺物  
土器群3・溝B-1・39・83・包含層出土土器類、溝B-38出土石製品
- 図版46 B地区(淡遺跡)遺物  
溝B-38・包含層出土蜻壺、包含層出土土錘
- 図版47 C地区(淡遺跡)遺物  
溝C-7・包含層出土陶磁器、溝C-1・7出土土製品
- 図版48 C地区(淡遺跡)遺物  
溝C-7・8・9・包含層出土土錘、包含層出土蜻壺・石製品
- 図版49 D-1地区(上町東遺跡)遺物  
礫群・包含層出土土器・石製品
- 図版50 D-1地区(上町東遺跡)遺物  
礫群・包含層出土蜻壺、溝D-62・包含層出土土錘、礫群出土土器
- 図版51 D-2地区(上町東遺跡)遺物  
土坑D-44・46出土土器、ピットD-26・包含層出土石製品
- 図版52 D-2・E地区(上町東遺跡)遺物  
ピットD-29・土坑D-44・46・包含層出土土器類、溝E-34・51・77・包含層出土土器類・石製品
- 図版53 F地区(上町東遺跡)遺物  
溝F-76・154出土土器
- 図版54 F地区(上町東遺跡)遺物  
溝F-154、土坑F-74・80・175出土土器
- 図版55 D-2・F地区(上町東遺跡)遺物  
ピットD-22出土土器、土坑D-44出土石製品、F-77・175・包含層出土土器類・石製品
- 図版56 岩宮遺跡 遺物  
井戸1出土遺物



# 第1章 位置と環境

## 第1節 位置と周辺の遺跡

### 1. 地理的環境

湊遺跡および上町東遺跡・若宮遺跡の所在する泉佐野市は、大阪府の南部に位置する。市域の広さは約54.4km<sup>2</sup>で、人口約9万8千人（平成12年8月現在）の都市である。北西は大阪湾に面し、南東には和泉層群より形成される和泉山脈がある。平成6年に開港した関西国際空港によって、幹線道路が整備され、関西の物流の拠点として、期待されている。

地形的に見ると、北から海岸平野部・丘陵部・山間部の三つに分けることができる。市域を流れる河川は、北から貝塚市と境をなす見出川、中心部の佐野川、泉南市・田尻町と境をなす壱井川の三河川が代表的であり、いずれも大阪湾に注ぎ込んでいる。また、中央部には中位から高位段丘、西部と南部には低位段丘及び沖積低地からなる和泉平野がひろがる。市域の中央部を流れる佐野川の左岸に段丘が広くひろがっており、湊遺跡および上町東遺跡、若宮遺跡はこの沖積段丘上に位置する。さらに細かく見ると、今回の調査区の西側には円田川が流れており、上町東遺跡・若宮遺跡部分にあたるトレンチは、海岸方向に張り出す段丘上の一帯高い部分に立地している。上町東遺跡の東端は段丘崖になっており、さらに東は旧河道の低地がひろがり、湊遺跡につながる。円田川により、上町東遺跡と若宮遺跡が分けられている。調査区の東側には、湊遺跡の中心部分が立地する別の段丘が、同じように海岸方向に張り出している。佐野川は、湊遺跡の東端を流れている。

### 2. 歴史的環境

泉佐野市域では多くの遺跡が知られていたが、関西国際空港建設に伴う開発が進んだことから発掘調査件数が増加し、遺跡の状況が徐々に明らかになってきている。中でも、空港にアクセスする道路や鉄道の新設に伴い、泉佐野市を縦断するかたちで大規模な発掘調査がおこなわれ、日根野地区の状況が判明してきた。また、これ以外にも市域では各種の開発が活発になったことから、湊遺跡や上町東遺跡に関しても新知見が明らかになりつつある。

湊遺跡は、昭和54年に道路工事の際に土器が出土したため、大阪府教育委員会が分布調査をした結果、確認された遺跡である。この調査では、古代末～中世と中世末～近世の遺構面が確認され、ピットや溝、土坑などが検出されている。古代末～中世では、瓦器や陶磁器のほか、土鏝や蛸蛸、釣針などもみられることから、漁業に従事する集落が存在していたことが想定されている。昭和55年から断続的に調査がおこなわれており、現在では弥生時代から江戸時代にかけての複合集落遺跡として、泉佐野市を代表する遺跡である。特に製塩土器が大量に出土する遺跡として知られている。

上町東遺跡は、昭和63年に工場建設の際に遺構や遺物が検出されたため、確認された遺跡である。この調査では、鎌倉時代の区画溝や掘立柱建物、土坑、井戸などが検出され、瓦器や土師器などの日常雑



図1 泉佐野市位置図

器の他、櫛未製品や鉄製小刀、ふいごの羽口などが出土している。現在まで断続的に調査がおこなわれており、主に12～14世紀代の集落跡として知られている。

若宮遺跡は、昭和62年に店舗建て替えの際に遺構や遺物が検出されたため、確認された遺跡である。現在まで調査が継続しておこなわれており、主に14世紀前半～近世の集落跡として知られている。

ここでは、時代順に泉佐野市内における周辺の遺跡の状況を簡単に紹介する。

旧石器時代では、遺構は検出されていないが、湊遺跡や三軒屋遺跡、郷之芝遺跡などでナイフ形石器が出土している。長滝遺跡では、各種のナイフ形石器のほか、楔形石器や彫器なども出土している。ただ、散発的な遺物の出土が確認されているのみであるため、全容は不明である。

縄文時代では、樫井川下流域の船岡山遺跡で後期の集落が、中流域の三軒屋遺跡で晩期の集落が検出されている。また、湊遺跡などからも晩期の土器や石器が出土しており、段丘部のみではなく、平野部でも遺跡の分布が確認されている。

弥生時代では、遺跡の分布はひろがるが、沖積低地の発達が少ないという地理的条件に制約されているため、進展はあまりみられない。縄文時代から継続している、樫井川流域の船岡山遺跡や三軒屋遺跡は、前期の代表的な集落で、土器のほか石庖丁や広鋸などの農耕具が出土している。樫井西遺跡や諸目遺跡、三軒屋遺跡では、方形周溝墓が検出されている。また、海岸部の湊遺跡や松原遺跡などで多くの製塩土器が出土しており、弥生時代後期から製塩がおこなわれていたことがわかる。

古墳時代では、三軒屋遺跡や諸目遺跡などで集落跡が検出されているほか、長滝古墳群では5世紀後半の方墳が相次いで発見されている。1号墳から人物埴輪、3号墳から石見型盾形埴輪が出土している。三軒屋遺跡では、韓式系土器や初期須恵器が出土しており、注目される。さらに三軒屋遺跡の上之郷地区では、7世紀中頃の終末期古墳として方墳の石ノ子古墳が検出されている。湊遺跡や松原遺跡では、製塩土器が出土しており、弥生時代から継続して製塩がおこなわれていたことが知られているが、古墳時代中期には見られなくなる。

古代では、白鳳時代建立として知られる禪興寺跡がある。寺域ははっきりしないが、推定域の調査で、山田寺式、川原寺式、紀寺式などの軒丸瓦が出土している。飛鳥時代では、湊遺跡のほか三軒屋遺跡などで集落が検出されている。また、長滝遺跡では覆い屋付きの井戸が検出され、斎串や独楽などが出土したため、なんらかの祭祀がおこなわれたことが考えられている。奈良時代では、湊遺跡から多くの掘立柱建物跡が検出されており、漁漁具の蛸壺や土鍾のほか、「和同開珎」なども出土している。また、長滝遺跡では、瓦窯跡が検出されているが、供給先は明らかになっていない。平安時代では、湊遺跡のほか、日根野遺跡、上之郷遺跡、三軒屋遺跡、船岡山遺跡などで住居跡などが検出されている。上之郷遺跡では、緑釉陶器やふいごの羽口などが出土しており、有力農民の屋敷地と考えられている。

中世では、ほぼ市内全域に遺跡の分布がひろがるのが確認されている。湊遺跡のほか、日根野遺跡や上町遺跡、樫井西遺跡、机場遺跡などで大規模な集落跡が検出されている。上町遺跡は15世紀、上町東遺跡は13～14世紀に限り存在した集落と考えられている。また、文献で知られている壇波羅密寺では、発掘調査により土坑墓群などが検出されている。

近世では、中世からの集落が存続して、現在の泉佐野市街地を形成するようになる。主として、若宮遺跡などがあげられ、屋敷地や掘立柱建物群や土坑、井戸などが検出されている。遺物は、近世陶磁器や土師器、土鍾などが多く出土している。



- |            |           |            |             |
|------------|-----------|------------|-------------|
| 1. 湊遺跡     | 12. 禮波羅遺跡 | 23. 中ノ池遺跡  | 34. 岡口遺跡    |
| 2. 上町東遺跡   | 13. 市場東遺跡 | 24. 中町遺跡   | 35. 中嶋遺跡    |
| 3. 若宮遺跡    | 14. 井原池遺跡 | 25. 末廣遺跡   | 36. 白水池遺跡   |
| 4. 井原の里遺跡  | 15. 市場南遺跡 | 26. 安伝遺跡   | 37. 日根野駅東遺跡 |
| 5. 森山遺跡    | 16. 市場西遺跡 | 27. 長滝遺跡   | 38. 北尻遺跡    |
| 6. 貝田遺跡    | 17. 上町遺跡  | 28. 南中安松遺跡 | 39. 俱利伽羅遺跡  |
| 7. 上瓦無遺跡   | 18. 若宮南遺跡 | 29. 岸ノ下遺跡  | 40. 降井家惣敷跡  |
| 8. 上瓦屋南遺跡  | 19. 大西遺跡  | 30. 岡ノ崎遺跡  | 41. 大久保B遺跡  |
| 9. 山出遺跡    | 20. 大塚遺跡  | 31. 中島遺跡   | 42. 大久保D遺跡  |
| 10. 佐野王子跡  | 21. 松原遺跡  | 32. 十二谷遺跡  | 43. 大久保D遺跡  |
| 11. 禮波羅帝寺跡 | 22. 中園遺跡  | 33. 小塚遺跡   |             |

図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## 第2節 文献による歴史的記録

淡邊跡の所在する泉佐野市域は、古くは和泉国に属し、茅渚（血沼・珍努）と称しており、その沖合は茅渚の海と呼ばれていた。霊龜2年（716）に大鳥・和泉・日根3郡を分離して和泉監が設置されるまでは、この地は河内国の範囲内であった。天平宝字元年（757）に和泉監の旧管内が和泉国として独立し、五畿内の一つに数えられるようになった。『日本書紀』垂仁天皇35年9月の条に「五十瓊敷命ヲ河内国二遣シテ、高石池・茅渚池ヲ作ラシム」とあり、さらに『古事記』垂仁天皇の段にも「印色入日子命は血沼池を作り、又、狹山池を作り、又、日下高津池を作りたまひき」とある。この茅渚池に関しては、現在の府立泉佐野高校の東にある布池や市立第三中学校の南東の道ノ池に比定する説があり、はっきりしていない。さらに『日本書紀』允恭天皇8年の条に「天皇、則ち更ニ宮室ヲ河内茅渚ニ興造テテ、衣通郎姫ヲ居ラシメタマフ。此ニ因リテ、屢日根野ニ遊獵シタマフ。」とあり、天皇が衣通姫のために「河内茅渚宮」を造り、しばしば日根野で遊獵に興じたと記されている。これに続く記述により、9年から11年にかけて天皇が何度もこの地を訪れていることがわかる。茅渚宮は、現在の泉佐野市上之郷にあったものと推定されている。『日本紀略』によると、延暦22年（803）に桓武天皇の和泉国日根野行幸があり、『日本後紀』では延暦23年（804）に、日根野や垣田野（貝出付近）、熊取野（熊取町）などで遊獵に興じたと記されている。さらにこの時、日根行宮を拠点としていたと記されているため、離宮のような施設がこの地に存在していたことがわかる。

この地域における古代条里制については、文献史料がなく、いつの時期から施行されたものか不明であるが、泉佐野市域には、小字名で「一ノ坪」などの地名が残っており、条里制の地割りが残存している地域が数カ所みられる。今回の調査区周辺の佐野川流域でも「一ノ坪」という地名が残っており、高取正男氏が『泉佐野市史』の中で条里の復原案を提示されている。この復原案では、調査地である南海本線線路部分がちょうど含まれている。

平安遷都以降、南海道が海岸線にはほぼ平行して通じており、これが後世の熊野街道に転じた。このため、日根郡は熊野や高野山への参拝が盛んになると、交通の要地となった。文献史料によると、永承3年（1048）に高野山へ参拝した藤原頼通は、「日根」に往復とも宿泊している。また、久安3年（1147）から3年間頻繁に高野山に登山した仁和寺の覚法法親王は、日根湊で乗下船するのが通例であったという。一方、藤原定家の『後鳥羽院熊野御幸記』（延仁元年（1201））には、泉佐野市域の王子として佐野王子と初井王子が記載されている。

泉佐野市域における古代～中世の荘園に関しては、日根庄をはじめとして、鶴原庄、佐野庄、珍北庄・珍南庄などが知られている。この中で中世の日根荘に関する文献史料はかなり豊富で、主なものとしては、荘園領主であった九条家に文書（日根荘関係文書）が多く残されているほか、九条政基が当地に滞在した際の詳細な日記（『政基公旅引付』）や日根野村絵図などが挙げられる。一方、寛元3年（1245）7月17日の『関東下知状案（高野山文書）』は、六波羅探題北条重時が、日根郡近木郷の地頭遊馬三郎忠基代僧朝寛と内膳綱頭曳御厨下司左衛門尉源基光との間でおきた、近木浦支配をめぐる紛争に裁決を下したものであるが、その中で佐野庄と鶴原庄は、法性寺禪定殿（関白藤原忠通）が立庄したものと記載されている。享祿2年（1529）の『飯室料頭職宛行状（中家文書）』では、「佐野三か庄」と記載されており、佐野庄は中庄・井原村・塩波羅密寺村の三村からなっていたものと考えられる。今回の調査地に隣接する中庄村は、この一つにあたるものといえる。





図3 佐野川左岸桑里復原図（『泉佐野市史』より）



図4 周辺地形図 (1/20,000 昭和7年陸軍陸地測量部作成)

佐野は、堺から紀州に通じる街道に沿っており、港もあったため、早くから市場としてにぎわっていたが、その始まりを示すような文献史料はみつからない。ただ、室町時代には、すでに毎月二と七の日に定期市が立つことになっていたようである。日根荘で執務を行っていた前関白九条政基も、文龜元年(1501)4月12日の稲荷祭に際して、わざわざ使いを佐野の市に遣わして魚を買わせている。

天正5年(1577)の織田信長による雑賀一揆の討伐に際しては、泉佐野市域を含めた泉州南部から和歌山にかけての地域が戦場となり、多くの村が焼かれる被害をうけた。この際、信長が佐野に築城を命じ、佐久間盛政・羽柴秀吉・荒木村重・池田信輝らが工事にあたったという。さらに豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して、佐野漁民が水先案内を勤め、めざましい活躍をしたため、その功績により、後に対馬諸浦の漁業権が認められることとなった。これが佐野網方の起源であったと伝えられている。

泉州地域における検地は、天正13年(1585)と文禄3年(1594)の太閤検地と慶長9年(1604)に徳川家康によっておこなわれた検地が主要なものである。この地域の支配は、秀吉の時代は直轄領であったが、江戸幕府の成立以降は、一部を除き岸和田藩領であった。中庄村は、慶長初年より小堀遠江守領であり、経過は不明な部分もあるが、天明8年(1788)6月の上地まで継続していたものと考えられている。それ以降は、天領であった。

元禄期には、佐野が町場として急速な発展をみせた。正徳3年(1713)の浦改では、佐野の家数1,666戸、人口8,597人で、泉州では堺に次ぐ人口の多い町であったといえる。佐野の発展とともに町続きに湊浦と佐野新町が発達した。元禄2年(1689)の『佐野浦庄屋年寄浦人等訴状(写)』や『湊浦庄屋年寄浦人等陳状(写)』などによると、湊浦と佐野浦の間で浦役銭や湊村の浜の整備、難破船の処理などをめぐって紛糾し、奉行所に訴えている。元禄9年(1696)の『泉州日根郡中庄湊村帳』によると、家数181軒、人口610人であったという。

## 第2章 調査にいたる経緯と経過

大阪湾の泉州沖に計画された関西国際空港建設に伴い、アクセス道路や鉄道の建設（現関西空港自動車道、空港連絡道路、J R・南海関西空港線）、関連施設建設および海岸部の埋め立て事業（りんくうタウン）などの開発が急進に進み、泉佐野市を中心とした地域における文化財調査もそれに伴い、件数が増加した。特に、空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地については、周知の遺跡や未確認の遺跡の存在が予想されるため、大阪府教育委員会文化財保護課と担当各課の間で取り扱いが協議された。その結果、遺跡の分布状況の把握を目的とする分布調査を、大阪府教育委員会文化財保護課が実施することとなった。これを受けて、昭和60年2月に空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地および、南海電鉄南海本線泉佐野駅から羽倉崎駅間、国鉄（現J R）阪和線熊取駅から日根野駅を通り空港連絡鉄道計画予定地までの間で、現地調査をおこなった。この結果、「中間遺跡」が新規発見遺跡として認定された。

その後、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業という一連の関西国際空港関連の事業に伴い、平成2年2月に泉佐野市大西2丁目から松原1丁目において、(財)大阪府埋蔵文化財協会が試掘調査をおこなった。これを受けて、平成2年度には中間遺跡において、発掘調査が開始され、試掘調査も継続しておこなわれた。また、これに先立ち、平成元年には南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査が、(財)大阪府埋蔵文化財協会により、湊遺跡でも開始されている。南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業は、井原の里駅から泉佐野駅間の主要地方道泉佐野熊取線との交差点から高架になり、関西国際空港へのアクセスとして泉佐野市大西付近で本線から分岐し、空港連絡道路と合流し空港へ至るものである。当初の調査対象地は、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分である。

さらに、平成3年度には、同じく泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、(財)大阪府埋蔵文化財協会が、続けて中間遺跡と大西遺跡の発掘調査と、南海本線線路敷に沿った部分（湊遺跡・上町東遺跡・上町遺跡・大西遺跡・中間遺跡）において試掘調査をおこなった。

平成4年度も継続して、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、(財)大阪府埋蔵文化財協会が、大西遺跡の発掘調査と試掘調査（上町遺跡隣接地〔泉佐野駅構内〕）をおこなった。特に、平成3～4年度は、関西国際空港へのアクセス線の新規建設工事が優先されることから、中間・大西遺跡の調査を中心におこなわれた。また、この時期には、同時に空港連絡道路の建設に伴う発掘調査もおこなわれており、南海本線をまたぐ部分においても、中間遺跡の調査が進められていた。

平成5年度には、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、(財)大阪府埋蔵文化財協会が、中間遺跡と上町遺跡の発掘調査をおこなった。この時点で、南海分岐線事業に伴う発掘調査はほぼ終了しており、平成6年の関西国際空港開港に向けて、空港連絡道路と連絡鉄道の建設が急ピッチでおこなわれた。

平成6年には関西国際空港が開港し、それに伴うアクセス道路や鉄道も一応完成したが、関連事業は継続して計画されており、さらに開発が進んでいる。泉佐野都市計画道路事業と南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業は継続事業として、空港開港後も計画が進められることとなった。

平成7年度には、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、泉佐野市教育委員会が、上町東遺跡の発掘調査をおこなった。調査主体は変わったが、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分の調査であり、継続事業であることから、調査方針に変更はなく、幅約10mの狭長なトレンチ調査となった。調査は平成8年度にも断続的におこなわれ、平成9年度に現地調査を終了した。また、同事業の中で、泉佐野駅駅舎が高架化することから、泉佐野駅北側部分において再開発が計画され、若宮遺跡の範囲内にあたることから、それに伴う発掘調査を泉佐野市教育委員会がおこなうことになった。現地調査は、当該地区を分割して、平成9年度まで断続的におこなわれた。

平成9年度に、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分の現地調査が終了したことから、仮線路工事が開始された。これに伴い、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業の本線高架化工事の計画が具体化したことから、平成10年11月に、大阪府教育委員会と大阪府、泉佐野市、南海電気鉄道株式会社、(財)大阪府文化財調査研究センターの5者間で「南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業における埋蔵文化財調査に関する協定」が締結された。これに基づき、平成10年12月に南海電気鉄道株式会社との委託契約を交わし、(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施することになったものである。埋蔵文化財調査工事は、単独でおこなわれるものではなく、南海本線（泉佐野市）連続立体化工事の中に組み込まれたものとなっている。そのため、車両が仮線路での運行を開始した後、本線部分の線路撤去、盛土除去、土留め用の鋼矢板打設という流れがスムーズにおこなわれた。鋼矢板打設終了後、順次調査に入ることになり、平成10年12月より現地調査を開始した。今回の調査は、全体計画の中では、調査の前半部分にあたる。調査方法については、次章で述べるが、調査終了後、直ちに上り線線路（難波行き）の高架橋建設工事にかかり、完成後に後半部分の調査に着手する予定である。

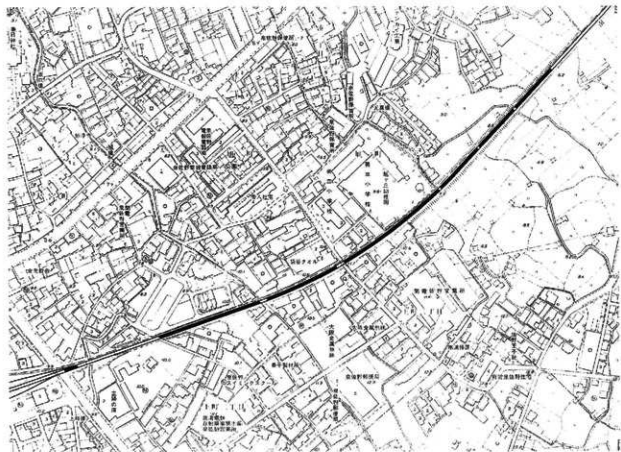


図5 調査区周辺図 (1/5,000)

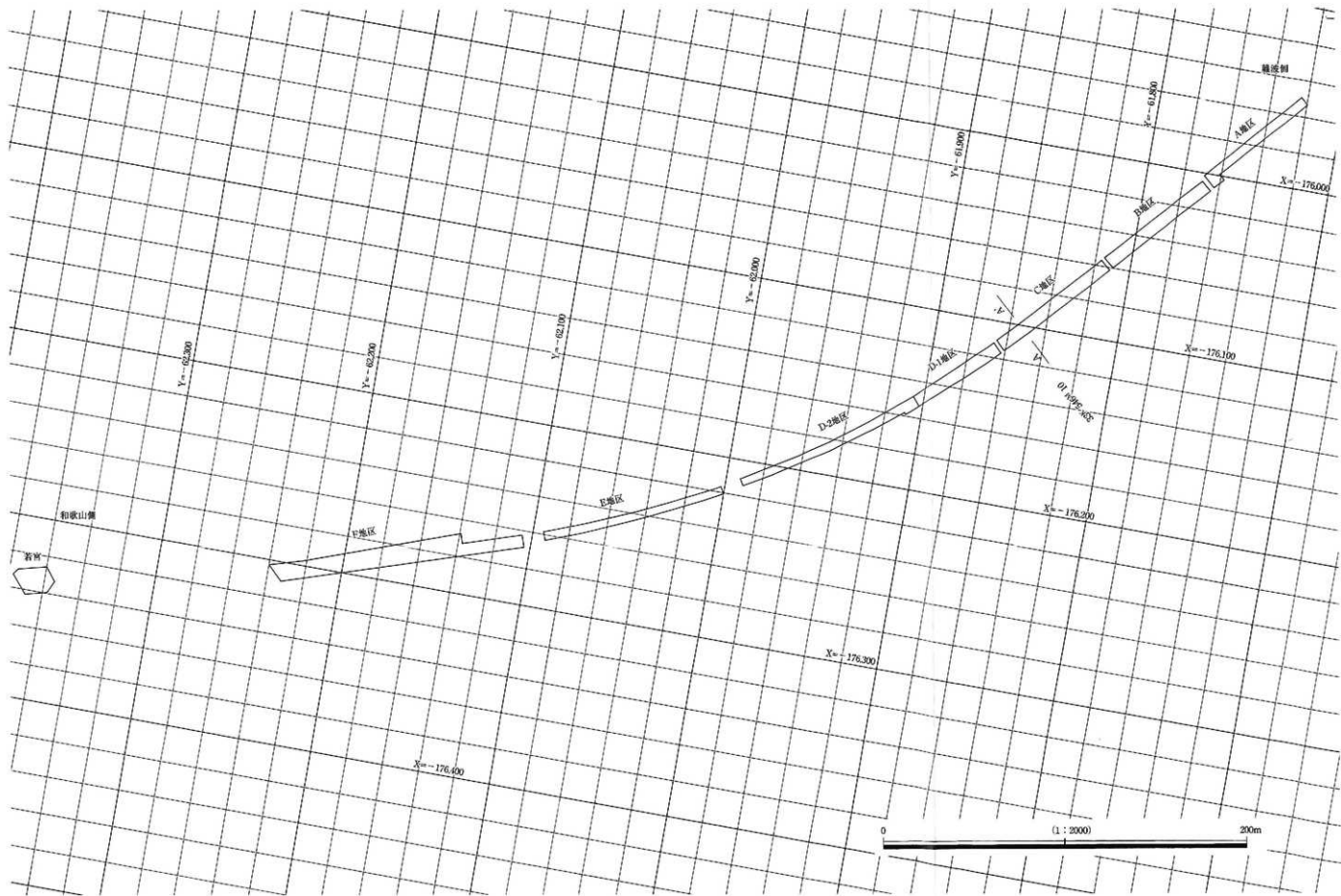


图6 調査区位置図

### 第3章 調査の方法

今回の調査区は、南海本線の線路敷地内であり、線路の高架工事と併行して発掘調査をおこなうという制約のため、最大幅約12m、全長約800mの非常に狭長なものになっている。平成10～11年度の調査区は、橋脚下部工の単位および調査区を横切る水路などにより、全体をA～Fの7地区に分けた。さらに、D地区のほぼ中央部で、自然地形による大規模な段差がみられることから、D地区を2分割した。また、平成12年度の調査区は、若宮遺跡の調査ということで、地区を分けている。A～E地区では、調査時点ですでに橋脚工事に伴う鋼矢板による土留めが施されていた。F地区は、調査時には鋼矢板による土留めはなく、1割勾配のオープンカット工法で掘り下げた。若宮遺跡部分は、遺構面が浅いため、調査時に調査区の周囲に土留めを施すことはなかった。

調査にあたっては、1時間あたり約15往復運行されている南海本線のダイヤを妨げない方法をとったため、非常に煩雑な施工方法がとられている。発掘調査は、全体の本体工事の1セクションとして位置付けられており、工事の流れを妨げないよう、施工業者とセンター側との協議の上で安全に、迅速に調査を進めていった。施工方法は、図7～8に示した方法で進められている。鋼矢板による土留め工と電車運行の安全性確保が重視されており、通常の上木工事に比べて、極めて安全性が優先される現場である。今回の調査は、この中で難波方面行き上り線の高架橋建設の事前調査にあたる5段階に相当する。発掘調査の後、すみやかに上り線高架橋工事が始まり、完成後には、ふたたび発掘調査がおこなわれる予定（9段階）である。

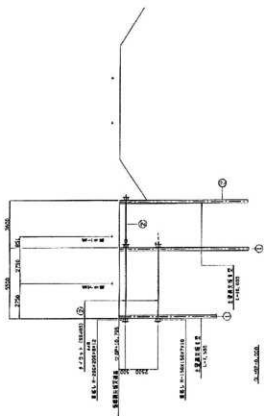
また、A～D地区では、谷状地形が調査区を横切っていることから、調査対象面が深くなることが予想されたため、通常よりやや長めの鋼矢板による土留めおよびH鋼を用いた支保工を施している。当初予定では、橋脚基礎部分のレベルまで発掘調査をおこなうこととなっていたが、D-2～F地区では、地山面が比較的浅かったことから、地山面で調査を終了し、そこまでは掘り下げていない。一方、B～D-1地区では、地山面が予想以上に深くなったことから、すべて土留め支保工の安全上の最深レベルまで掘り下げている。しかし、D-1地区の一部でさらに深くなる部分があり、安全上掘り下げることができず、線路敷設のための盛土が除去できない部分が生じている。この状況は、調査前から予測されていたため、安全上の限界点の協議がおこなわれ、調査区のほぼ中央に1m四方で深さ1mのトレンチを6ヶ所掘削することで、さらに下部の堆積状況を観察することができるようになった。ただ、安全を考慮した結果、残念ながらこの部分でも、一部は地山面までの掘削はできなかった。

A地区は、泉佐野方面に向かって高架橋に上る上り口部分にあたることから、本体工事において橋脚を施工する予定はなかった。このため、発掘調査においても深く掘り下げることができず、本体工事における最終掘削斜面に沿って調査最終遺構面となったため、必ずしも遺構面はそろっていない。ただ、A地区の西端部では、橋脚がかかるため、部分的に支保工を施し、橋脚基礎部分のレベルまで発掘調査をおこなうことができた。

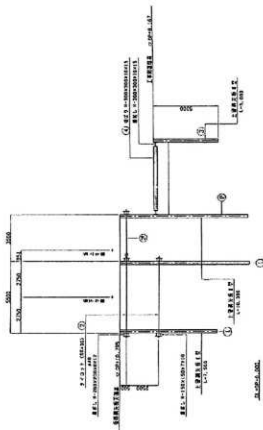
B～C地区では、土留め支保工の設置状況が必ずしも同レベルではなかったため、橋脚単位で最終面のレベルがそろっていない。ここでも、安全を考慮した結果、最終掘削面が制約をうけたため、トレンチの途中で段差が生じている。

各遺構の検出は、(財)大阪文化財センター「遺跡調査基本マニュアル」(1988)をもとにおこなった。

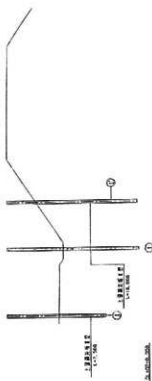
2  
33°54'0"10



4  
33°54'0"10



1  
33°54'0"10



3  
33°54'0"13

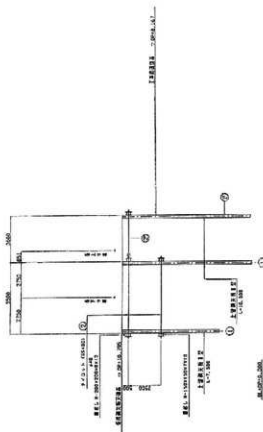
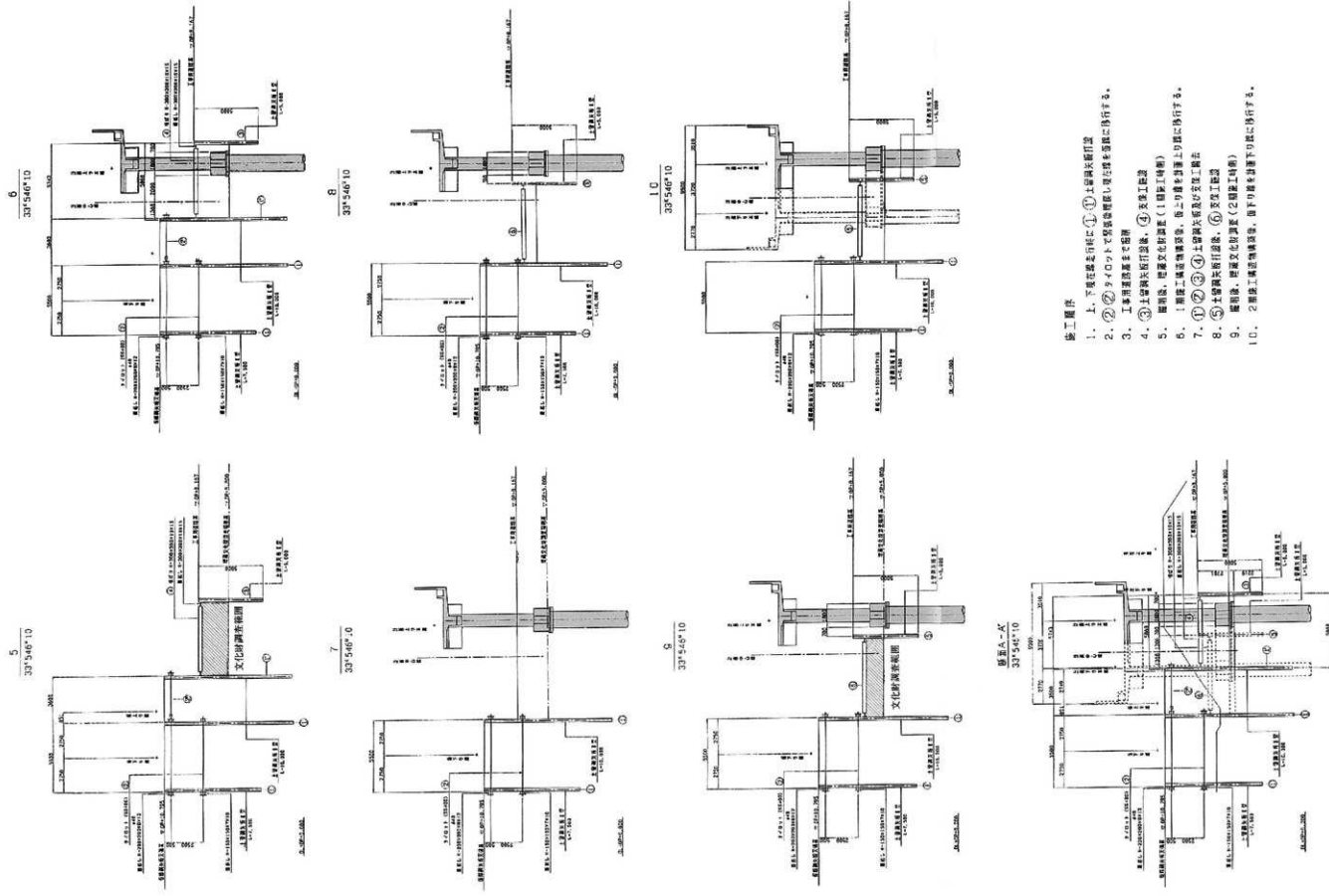


图7 施工顺序图1



竣工順序

1. 上下階梁を引掛り①②上階梁架設打設
2. ②③のり下り屋根板敷き④⑤上階梁架設打設
3. 工事用足場架設打設
4. ③上階梁架設打設後、④天窓工架設
5. ⑤⑥⑦⑧⑨上階梁架設打設後、④天窓工架設
6. ①②③④⑤上階梁架設打設後、⑥天窓工架設
7. ①②③④⑤上階梁架設打設後、⑥天窓工架設
8. ⑤⑥⑦⑧⑨上階梁架設打設後、⑥天窓工架設
9. ⑤⑥⑦⑧⑨上階梁架設打設後、⑥天窓工架設
10. ②③上階梁架設打設後、⑥天窓工架設

図8 施工順序図2



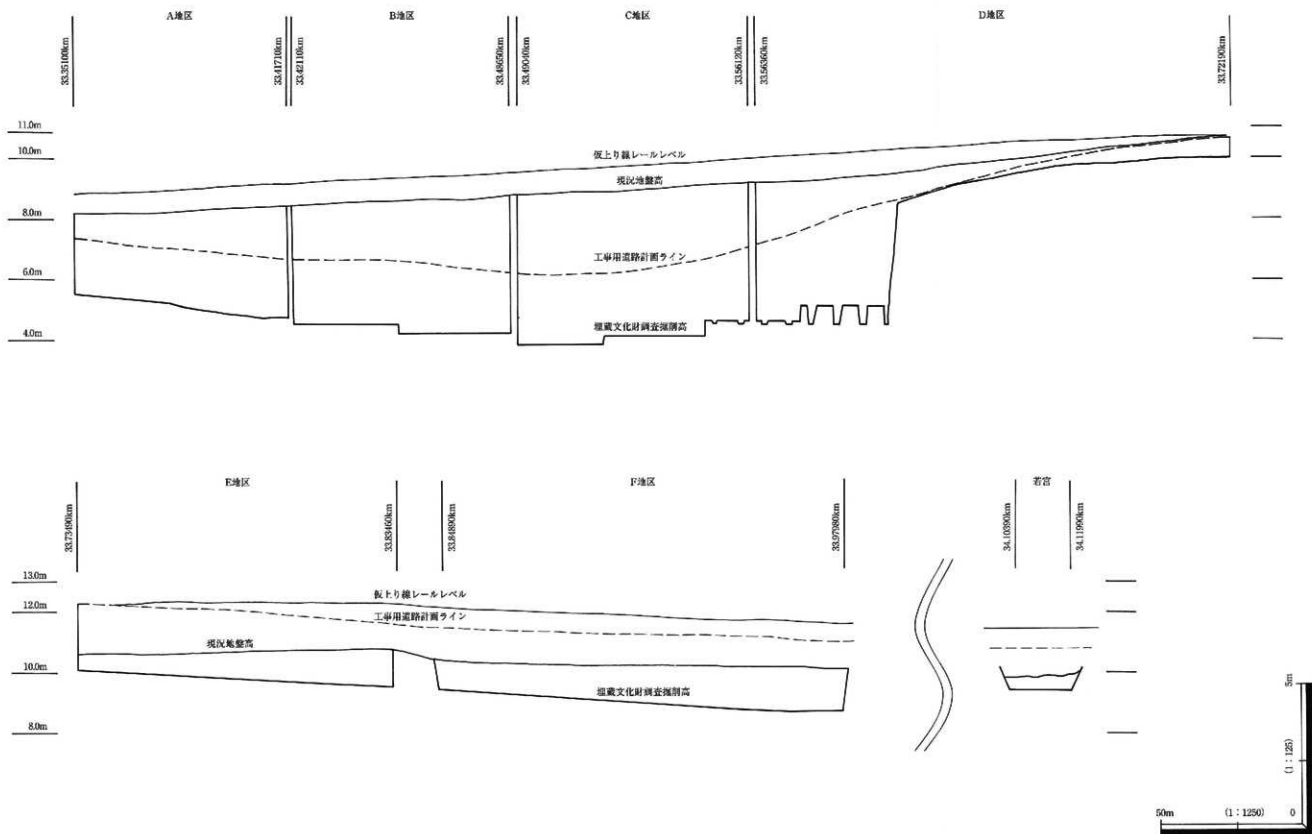


図9 調査高模式図

基本的には、遺構などの記録にあたって、国土座標（第Ⅶ座標系）を用いて平面位置をおさえる方法をとっており、本書においてもこの方法で表現している。このため、方位は座標北を使用している。当センターでは、遺物の取り上げは、基本的にはこの座標を基に10mメッシュを作成し、それぞれの区画をアルファベットと数字で表すことによって、出土位置を管理する方法をとっている。ただし、今回の調査では、調査区が狭長で、座標軸に対して大きく傾くことから、煩雑さを避けるため、あえてこの座標軸の区画をとらず、各調査区における、難波側からの距離を用いた区分をもとにした。たとえば、難波側10m～20mという表現方法で、遺物の取り上げをおこなっている。調査区の幅が10m未満であるという特殊事情から、今回のような調査区の形状の場合は、有効であると考えられる。

水準は、全国的に共通基準となっている東京湾平均潮位（T.P.）を使用している。近畿地方では、土木工事などで、大阪湾最低潮位（O.P.）を使用する場合もあるが、発掘調査では、T.P.を使用するのが一般的である。両者のレベル差は、 $T.P.0m = O.P.+1.3m$ である。

遺構番号は、基本的には各トレンチにおける検出順に通し番号でつけている。遺構の種類に関わらず、通し番号をつけたため、検出時には、「遺構1」・「遺構2」・・・の順で表現している。整理段階で、遺構の性格を示すため、遺構名を番号の前につけた。このため、たとえば「遺構1」＝「溝1」、「遺構2」＝「土坑2」・・・という表示方法となっている。遺構名の後についている番号が、必ずしも遺構の数を表しているわけではなく、前の例では、「土坑1」は存在しないこととなる。

遺構面番号は、基本的には各トレンチで検出順に上層から番号をつけた。調査区全体の層序をまとめることは困難であったため、各トレンチにおける同一番号の遺構面が、必ずしも同一面とは限らない状況である。

遺構全体の実測作業は、最終遺構面および重要な遺構面に関してはヘリコプターによる写真測量および図化作業（1/20、1/50、1/100）を測量業者に委託しておこなった。なお、若宮遺跡については、泉佐野駅に隣接することや、民家が密集している地域であることから、安全を優先するためにヘリコプターではなく、レッカーを用いた写真撮影により、図化作業をおこなった。他の遺構面の全体図や遺構図は、平面測量をおこなった。上層断面図は、1/20で実測しており、遺構平面図に関しては全体図を1/100、遺構図や遺物出土状況図などは適当なスケールを使用している。

記録写真に関しては、遺構全体、遺構、遺物出土状況、土層断面などを35mmカメラ（白黒、カラー）と適宜6×7カメラ（白黒、カラー）を使用して撮影をおこなった。現場での写真撮影は、調査担当者がおこなった。また、遺物写真に関しては、南部調査事務所写真室が担当した。これらの記録写真のネガやスライドなどは登録・整理され、当センターで保管している。

遺物整理の基礎的な作業として、出土遺物は、登録後に順次洗浄・注記などをおこなった。さらに、接合・復原作業の後、遺物を選別し、特徴的な遺物に対しては実測・写真撮影などをおこなった。遺構図面や遺物実測図なども記録写真と同様に登録・整理されており、当センターで保管している。

## 第4章 調査成果の概要

遺構面番号は、基本的には各トレンチで検出順に上層から番号をつけた。調査区全体の層序をまとめることは困難であったため、同一番号の遺構面が必ずしも同一面とは限らない状況である。特に、AからD-1地区では、遺構面数が多く、流路による土層の攪拌が著しいことから、遺構面をそろえることが困難な部分が見られる。一方、D-2からF地区・若宮遺跡では、包含層自体が薄い堆積であったことから、遺構面数も少なく、あまり混乱はみられない。ただ、後世の削平や攪乱が多くみられることから、包含層の残存状況は悪く、遺構面の保存状況も良好ではなかった。

### 第1節 基本層序

各地区の基本層序に関しては、図10～13に示しているが、調査区が遺跡をほぼ東西方向に横断している（海岸線に対して平行である）ため、地形を表現するのに最も良好な位置で土層観察をすることができた。ただし、現場での土層観察に関しては、各トレンチで事情が異なっており、実際には同一方向で断面図を作成できたわけではないので、整理作業の段階で一部反転をおこなって、方向を揃えている。最終的には、海から山を見た方向で土層断面図を作成したことになり、左方が東方向（難波側）で右方が西方向（和歌山側）である。また、AからC地区は谷地形にあたり、掘削限界によって地山まで掘削することができなかったことから、限界深度までの図面となっている。D-1地区では、線路建設時の盛土が限界深度まで及んでいることから、縦断方向の土層断面図の作成はおこなっていない。ただ、線路建設時の土盛りの状況が、横断方向で良好に観察できたため、D-1地区ではこの土層断面図を適用することにした。

各トレンチの土層に関しては、調査成果の項で詳しく述べることとするため、ここでは、全体の概略にとどめる。

調査区全体の地形を概観すると、調査区の東半部（難波側）は湊遺跡部分にあたるが、A地区からD-1地区にかけて緩やかな下り斜面となり、D-1地区からD-2地区にかけての段丘崖で急に高くなる。上町東遺跡部分のD-2～F地区から若宮遺跡にかけては、緩やかな上り斜面となり、調査区西隣の泉佐野駅付近で最も高くなる。一方、調査区の東隣でも、現在の湊集落が営まれている部分が高い位置にあり、遺跡の中心部分である。A地区からD-1地区にかけて、大きな谷地形を呈しており、現在では耕作地として利用されている。段丘崖の上では、建物が密集しており、市街地を形成している。

今回の調査部分は、南海本線の線路敷部分であるため、調査前まで地表面には線路が敷設されており、電車が運行していた場所である。この線路は、明治30（1897）年10月に開通したものであり、それ以来路線が変更されていないことから、ほとんど改変をうけていない。掘削を開始して、まず出てくる土層は、線路建設時の盛土である。この盛土に関しては、通常の盛土と性格が異なるものと考えられることから、ここでは「線路盛土」と呼称することとする。列車の運行に支障のないよう線路の水平を保つために盛られたものである。D-2地区から若宮遺跡にかけての部分では、線路盛土は比較的薄い層であるが、A地区からD-1地区にかけては、谷地形を横断するかたちで土橋状の土盛り（築堤）がつけられていることから、非常に厚い層となっている。最も厚いところでは3mを超えるほどである。特に、

## A地区基本層序土色一覧 (図10)

1. 盛土
2. 10YR3/1黒褐色 シルト混粗～細砂
3. 10YR6/1褐灰色 シルト混粗～細砂
4. 2.5YR5/4にぶい赤褐色 シルト混粗～細砂
5. 10YR7/6明黄褐色 シルト混粗～細砂
6. 10YR6/6明黄褐色 シルト混粗～細砂
7. 10YR7/8黄橙色 細砂混シルト
8. 5YR4/4にぶい赤褐色 シルト混細砂
9. 7.5YR5/1褐灰色 粗～細砂混シルト
10. 欠番
11. 2.5Y6/4にぶい黄色～4/4オリーブ褐色 シルト混細砂
12. 2.5Y7/6明黄褐色～7/4浅黄色 細砂
13. 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト混粗砂
14. 7.5YR7/8黄橙色 シルト混粗砂
15. 2.5Y6/2灰黄色 粗砂混礫
16. 7.5YR7/6橙色 シルト混細砂
17. 7.5YR6/8橙色 シルト混細砂 Mn非常に多く含む
18. 5YR3/4暗赤褐色 細砂混シルト
19. N5/0灰色 細砂
20. 2.5GY7/1明オリーブ灰色～6/1オリーブ灰色 粗～細砂
21. 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト  
10YR7/1灰白色 粗砂の互層
22. 10YR3/3暗褐色 シルト  
10YR7/2にぶい黄橙色 粗砂の互層
23. 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト  
2.5Y8/6黄色 細砂の互層 礫含む
24. 5B7/1明青灰色 細砂
25. 2.5Y4/4オリーブ褐色 粗砂
26. 10YR7/8黄橙色 シルト混細砂
27. 10YR7/2にぶい黄橙色 細砂混シルト
28. 欠番
29. 欠番
30. 10YR3/1黒褐色 シルト混細砂
31. 10YR2/1黒色 シルト混細砂
32. 10YR5/1褐灰色 シルト混細砂
33. 7.5YR2/1黒色 シルト混細砂
34. 7.5YR6/1褐灰色 粗砂混礫
35. N3/0暗灰色 粗砂
36. N2/0黒色～5/0灰色 細砂混シルト (粘性有)
37. 5Y5/4オリーブ色 シルト混粗砂
38. 5Y7/6黄色 シルト混細砂
39. 5Y5/4オリーブ色 シルト混細砂
40. 2.5Y2/1黒色 粗砂混シルト
41. 7.5Y6/1灰色 細砂
42. 7.5Y3/1オリーブ黒色 シルト
43. 10Y5/1灰色 粗砂
44. N5/0灰色 粗～細砂
45. 7.5YR6/6橙色 シルト混細砂
46. 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混粗砂
47. 5YR7/1明褐灰色 細砂混シルト

## B地区基本層序土色一覧 (図10)

1. 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂 盛土
2. 10YR4/4褐色 シルト混粗～細砂 2層
3. 10BG4/1暗青灰色 シルト混細砂 3層
- 3'. 5BG4/1暗青灰色 シルト混細砂 3に非常に似る
4. 10YR6/6明黄褐色 シルト混粗～細砂 4層
5. N5/0灰色 細砂混シルト (粘性有) 5層
6. 2.5Y5/6黄褐色 細砂混シルト (粘性有) 6層
7. 10YR7/6黄橙色 シルト混細砂
8. N4/0灰色 シルト混粗～細砂
9. 5BG3/1暗青灰色 細砂混シルト
10. 2.5Y7/8黄色 シルト混粗～細砂 7.5GY4/1暗緑灰色シルトをブロック状に含む
11. 7.5GY4/1暗緑灰色 細砂 7.5 Y4/3褐色シルトをブロック状に含む
12. 7.5Y5/1灰色 細砂  
7.5Y5/2暗灰黄色 シルトの互層
13. 7.5Y7/2灰白色 細砂
14. 7.5Y6/1灰色 粗～細砂
15. 2.5Y5/3黄褐色 細砂混シルト (やや粘性有)
16. 7.5Y5/1灰色 細砂 粗砂含む 7.5Y5/3灰オリブ色 シルトをブロック状に含む
17. 5Y6/4オリブ黄色 細砂 5Y6/8オリブ色 シルトをブロック状に含む
18. 5Y5/1灰色 シルト 礫多く含む
19. 5YR4/8赤褐色 粗砂混シルト
20. 10BG7/1明青灰色 粗砂混細砂
21. 5Y8/3淡黄色 シルト混細砂 10BG5/1青灰色 シルトをブロック状に含む
22. 2.5Y7/6明黄褐色 シルト混粗砂 10BG4/1暗青灰色 シルトをブロック状に含む
23. 7.5Y4/2灰オリブ色 細砂混シルト (やや粘性有)
24. 10Y2/1黒色 細砂混シルト 礫・土器含む
25. 7.5Y6/3オリブ黄色～6/1灰色 シルト混粗～細砂
26. 5Y6/2灰オリブ色 粗～細砂 6/1緑灰色～4/1暗緑灰色 シルトの互層
27. N4/0灰色 シルト混粘土
28. 5Y6/2灰オリブ色 粗砂 礫 (径約1～3cm) 多く含む
29. 5Y6/1灰色 細砂 シルト含む
30. 10YR6/3にぶい黄褐色 粗砂 礫 (径約1～3cm) 含む
31. N5/0灰色 シルト混細砂 礫含む
32. 2.5Y6/2灰黄色 シルト混粗～細砂
33. 2.5Y6/1黄灰色 シルト混粗～細砂
34. 2.5Y6/3にぶい黄色 粗～細砂
35. 10YR5/2灰黄褐色 シルト混細砂 粘土含む
36. 10YR6/2灰黄褐色 粗砂
37. 5Y4/1灰色 シルト 細砂含む
38. 10YR5/2灰黄褐色 シルト混粗～細砂 上層に粗砂、下層に細砂
39. 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 礫含む 5Y5/1灰色 粗～細砂
40. 10YR6/1褐灰色 細砂 粗砂含む
41. 10YR6/2灰黄褐色 粗～細砂 上層に細砂、下層に粗砂
42. 5Y6/1灰色 粗砂 上層との境にFe沈着
43. 10Y7/1灰白色 細砂
44. 10Y6/1灰色 粗～細砂
45. 2.5GY6/1オリブ灰色 粗～細砂 植物遺体含む
46. 5GY6/1オリブ灰色 細砂 シルト含む
47. 欠番
48. 7.5Y6/2灰オリブ色 礫 (径1～3cm) 粗～細砂部分的に含む
49. 10G6/1緑灰色 シルト混細砂
50. 5G6/1緑灰色 細砂混シルト
51. N2/0黒色 粗砂
52. 5Y4/1灰色 粗砂混シルト
53. 5Y5/1灰色 細砂混シルト
54. 5G2/1緑黒色 シルト混粘土
55. N6/0灰色 シルト混粘土
56. 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂混シルト 礫含む
57. N5/0灰色 粘土 下層に粗砂少量含む 植物遺体含む
58. 7.5Y4/1灰色 粗砂混礫 (径約1cm)
59. 7.5Y4/1灰色 粗砂混礫 (径約1～5cm)
60. 7.5Y3/1オリブ黒色 粘土 植物遺体含む
61. 10Y7/1灰白色 シルト混細砂 植物遺体多く含む
62. 2.5Y5/6黄褐色 粗～細砂混シルト
63. 2.5Y4/1黄灰色 粗～細砂混シルト (やや粘性有)
64. N7/0灰白色 粗～細砂混シルト 粘性有 ラミナ状に堆積
65. 5GY8/1灰白色 シルト混粗砂 ラミナ状に堆積
66. 2.5Y4/1黄灰色 シルト混細砂
67. 10YR4/1褐灰色 シルト混細砂 土器含む
68. 5GY8/1灰白色 細砂

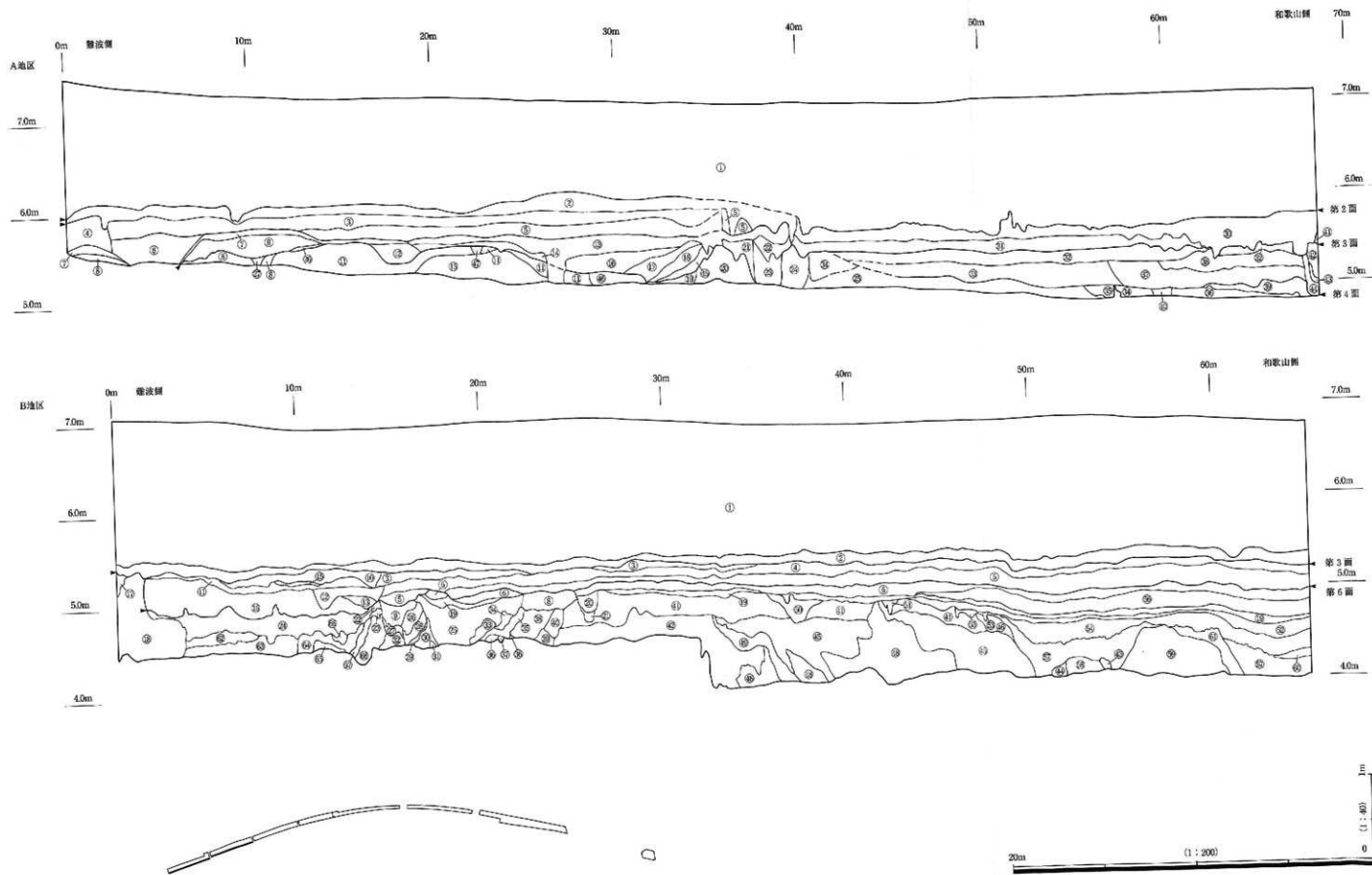


图10 基本層序圖1 (A地区・B地区)

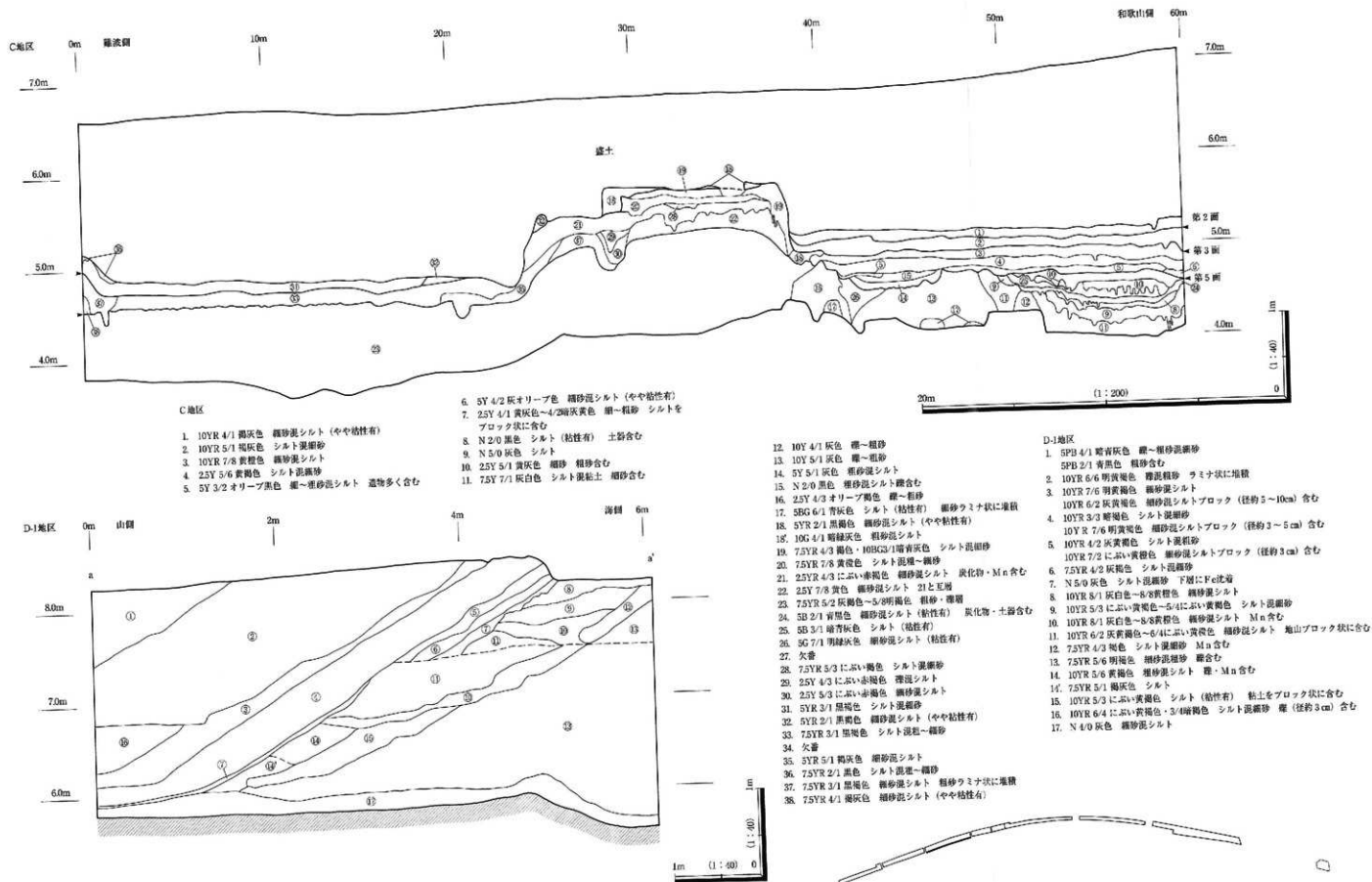


図11 基本層序図2 (C地区・D-1地区)

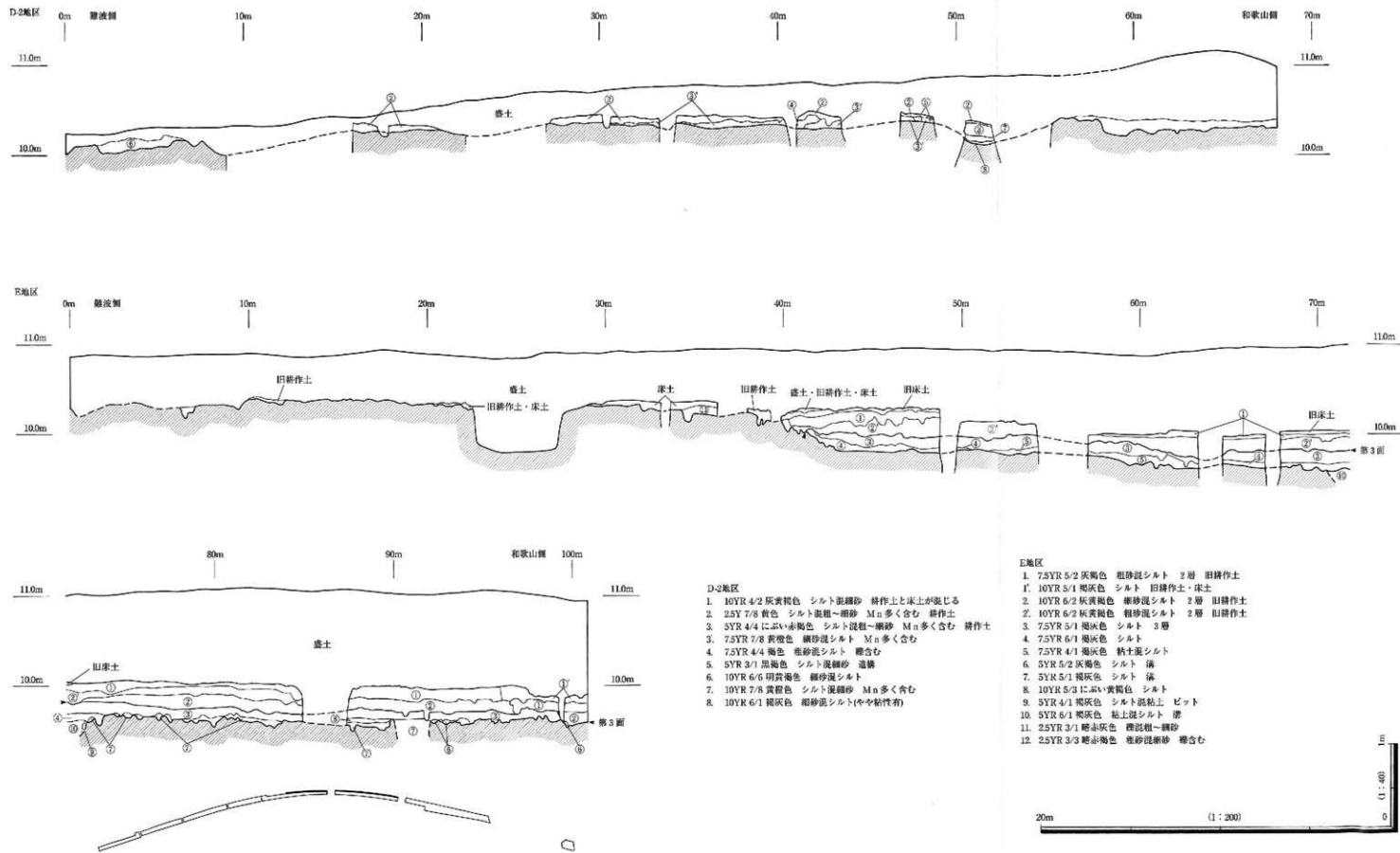


図12 基本層序図3 (D-2地区・E地区)



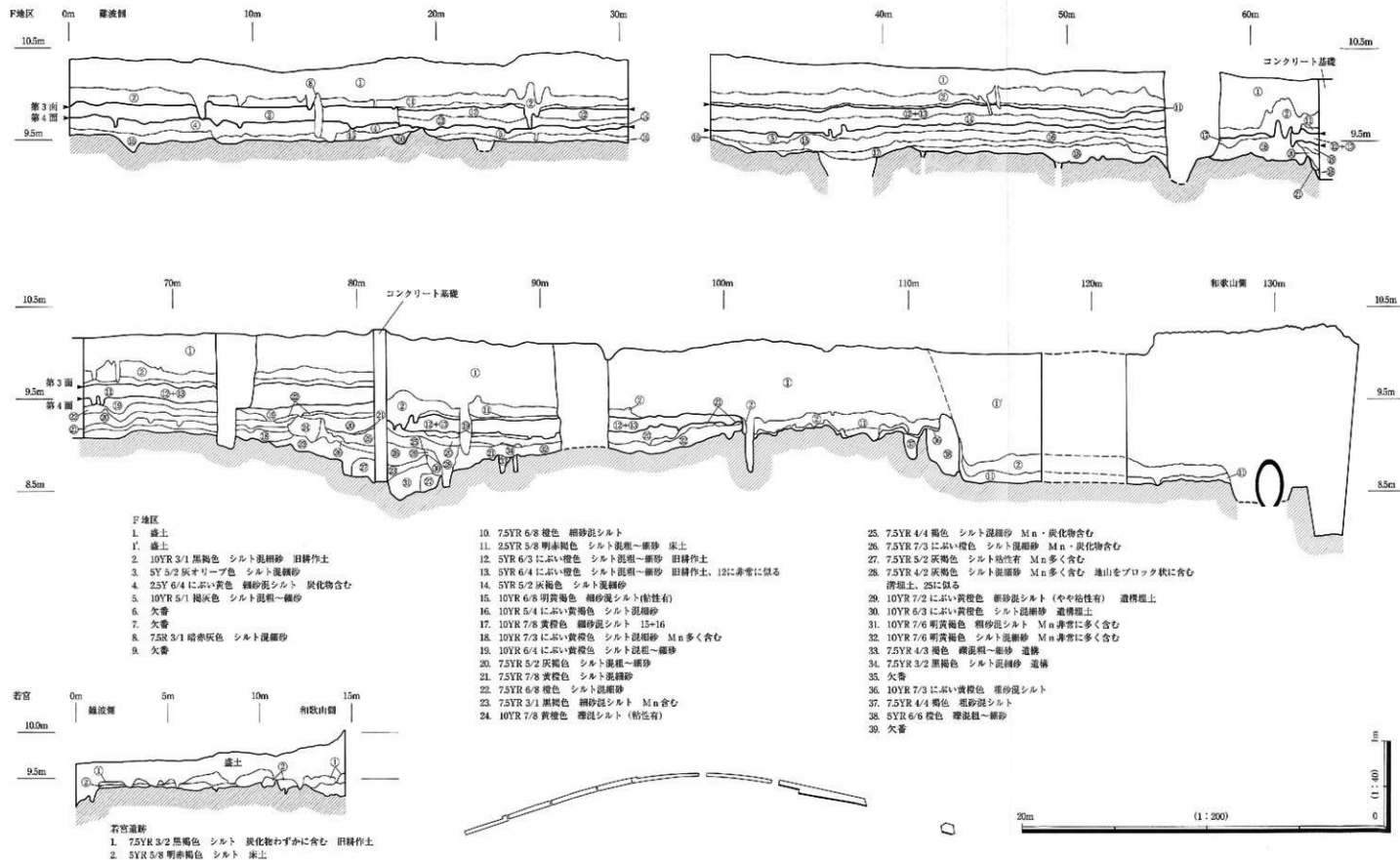


図13 基本層序図4 (F地区・若宮遺跡)

D-1 地区の調査では、隣接する仮線路を運行中の列車の安全性を考慮し、掘削限界深度が厳しく制限されたため、やむを得ず盛土層途中で掘削を終了した。D-2 地区から若宮遺跡にかけての部分では、逆に線路敷設の際、整地のために旧耕作土から遺物包含層まで削平した箇所が多く、線路盛土除去後に地山が露出するほどであった。線路盛土内からは遺物はあまり出土していないが、近世の陶磁器や土鍾などがみられる。また、近現代の鉄道関係の遺物として、線路で使用される犬釘や架線で使用されていた磁器製ガイシなども出土している。

線路盛土除去面は、線路建設直前の状況を示しており、D-2 地区を除くほぼ全域で旧耕作土層が検出されている。A 地区から D-1 地区では、線路盛土のおかげで土層が比較的良好に残存していた。この部分では、中世以降の耕作土層や整地層は、シルト層が主体の単純な堆積状況であるが、古代以前では、自然流路がかなり重複していることから、砂層が主体の非常に複雑な土層となっており、流路の復原も困難な状況である。おおまかな遺構面としては、線路盛土除去面（近代?明治30（1897）年当時）と旧耕作土層除去面（近世）、上部包含層除去面（中世）があげられる。上部包含層除去面に関しては、必ずしも時期は同一ではないが、これらの地区ではほぼ確認することができる。

一方、D-2 地区から E 地区にかけての部分では、先述したように削平や擾乱が多いことから、包含層がほとんど残存しておらず、地山面のみ遺構確認をおこなうことができた。地山は、黄色細砂混じりシルトを主体とするが、部分的には砂礫層もみられる。F 地区では、比較的包含層が残存しており、遺構面も複数確認することができた。これらの地区では、中世～近世の整地や削平により、古代以前の包含層はあまり残存しておらず、検出された遺構・遺物も中世以降のものがほとんどである。

## 第 2 節 遺構・遺物の概略

今回の調査区は、線路敷の調査ということで非常に狭長なものとなっている。最大幅でも 12m という制約があるため、遺構の全容を明らかにすることが困難な状況である。特に、E 地区や F 地区などはさらに狭く、幅は約 5 m しかないため、隣接する仮線路部分の調査成果を加えた結果、はじめて検出された掘立柱建物の復原が可能になったほどである。一方、延長距離は約 800m に及ぶことから、遺跡の範囲は湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡にまたがっており、検出された遺構や遺物の時代も多岐にわたっている。

### 1. 湊遺跡

今回の調査区の東半部（A～C 地区）は、湊遺跡の範囲内であるが、遺跡の縁辺部にあたる。先述したように、遺跡の中心は調査区の東隣の湊集落部分と考えられる。ただ、湊遺跡の中心的な集落などは、現在のところ検出されておらず、部分的に製塩土器を主体とする遺物が多く出土していることで知られている。

A 地区は、西側に緩やかに下がる斜面にあたり、中世以降の整地などにより耕作地になっていたことがわかる。西側で調査区を横断する自然流路が検出され、多くの遺物がまとまった状態で出土している。弥生時代後期から古墳時代初頭（庄内期）のものと考えられ、器種はバラエティに富んでいる。

B 地区は、A 地区よりさらに下がった谷地形のほぼ底面付近にあたり、さらにトレンチを横断する自然流路が重複して多く検出されている。ここでも流路の中から製塩土器や土師器壺・壺などの土師器をはじめとする、古墳時代初頭の遺物が多く出土している。上部では多くのピットが検出されたが、時期

を明確にする遺物は確認できなかった。中世以降、ほぼ耕作地として利用されていたものと考えられる。

C地区は、谷地形のほぼ中央部であるが、その中で一段高くなっている部分が認められ、地山を検出するほどであった。舌状にのびた微高地の先端部分にあたり、谷地形を形成する自然流路がこの部分で合流していたものと考えられる。上部では、近世の耕作地ともなう水路が検出され、杭列とともに底に径約3cmの砂利を敷き詰めた状況を観察することができた。また、最終面で地震が原因と考えられる小規模な地滑りの痕跡が確認された。

## 2. 上町東遺跡

調査区の中央から西半部(D-1～F地区)は、上町東遺跡の範囲内である。既往の調査により、遺跡の中心は段丘上であり、主に中世の遺構が検出されている。段丘上部分は、全体に包含層は薄く、表土層の直下ではほぼ基盤層となる部分のみみられる。

D-1地区は、谷地形の底面付近にあたり、最も深い部分である。先述したように線路盛土が厚く盛られており、隣接する仮線路の安全を優先したことから、結果的には線路盛土造成直前の生活面を検出するにとどまっている。耕作土層除去面で、拳大の礫を主体とした集石遺構が検出されており、出土遺物から中世後期のものと考えられる。ほぼ中央に設定した1m四方のトレンチにおいて、一部旧耕作土層や包含層の確認をおこなうことができたが、地山までは達することができなかった。また、D-1地区とD-2地区を分かつ段丘崖は、自然に形成されたものであるが、斜面がかなり急であるため、谷地形が形成された時期の自然流路の流れが急激であったことを物語っている。

D-2・E地区では、特に攪乱や削平が著しいため、遺構・遺物の検出は少ない。線路盛土からは、時期幅は認められるものの、大小の土錘が出土したほか、蛸壺の破片などの漁労具も多く確認できた。この地区では、複数の遺構面の検出はできず、最終面で遺構検出をおこなった。主なものは、ピット、溝、土坑等であるが、全体に遺物量は少なく、時期を決定できるものも少ない。D-2地区では、人頭大の石や瓦質土器羽釜、土器羽釜や甕などの大形品の破片を敷き詰めた遺構が検出されている。

一方、F地区では比較的多くの遺構が検出された。D-2・E地区と同様に、ピット、溝、土坑等がみられる。溝は、北東方向あるいはそれに直交しており、南側で以前に検出されていた溝につながる。これらは屋敷地を区画する溝と考えられ、掘立柱建物の方向もほぼ同様の方向を示している。また、溝や掘立柱建物には切り合い関係が認められることから、2時期以上の時期差が考えられる。溝や土坑からは瓦器椀や瓦質土器羽釜などが多く出土している。遺物包含層も比較的良好に残存しており、線路建設などに伴う整地があまり深い部分まで及んでいなかったようである。

## 3. 若宮遺跡

調査区は遺跡の縁辺部にあたり、狭い範囲に限定されている。近世以降に大規模に整地されたことが確認され、攪乱も多く、遺物包含層も削平されていたため、それ以前の遺構や遺物はほとんど残存していなかった。近代以降は、最近まで屋敷地内の庭地になっていたようで、造成の後に庭木などを植えた痕跡や池が検出された。ただ、南半部で遺物包含層が削平をまぬがれたため少し残存しており、瓦質土器羽釜や甕などがまとも出土したため、整地の時期を中世後期に特定することができた。また、整地以前の建物跡などの遺構は検出できなかったが、わずかに井戸が1基みつかったため、中世に集落が存在した可能性を想定することができる。井戸の埴土からも同様に中世後期の瓦質土器羽釜や甕などが多く出土している。

## 第5章 湊遺跡の調査成果

ここでは、湊遺跡の範囲内である、A地区からC地区の調査成果を述べる。全体として狭長な調査区であるため、これらをひとつにまとめて記述することは適切ではないとの判断から、調査区別に述べることにする。本来なら隣接する調査区間で統一をはかるべきであるが、ここでは事実報告にとどめる。また、調査区全体の層序をまとめることは困難であったため、同一番号の遺構面が必ずしも同一面とは限らない状況である。遺構の記述に関しては、基本的に古いものから新しいものへ、下層から上層へとという順序をとった。遺物が出土し、時期が確定した遺構を中心としている。遺物に関しては、遺構出土のものを中心に選んでいるが、包含層出土のものもあえて含んでいる場合がある。先述したように、遺跡の中心は調査区東隣にある現在の湊集落部分と考えられる。ただ、湊遺跡の中心的な集落などは、現在のところ検出されておらず、弥生時代後期から古墳時代前期の製塩土器を主体とする遺物が、部分的に多く出土していることで知られている。

### 第1節 A地区

調査区のA地区からD-1地区は谷地形にあたり、A地区からC地区にかけては緩やかな下り斜面となっている。全体に包含層から地山面までB地区に向かって下っているが、第3章で述べたように、泉佐野駅方面に向かう高架橋の上り口部分にあたるため、最終掘削面は構築物の形状にあわせた掘り方に規制されている。このため、特に北半部（難波側）の最終面は斜面の形状にはあっていない。B地区に隣接する約7mの範囲のみ橋脚部分にあたることから、土留め支保工を施し、約2.5m掘り下げることができた。湊遺跡の範囲内であるが、遺跡の縁辺部にあたる。

#### 1. 層序

線路盛土のおかげで土層が比較的良好に残存していた。上層の線路盛土内からは遺物はあまり出土していないが、近世の陶磁器や土錘などがみられる。近・現代の鉄道関係の遺物として、線路で使用される犬釘や架線で使用されていた磁器製ガイシなども出土している。

線路盛土除去面を第2面とした。前章で述べたように、明治30（1897）年当時の地表面で、鋤溝などの耕作痕跡が検出されている。周囲の耕作地の畝溝などと方向がほぼ一致しており、線路で分断された後も地割りに変更がないことがわかる。さらにこの時期の耕作土を除去した面を第3面とした。この面は、中世以降の耕作面と考えられ、整地層もみられるが、上面と方向が異なる鋤溝が検出された。近世に整地がおこなわれ、耕作地の区画割が変更されたことがうかがわれる。この面より下部は古代以前のものと考えられるが、南半部（和歌山側）では、調査区を横切る自然流路がかなり重複していることから、砂層が主体の複雑な土層となっており、流路の復原も困難な状況である。この部分での流路検出面を第4面とした。ほぼ、掘削限界深度に達しているが、地山層は褐色粗砂混じり礫層であり、細砂層を主体とする流路が確認された。一方の北半部（難波側）では、土層の途中で掘削を終了していることから、最終掘削面は遺構面を表してはいない。調査の進行上、煩雑になるが、第4面も含めて掘削最終面として、調査を終了した。

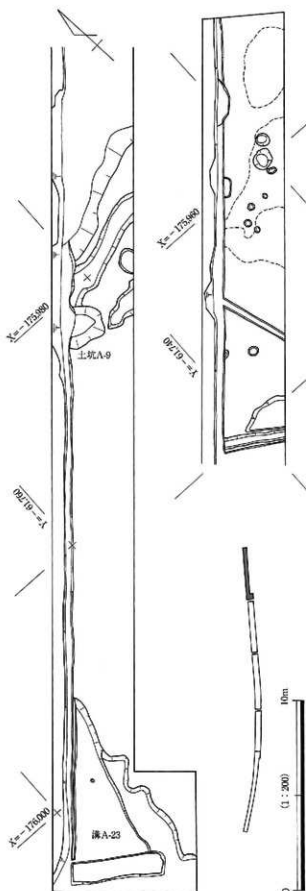


図14 A地区最終掘削面平面図

## 2. 遺構

大きく分けて、遺構面は3面を確認することができた。また、北半部（難波側）の最終掘削面においても遺構は確認されているが、地山面ではないので、さらに面数は増えるものと考えられる。

### (1) 最終掘削面・第4面

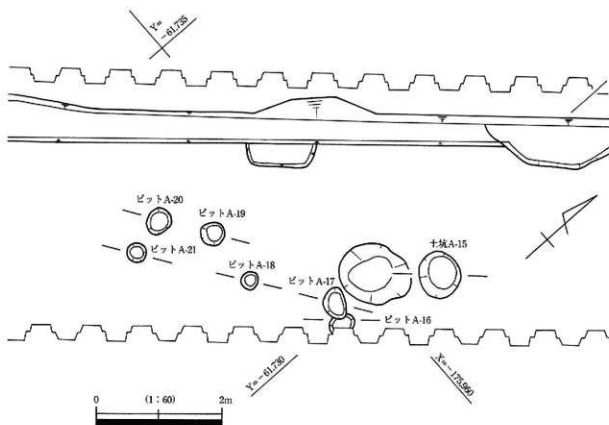
最終掘削面は、連続立体交差事業における高架橋の橋台建設のための最終掘削面にあわせているため、もとの地形にあわせているわけではない。南半部（和歌山側）では、第4面として地山面を検出した。検出された遺構や自然流路の分布状況により、大きく3グループに分けることができる。ただし、あくまでも最終掘削面で確認されたものであるため、同時期のものとは限らない。

#### 1) 北半部（難波側）

人為的に掘削されたピット群が検出されている。ピットの中にはほぼ等間隔に並ぶものもみられ、掘立柱建物を構成する可能性の高いと考えられるが、残念ながら調査区の幅が約4mしかなく、隣接した部分でも調査がおこなわれていないことから、全容を復原することはできなかった。また、検出面は掘削最終面であり、上部は中世以降の削平をうけているため、埋土も上部が失われている可能性が高く、本来の形状を示しているものは非常に少ない。さらに、全体に遺物がほとんど出土していないため、遺構の時期を確定できない。ピット群周辺の検出面で、部分的に調査区を横切る方向の粗砂層が検出されており、古代の洪水砂の堆積が露出したものと考えられることができる。

#### 土坑A-15 (図15)

ピット群の中で検出されたものである。平面形は円形を呈しており、検出面で径約60cm、深さ約20cmを測る。埋土は2層に分かれており、上層は暗灰黄色シルト、下層は褐灰色粘土混じりシルトである。遺物はほとんど出土しておらず、時期は確定しないが、埋土が類似していることから、ピット群と同時期のものと考えられる。



ピットA-16

1. 10YR 5/2 灰黄褐色 粗砂 細砂含む

ピットA-17

1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト混粗砂 糞 (厚1~2cm) 含む

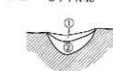
ピットA-20



ピットA-19



ピットA-18



土坑A-15

1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト 粘土含む  
2. 10YR 6/1 褐灰色 粘土混シルト 粗砂含む

ピットA-21

1. 5Y 5/1 灰色 シルト 粗砂含む  
2. 10YR 5/2 灰黄褐色 粗砂 細砂含む  
3. 10YR 5/2 灰黄褐色 粗砂 礫含む  
ピット列A-19・20  
1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト 粘土含む  
2. 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト混粗砂  
3. 5Y 5/1 灰色 シルト混粗砂  
ピットA-18  
1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト  
2. 10YR 6/1 褐灰色 粘土混シルト

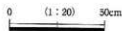


図15 A地区ピット群・土坑平・断面図

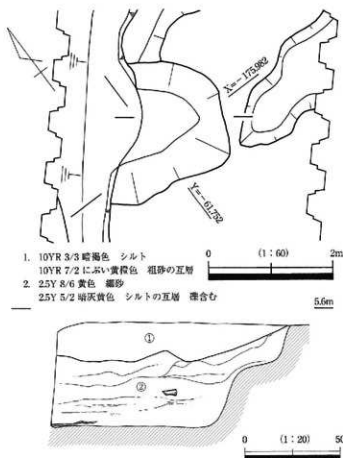


図16 土坑A-9平・断面図

しておらず、柱痕は確認されていない。

#### ピットA-19・A-20 (図15)

ピットA-17・A-18・A-21とはほぼ平行に並ぶ。ピット間の間隔は狭く、約0.9mを測る。この並びで他のピットは検出されなかったため、掘立柱建物を構成しているものとは考えられないが、関連性のあるものと考えられることができる。いずれも円形を呈しており、径約35cm、深さ10～15cmを測る。柱痕は確認されていない。

## 2) 調査区中央部

ほぼ東西方向に調査区を横切る自然流路および溝、土坑が検出されている。自然流路に平行して溝が掘削されており、自然流路の中より弥生時代末から古墳時代初頭の土器がまとめて出土した。遺物は自然流路内からのものが大半を占めており、溝や土坑からはほとんど検出されていない。また、当該期の遺物包含層は、後世の整地による削平によりほとんど残っていないことから、包含層からの出土遺物も全体に少ない。A地区内では当該期の遺構や遺物は大半がこの部分で検出されているが、掘立柱建物や掘立柱建物のピットなどもみつからないことから、集落は確認できていない。

#### 土坑A-9 (図16、図版5-1)

調査区の端部で検出されており、西半部は調査区外にひろがる。平面形は不正円形を呈しており、検出面で、径約1.2m、深さ約50cmを測る。底部は掘削限界に達していたため、完掘はしていない。埋土は、暗灰黄色シルトおよび黄色細砂がラミナ状に堆積していることから、洪水により一気に埋没したも

#### ピットA-16 (図15)

調査区の縁辺部で検出され、南側は調査区外にひろがるほか、北側はピットA-17に切られている。検出面は削平を受けているが、平面形は円形を呈しており、径約25cm、深さ約5cmを測る。埋土は、灰黄褐色シルトであり、ピット群の埋土もほぼこの土層が主体となっている。遺物はほとんど出土しておらず、柱痕は確認されていない。

#### ピットA-17・A-18・A-21 (図15)

ほぼ一直線に並んだ状態で検出されており、ピットA-17とピットA-18の間隔は約1.4m、ピットA-18とピットA-21の間隔は約1.8mを測る。掘立柱建物か構列を構成する柱穴群と考えられるが、ピットA-21の西側でピットはみられないことや、他に関連するピットが検出されていないことから、性格は不明である。いずれも平面形は円形で、径30cm程度、深さ約10cmを測る。遺物はほとんど出土

のといえる。遺物はほとんど検出されていないが、埋土の砂層から黒色土器碗や土師器などが出土していることから、平安時代前期には営まれていたものと考えられる。完掘していないため、性格ははっきりしないが、井戸として使用されていた可能性が考えられる。調査区内では集落にともなう建物跡などはみつからないが、後述する自然流路や溝内の遺物出土状況から、近接した場所に集落が営まれていたことは確実である。この土坑も集落にともなう井戸と考えることができよう。

#### 溝A-12 (図17、図版4-6)

次に述べる溝A-13にはほぼ平行したかたちで掘削された溝で、方位はおおよそN-72°-Wである。溝A-13の南肩部から約0.5~1mの間隔をあけて南側に位置しており、周辺の地形により東から西へ流れていたものと考えられる。上面は削平をうけており、規模は、検出面で幅約1.1m、深さ約20cmを測る。検出時にははっきりしなかったが、断面観察により、一度埋没した後と同じ場所でも再度掘削され、溝として使用されていたことがわかる。もとの溝の埋土は黄褐色シルト混じり細砂が主体であるが、再度掘削された溝の埋土は、褐灰色細砂混じりシルトである。埋土の状況から、もとの溝は流水堆積によって埋没したものといえるが、最終的には洪水により土坑A-9なども含めて周囲全体が埋没してしまった可能性も考えられる。

遺物がほとんど出土していないため、時期ははっきりしない。溝A-13と併存していたかどうかは不明であるが、溝A-13を意識して掘削していることは確実で、関連性が考えられる。また、溝A-12の南側には、約1.5mの間隔をあけてほぼ平行で同一方向にのびる溝A-10が検出されており、これも関連性がうかがわれる溝である。このため、溝A-13を主体としてそれにほぼ平行して掘削された溝が2本検出されていることになり、これらの溝がなんらかの関連をもって意図的につくられた可能性を示唆している。これらの溝がつくられている部分は、A地区からC地区にかけてひろがる谷地形の中で斜面の傾斜が変わる位置であり、この部分にのみまとまって同一方向の溝が掘削されていることから、意図的に区画していることも考えられる。

#### 溝A-13 (図17・18、図版3・4-1~5)

調査区をほぼ東西方向に横切る溝状を呈しており、多少の人為的な掘削が施されている可能性が高いが、もとは自然流路と考えられる。方位はおおよそN-63°-Wであるが、直線的にはのびていないため、あくまでも目安の方向である。南肩部分は明確な形状を示しているが、北側は明瞭ではなく調査区外にひろがっていることから、検出状況からみると溝というよりは小規模な落ち込み状を呈したかたちになっている。底部に関しては掘削限界に達したことから、完掘はできていない。このため、形状は確定しないが、検出状態での規模は、幅2.5m以上、深さ0.4mを測る。周囲の地形より類推すると、東から西方向へ流れていたものと考えられる。もともとはA地区からC地区にかけてひろがる谷地形に向かって流れていた自然流路ということが出来るが、掘削がおこなわれた時期に流路として恒常的に水が流れていたものかどうかは判断できない。

埋土は自然堆積によるもので、人為的に埋められた様相はみられないが、南肩部がそろえられていることから、この溝が使われていた時期には、なんらかの整形が施されていたものと考えられる。底部を検出していないため、全体の堆積状況は不明であるが、掘削可能な範囲での埋土観察により、上層は橙色および褐色シルト混じり細砂を主体とした自然堆積で、部分的にラミナもみられる。南肩部周辺で底部に灰色細砂が堆積していることから、当初はある程度の緩やかな流れがあったものといえる。

上層内から、甕を主体とする土器群が検出された。南肩に沿ってある程度まとまっており、溝の南側



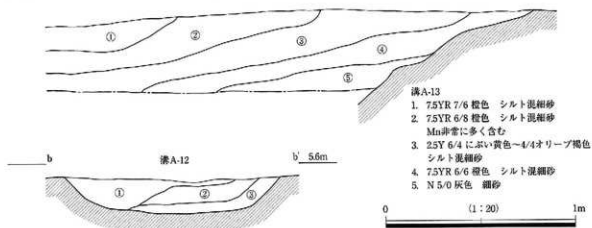
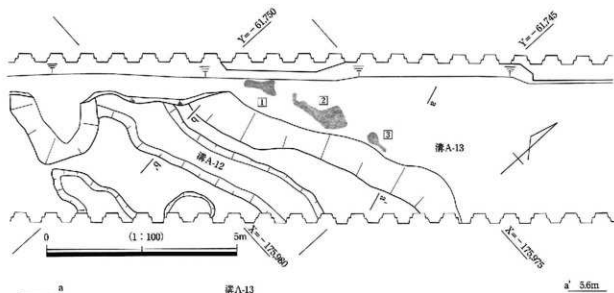


図17 溝A-12・13平・断面図、溝A-13遺物出土状況1

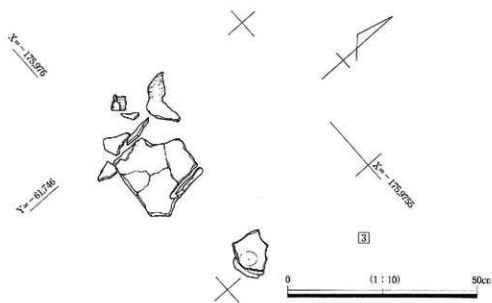
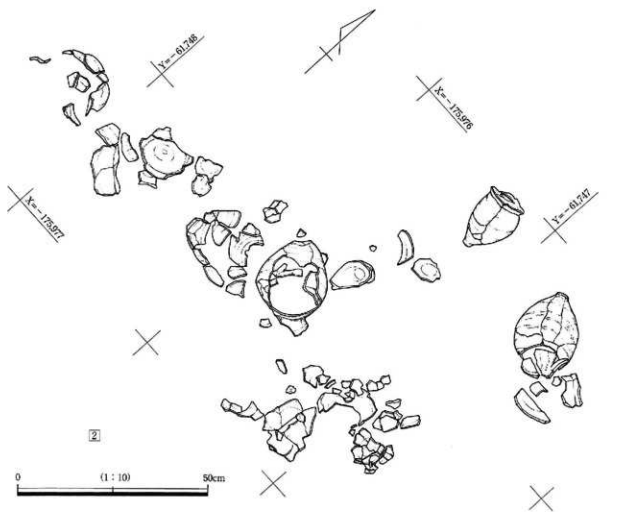


图18 清A-13遺物出土狀況2

から入れられたものといえる。完形のものも多く、廃棄されたものというより意図的に並べられた可能性が高い。溝の中央部や北側では、遺物はほとんど出土していないこともこれを示唆している。これらの土器群が置かれた面ははっきりしていないが、強いていえば、灰色細砂層の上面と考えることができる。遺物はあまり散らばっておらず、流路の強い流れで分散している状況はみられない。調査区の幅が狭く、横断する流路を判断するわけにはいかないが、この溝の南肩に沿った部分に意図的に土器を配置した状況を想定することができる。ただし、遺物は溝の南側全面にひろがるわけではなく、調査区内でも配置は西側に寄っており、かなり限定された場所とすることができる。溝の南側では集落は検出されていないためはっきりしないが、後述するB地区でも溝から土器がまとまって出土していることから、調査区内ではみつからないものの、この付近で集落が営まれていた可能性は強いと考えられる。

遺物の内訳は、甕が多く、高杯と鉢がこれに次いでいる。分布の状況は、これらの器種が混在するというよりも、ある程度器種で配置が分かれており、甕のまとまりや高杯のまとまりがみられるようである。なんらかの儀式やまつりにもなうもの可能性も考えられるが、遺物の中には特殊なものはみられない。漆遺跡で一般的に出土する製塩土器は、ここでは確認されなかった。これらの土器の埋没状況を見ても、人為的に埋められた形跡はなく、自然堆積によるものである。あまり長い期間置かれていたものとは考えにくく、土器が並べられた後に、あまり期間を置かずにより洪水などにより埋没したものと考えられる。土器には、土中の鉄分が多量に吸着しており、残存状態はあまりいい方ではない。

### 3) 南半部 (和歌山側)

調査区端部の第4面で、ほぼ南北方向に流れる自然流路が検出されている。掘削限界のため、完掘していないが、断面観察により継続的に流れていたものといえることができる。

#### 溝A-23 (図版4-7)

調査区端部を横切る自然流路であるが、調査区中央部で検出された溝A-13を中心としたグループとは方向が異なる。方位はおおよそN-4°-Eである。底部を検出していないためはっきりしないが、周辺の地形により北から南へ流れていたものと考えられる。また、ほとんどが調査区外にひろがるため、形状は確定しないが、検出状態での規模は幅5m以上、深さ10cmを測る。掘削限界のため、検出面の第4面よりわずかに掘り下げたのみであるが、埋土は暗灰色細砂混じりシルトを主体とする自然堆積である。後述するが、この部分は、後世においても継続的に自然流路が流れており、時期による明確な差は認められない。

上層内から弥生土器や須恵器が数点出土している。溝A-13のようにまとまっておらず、流路の流れによってもたらされたものと考えられる。須恵器は東肩部に近い部分で検出されているのに対し、弥生土器はやや中央寄りで見ついている。出土遺物より、古墳時代後期以降の流路と考えられる。ただし、自然流路が錯綜している場所であるため、遺物から必ずしも時期を特定できる状況ではない。

## (2) 第3面

第4面の上をおおうシルト混じり細砂層をベースにした遺構面である。中世の耕作面と考えられ、北半部(懸波側)では、ある程度方向の揃った鋤溝が多く検出されている。地割りの方向は現在とは若干異なっており、時代により耕作地の区画が異なることがわかる。鋤溝の規模は、検出面で幅20~50cm、深さ約10cmで、長さは約4~5mのものが比較的多い。遺物はほとんど出土していないため、時期は確定できない。掘削最終面で検出された調査区中央部の区画は、この面でも確認することができ、区画が存続していることを表している。溝A-13などとほぼ同一方向で調査区を横切る溝が掘削されており、

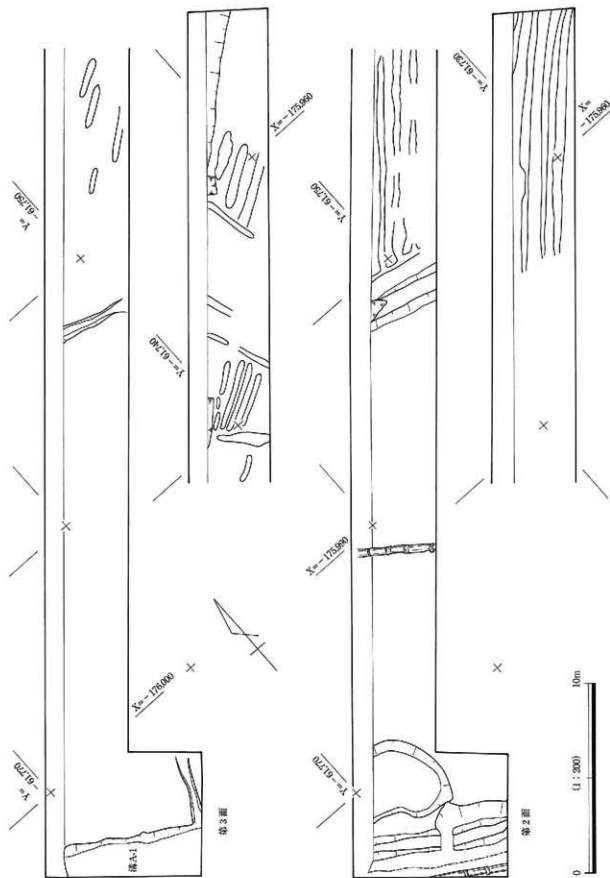


图19 A地区第2·3面平面图

規模は幅約50cm、深さ約20cmを測る。この溝を境に谷地形の下部にあたる南半部（和歌山側）では、鋤溝はみられず、人為的な掘削による遺構などは検出されていない。

一方、南半部（和歌山側）の調査区端部では、ほぼ調査区を直角に横切ったかたちの溝（溝A-1）が検出されている。第4面で検出された溝A-23とは方向が異なるものの、もとは谷地形に沿って流れる自然流路と考えられ、大筋では溝A-23の流れをくむものといえる。A地区とB地区を分かち水路が現在でも利用されており、この水路の初見である。ただし、後世まで存続した溝であるため、何度も再掘削されているようで、断面観察のみでは正確な形状ははっきりしない。また、溝の底部から径約10cmの杭の痕跡が多く検出され、区画などの意味をもっていたといえる。溝A-23では、杭の痕跡などは確認されていない。杭列の復原はむずかしいが、溝に沿って柵が設けられていたことがわかる。なお、ここでも遺物はほとんど出土しておらず、時期を明確にはできないが、中世後期には利用されるようになったものと考えられる。

### （3）第2面

線路盛土除去面を第2面とした。この面は線路建設直前の遺構面であるため、明治30（1897）年頃の実年代が明確なものである。基本的には、現在の地割りと同一である。近世からの耕作面を踏襲しているということができ、鋤溝などの方向も同一である。鋤溝の埋土に盛土が入っていることから、線路建設の際、整地をせずに耕作地にそのまま盛土をのせたことがわかる。なお、調査区を横切る径約30cm、長さ約1mの土管をつないだ水路が検出されたが、旧耕作土上に位置しており、線路盛土を盛る際に新たな水路としてつくられたものと考えられる。

調査区中央部の区画部分は、同じ場所に幅約1m、高さ約15cmの畦畔がつくられており、第3面以前の区画溝とはかたちが異なっている。畦畔の南側（和歌山側）はさらに40～50cmの段差がつくられており、区画がより明確になっている。畦畔の北側（難波側）には、平行して耕作にともなう幅約1mの溝がつくられている。この面でも、調査区中央部の区画より難波側で鋤溝が多くみられるが、谷地形の下部では鋤溝はまったく検出されていない。この区画によって、やや高台にある耕作地と谷地形の自然流路を明確に分けていることがわかる。

南半部（和歌山側）の調査区端部では、第3面でみられた溝A-1が検出された。線路盛土除去面で検出されていることから、この時期まで水路が存続していたことがわかる。水路の北肩部では、高さ約30cm、幅約1mの土手が検出された。耕作地を行き来するための畦道のような通路として、利用されていたものと考えられる。中央付近で、土手に幅約60cmの切り込みがあり、この水路に向かう排水口がつくられている。第3面検出時ほど顕著ではないが、ここでも杭の痕跡が確認されており、柵列が設けられていたことがわかる。土留めの鋼矢板打設により破壊されたが、この部分でも土管が検出されており、線路盛土を盛る際に人形の土管をつないだ水路を設けている。現存するA地区とB地区を分かち水路は、後に整備されたもので、現在では土管の水路は廃絶している。

## 3. 遺物

A地区の出土遺物は、遺構からは溝A-13と溝A-23、包含層では線路盛土からのものが多い。特に、溝出土の弥生土器は残存率が高く、成形に近いものが多い。包含層からの遺物は時期が一定しておらず、後世の混入品も多くみられる。

### 溝A-13（図20・21、図版39～41）

自然流路を利用した溝で、上層から甕を主体とする土器群が検出されている。成形に近いものが多く、

甕と高杯がほとんどを占める。図化できたものは全部で21点を数える。内訳は、甕10点、高杯8点、壺2点、鉢1点である。弥生時代後期後葉の一群であり、時期差はほとんどみられない。

図20の1～10は甕である。いずれも体部外面に明瞭なタタキ調整が施されており、口縁部は短く外反し、器高が体部最大径をこえている。1は、ほぼ完形の小型の甕で、器高は14.3cmを測る。外面に右上がり斜め方向のタタキ調整が施されているが、体部上半と下半ではやや方向が異なっている。内面は、鉄分の付着が著しく、調整は不明である。口縁部は外反しているが、端部がやや受け口状の形態を呈している。2は、ほぼ完形のやや小型の甕で、器高は17.2cmを測る。外面にほぼ同一の右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面には、部分的にハケ調整の痕跡が認められる。口縁部は短く外反しているが、1と同様に端部がやや受け口状の形態を呈している。底部は比較的厚く仕上げられている。3は、ほぼ完形のやや小型の甕で、器高は20.0cmを測る。体部外面には右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はナデ調整がみられる。口縁部は大きく外反しており、外面はナデ調整で仕上げられている。頸部が比較的しぼられており、短頸壺の形状に似ている。4は、口縁部を欠損したやや小型の甕で、3とほぼ同じ形状を呈している。残存状態は悪く、全体に摩耗が激しいうえに鉄分の付着も著しいことから、細かい調整の観察はできないが、外面はタタキ調整、内面はナデ調整がみられる。5は、体部下半を欠損する甕である。体部外面には右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はナデ調整がみられる。口縁部は短く外反しており、外面はナデ調整で仕上げられている。6は、体部下半を欠損する甕であるが、他の甕とやや器形が異なる。外面に右上がり斜め方向のタタキ調整が施されているが、その後縦方向のハケ調整をおこなっている。内面はナデ調整がみられる。口縁部は短く外反しており、外面は横方向のハケ調整で仕上げられている。タタキ成形の上にハケ調整をおこなっていることから、他の甕より古い様相を呈している。7は、土器群の中の甕では平均的な大きさのもので、器高は23.2cmを測る。体部外面には右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はハケ調整がみられる。口縁部は短く外反しており、外面はナデ調整で仕上げられている。8は、口縁部を欠損しているが、7とほぼ同じ大きさの甕である。外面に右上がり斜め方向のタタキ調整が施されているが、その後部分的に縦方向のハケ調整をおこなっている。内面はナデ調整がみられる。6と同様にやや古い様相を呈している。9は、口縁部を欠損しているが、土器群の中の甕ではやや大型のものである。体部外面には右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はナデ調整がみられる。底部は比較的厚く仕上げられている。10は、体部で割れたものを図上復元したもので、器高は推定で25cmを測り、9とほぼ同じ高さである。体部外面には右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はハケ調整がみられる。口縁部は短く外反しているが、1や2と同様に端部がやや受け口状の形態を呈している。11は、口縁部推定18cmを測る大形鉢である。残存状態が悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。口縁部は短く外反している。12は、壺底部である。残存状態が悪く、特に外面の剥離が激しいことから、調整は不明である。かろうじて内面のハケ調整が確認できるのみである。13は、壺底部である。外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面はナデ調整がみられる。

図21の14～21は、高杯である。14は、皿形高杯杯部で、口縁部は稜をなして外反する。口径は21.7cmを測る。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。内面はナデ調整がみられる。15は、皿形高杯杯部で、口縁部は稜をなして外反する。口径は23.2cmを測る。表面が摩耗しているため、調整ははっきりしないが、内外面ともナデ調整がみられる。20の高杯脚部と同一個体の可能性があるが、完全に剥離しているため、接合できなかった。16は、皿形高杯で、杯部の口縁は稜をなしてゆるやかに

外反する。残存率約80%で、口径は20.4cmを測る。胎土は密で焼成も良好であるが、残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。脚部は、下外方へゆるやかに開いており、四方に円孔透かしがつけられている。17は、皿形高杯で、杯部の口縁はゆるやかに外反する。口径は推定で16.6cmを測る。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。脚部は、下外方へゆるやかに開いており、四方に円孔透かしがつけられている。18は、皿形高杯で、杯部の口縁は稜をなしてゆるやかに外反する。杯部は3/4、脚部は下半が欠損している。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、

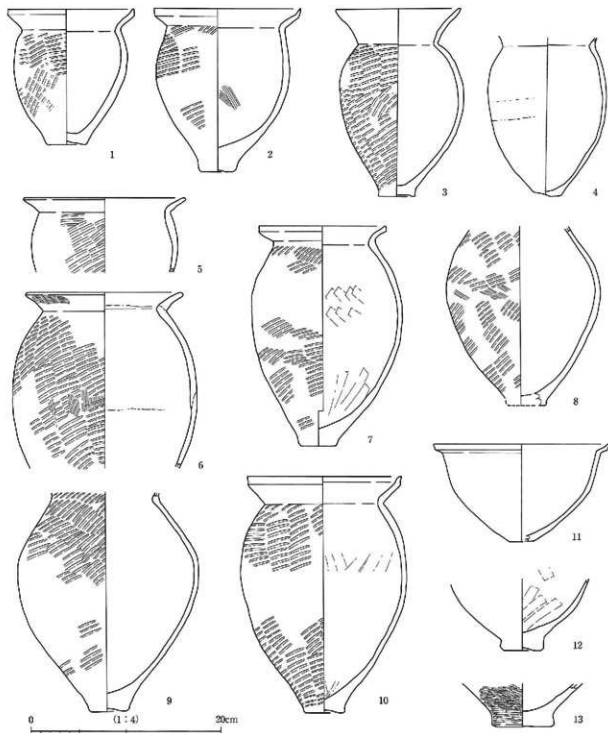


図20 A地区出土遺物1 (清A-13)

調整は不明である。脚部は下外方へゆるやかに開いている。円孔透かしは上下2段つけられているものと考えられ、そのうちの上2箇所が確認できる。19は、高杯脚部で、下外方へゆるやかに開いている。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。円孔透かしは上下2段つけられており、上2方、下4方が確認できる。20は、高杯脚部で、下外方へゆるやかに開いている。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。四方に円孔透かしがつけられている。21は、高杯脚部で、

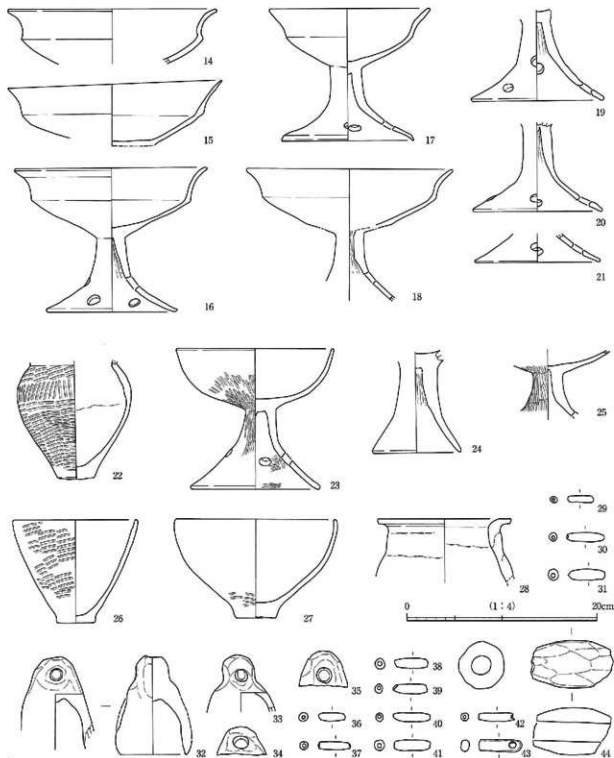


図21 A地区出土遺物 2



下外方へゆるやかに開いている。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。円孔透かしがみられ、四方につけられているものと考えられる。

#### 溝A-23 (図21、図版41)

調査区南端部で検出された自然流路で、上層から弥生土器や須恵器が出土している。図化できたものは6点で、弥生土器のみであった。

図21の22は、口縁部を欠損しているが、小型の甕である。体部外面にはやや右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はナデ調整がみられる。体部中央に粘土の継ぎ痕跡が明瞭に残っている。図20の3・4と同様に頸部がしぼられており、短頸壺の形状に似ている。23は、碗形高杯で、脚部の四方に円孔透かしがつけられている。杯部外面は縦方向のヘラミガキ調整が施されており、内面はナデ調整がみられる。脚部外面はハケ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。内面はナデ調整が施されているが、一部ハケ調整もみられる。24は、高杯脚部と考えられるが、下外方への開きが少ない。残存状態は悪く、表面が摩耗しているため、調整は不明である。内面はナデ調整がみられる。25は、高杯で、杯部上部と脚部下半を欠損している。表面剥離のため、杯部内面の調整は不明であるが、外面は脚部にかけて縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。脚部には円孔透かしがみられ、四方につけられているものと考えられる。26は、小形鉢である。体部外面には、やや右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。体部下半から底部にかけてはナデ調整が施されている。内面はナデ調整がみられる。27は、碗形鉢である。表面が摩耗しているためはっきりしないが、外面には横方向のヘラミガキ調整が施されている。内面はナデ調整がみられる。

#### 土坑A-9 (図21、図版42)

図化できた遺物は1点のみである。図21の28は、土師器壺の口縁部から頸部である。内外面に粘土つぎの痕跡が明瞭に残っており、ナデ調整が施されているが、全体につくりが粗雑である。外面に布目と考えられる痕跡が認められる。色調は灰白色を呈しており、形状ははっきりしないが、中世頃のものと考えられる。

#### 包含層ほか (図21、図版42)

第2面検出遺構の溝A-1および線路盛土、2層、3層から出土した土鍾と蛸壺のうち図化できたものをまとめて掲載した。

図21の32～35は、釣鐘形の蛸壺である。33・34は須恵器であるが、32・35は土師質である。いずれも古墳時代後期のものと考えられるが、混入品で出土位置は中世以降の包含層である。

29～31・36～44は、土師質の土鍾である。29・30は溝A-1から出土しているが、他の土鍾は近世以降の包含層からの出土である。管状土鍾の小型品が多いが、43のような有孔土鍾や44のような管状土鍾の大型品もみられる。管状土鍾の小型品は、長さ4.5cm、孔径0.4mm程度のものが多い。43は、1/4ほど欠損しているが、棒の両端に孔をあけたもので、孔径は0.7cmを測る。44は、やや欠損しているが、残存長8.7cm、孔径2.0cmを測る。表面にはナデ調整がみられる。

## 第2節 B地区

前節で述べたように、A地区からD-1地区は谷地形にあたり、A地区からC地区にかけては緩やかな下り斜面となっている。B地区は谷地形の底部に近く、恒常的に自然流路が調査区を横切っている部分にあたる。橋脚の下部工事箇所にあたるため、地表面から約4m掘り下げることになり、土留め支保工を全面に施している。橋脚の形状や土留め方法の違いにより、中央から南半部（和歌山側）は約50cm低くなっている。

### 1. 層序

A地区と同様に、線路盛土のおかげで土層が比較的良好に残存していた。基本的には、第3面より上層に関しては、A地区と同様の堆積状況を示している。さらに、第3面の耕作土層を除去した面が確認されたため、これを第6面とした。この面は古代から中世の耕作地と考えられるが、時期を確定するものがなくはっきりしない。第6面の下の黄褐色細砂混じりシルト層を除去すると、ほぼ全面にわたって細砂を主体とする層がひろがる。この細砂層は、自然流路が錯綜する部分の堆積であるため、流路の重複がみられ、遺構面を統一することが困難であった。ただ、この細砂層上面で比較的安定した遺構面が確認され、中央部でビット群が見つかったことから、この面を第8面とした。北半部（難波側）では、第8面において重複した流路が検出されていたため、これをさらに掘削し、第8-b面とした。この後、掘削限界面まで掘り下げ、床付け面で水平にそろえたが、完掘できなかった自然流路が存在するため、流路の方向のみ確認した。

### 2. 遺構

大きく分けて、遺構面は4面を確認することができた。第8面では、時期差のある自然流路を検出している。人為的な遺構の主なもの、第8面で検出されたビット群と自然流路を利用した溝、廃棄された土器群などである。

#### (1) 最終掘削面

調査の最終段階では、土留め支保工を施したうえで、掘削限界面まで掘り下げ、床付け面で水平にそろえた。北半部（難波側）の第8面で検出された自然流路とほぼ同じ位置で、さらに自然流路を確認することができた。何度も流路を変えながら恒常的に流れており、重複が激しいことから流路の形状を特定することは困難であるが、ほぼ調査区を横断しており、おおむね東から西方向に向かう流れである。

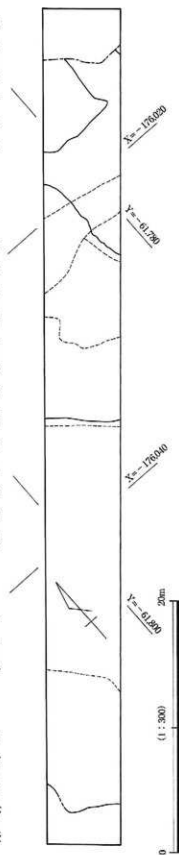


図22 B地区最終掘削面平面図

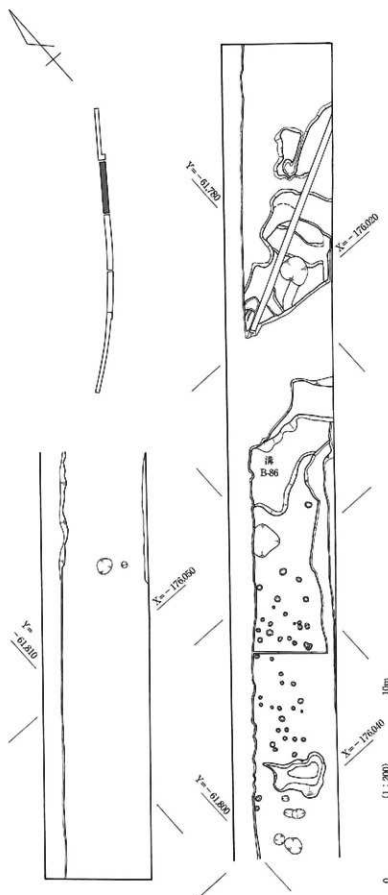


図23 B地区第8-b面平面図

床付け面付近は、流路の内部も外部も細砂を基本とする土層であることから、両者の分離も容易ではなく、おおよその形状をとらえたのみである。流路の外部とした細砂層も、大きくみると大規模な自然流路の一部にすぎず、すべて流路の中に包括してしまう。谷地形において、恒常的に流れる流路部分でのかなり錯綜した流路の流れを見ることができる。

床付け面で確認された範囲では、北半部（難波側）においては、約25mの幅の中で複数の自然流路が調査区を横断しており、ラミナが明瞭に判別できることから、流路を認識することができた。流路はすべて自然流路であり、人為的に成形されたような痕跡はみられない。南半部（和歌山側）においても約11mの幅で調査区を横断するラミナがみられることから、この部分でも流路が流れていたことがわかる。時期は特定できないが、遺物もわずかながら出土しており、地山を確認することができない。検出面が最終掘削面であることから、完掘しておらず、形状は不明である。

第8面で検出された流路上上の遺物が、弥生時代末から古墳時代初頭であることから、ここで検出された流路は、弥生時代後期頃と考えることができる。A地区で検出された溝A-13から同時期の遺物が多く出土しており、併存していた可能性が高い。

## (2) 第8・8-b面

細砂層上面で、ビットや溝などの遺構が検出され、遺構面として認識できた。検出された遺構や自然流路の分布状況により、大きく3グループに分けることができる。北半部(難波側)で自然流路が重複して検出されており、これらを掘り分けた結果、おおよそ2時期に分けられることから、古いものを第8-b面对応の流路として認識した。ここではあえて、面毎の遺構というかたちはとらず、続けて記述することにする。

### 1) 南半部(和歌山側)

A地区からD-1地区にひろがる谷地形の最も低い位置にあたり、恒常的に流れていた部分である。

溝B-83(図22、図版8-5~8)

調査区を横断する幅16m以上のかなり大規模な流路であるが、掘削限界のため完掘できなかった。土層断面の観察においても、砂層や礫層が交錯しており、細かい流路を確認することはできない。床付け面付近では、砂層より粗い礫層がひろがっており、かなりの水量が流れていたことがわかる。検出面において、北肩部がそろっていることから、人為的に成形されている可能性がある。礫層の上には、粘土層が堆積している部分もあり、かなり大きな流木や若干の遺物もみうけられる。遺物量は少ないが、古墳時代初頭の土師器甕や製塩土器が出土している。断面観察により、粘土層と下の層である粗砂層との境目でかなり攪拌された状況が明瞭に認められる。寒川旭氏によると、地震の痕跡で液状化現象の一種と考えることができるそうである。地盤の振動により、下の粗砂層が上の粘土層に食い込んでいく様子を見ることができる。この地区では、噴砂は認められなかったが、比較的小規模な地震が原因ということができるという。

### 2) 中央部

流路の及ばない平坦面が形成されており、ビット群がまとまって検出された。

ビット群(図23、図版8-1~4)

延長20mほどの範囲内で約70基が確認された。検出面は削平をうけているが、平面形は円形を呈しており、径20~30cm、深さ約10cmを測る。埋土は、褐色から黒褐色粗砂混じりシルトが主体で、ほぼ全体が同様の埋土である。柱痕は確認されていない。掘立柱建物が密集していたものと考えられるが、残念ながら建物の復原はできなかった。ただし、流路に隣接しており、洪水にも見舞われることのない比較的安定した部分であることから、居住域としては最適の場所ということができる。遺物が出土していないため、時期ははっきりしないが、後述する土器群などと同時期と考えることができる。

### 3) 北半部(難波側)

最終掘削面の項で述べたように自然流路がかなり錯綜している部分である。第8面では、人為的な成形などはほとんど認められず、流路が確認されたのみである。主として、第8面検出の流路掘削後に検出された流路および土器群を、第8-b面上の遺構とした。遺物量が少ないため、時期を確定することは困難であるが、第8面と第8-b面の間に大幅な時期差は認められない。個々の流路の方向は若干異なるが、この部分の流路は、全体におおよそS-60°-Wの方向に向かって流れているといえる。

溝B-86(図23、図版7-5・10-7)

北半部(難波側)の流路群の中で、最も南側で確認されたものである。第8面検出の溝B-37と溝B-38に切られていることから、第8-b面上の遺構とした。調査区を横断しており、検出状態での規模は、幅2~4m、深さ30cmを測る。やや屈曲しているが、方位はほぼ東西方向で、西方向へ流れる流路であ

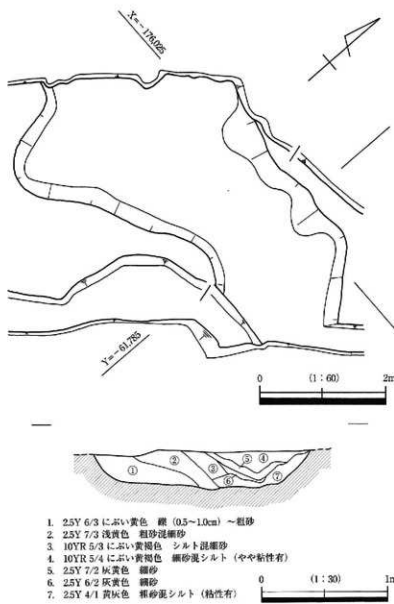


図24 溝B-86平・断面図

#### 土器群 (図26・27、図版9・10-1~4)

流路埋没段階において、ほぼ平坦面上で土器群が計6ヶ所検出された。いずれも、土坑などの掘りこみなどは確認できず、流路内に直接廃棄されたものと考えられる。これらの土器は、完形に復元できるものが多く、ほぼ原位置を保っているといえることができることから、流路によって遠くからもたらされたものとは考えにくい。A地区で検出された土器群よりはやや新しい傾向で、弥生時代末から古墳時代初頭の時期と考えることができる。

土器群1は、北半部(難波側)の流路群の北端部に位置する。調査区東端部の銅矢板付近で検出されており、さらに調査区外にひろがる可能性がある。この部分での土器群の中では、規模が大きいものである。検出面で、長径約2.0m、短径約1.4mのほぼ楕円形の範囲内に、弥生土器甕を主体とする土器群がまとまって廃棄されている。土器群はほぼ1層であり、何個体も重なっている状況はみられない。土器片の散乱は比較的少なく、完形に復元できるものが多く、原位置を保ったまま土圧で破壊された土器

る。埋土は、にぶい黄褐色粗砂や灰黄色シルトの互層であり、ラミナも見られる。人為的な改変は認められないことから、自然流路といえる。遺物は少ないため、時期は特定できない。

#### 流路群 (図25、図版7・5・10-6)

第8面で検出された溝B-38が中心的なもので、水量も最も多かったものと考えられる。詳細は後述するが、この流路から派生した流路がほぼ同じ方向で流れており、錯綜しているものといえる。流路群の堆積状況をもみても、個々の流路を判別することは非常に難しく、大きくいえば、全体でひとつの流路を形成している状況である。これらの流路がほぼ埋没した第8面で、廃棄された状況の土器群が、4ヶ所程度検出された。土器群は、製塩土器をともっており、完形に近い土器が多く含まれている。このような土器群は、既往の淡道跡の調査でも数例検出されており、特徴的なものといえる。

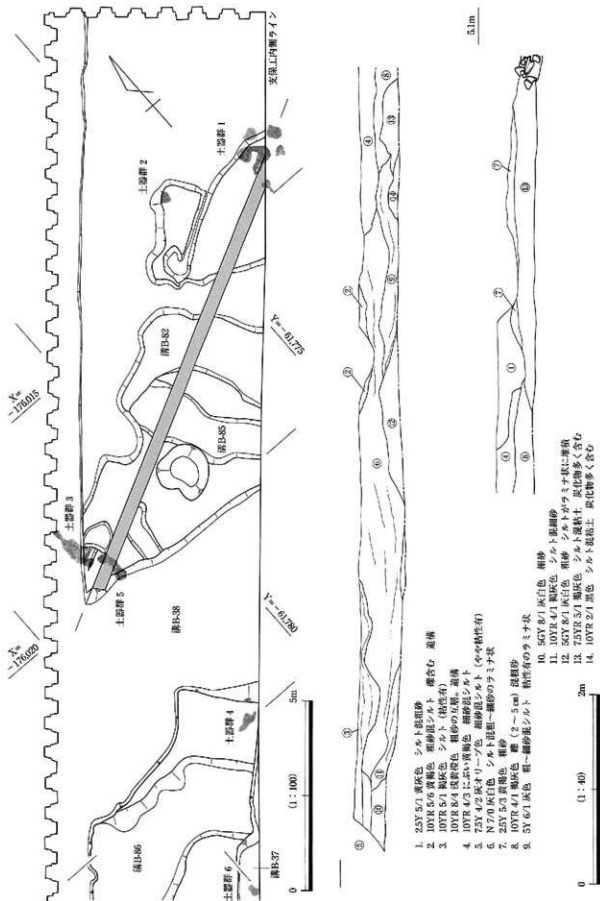


図25 B地区流路群平・断面図

1. 25Y 5/1 黒灰色 シルト混粗砂
2. 10YR 5/0 黒灰色 細砂混シルト、礫含む 遺構
3. 10YR 8/1 黒灰色 シルト混粗砂 (体積有) 遺構
4. 10YR 8/1 黒灰色 シルト混粗砂 遺構
5. 10YR 4/2 に近い黒灰色 細砂混シルト
6. 7.5Y 4/2 灰よりグレー色 細砂混シルト (やや粘性有)
7. N 7/0 灰白色 シルト混粗砂-細砂のワミナシ
8. 2.5Y 5/3 黄褐色 粗砂
9. 10YR 4/1 黒灰色 粗砂 (2-5cm) 混粗砂
10. 5Y 6/1 灰色 粗-細砂混シルト 粘性有のワミナシ
11. 10YR 4/1 黒灰色 シルト混粗砂
12. 5GY 8/1 灰白色 粗砂 シルトがワミナシに多い
13. 7.5YR 5/1 黒灰色 シルト混粗砂 灰化跡多く含む
14. 10YR 2/1 黒色 シルト混粘土 灰化跡多く含む

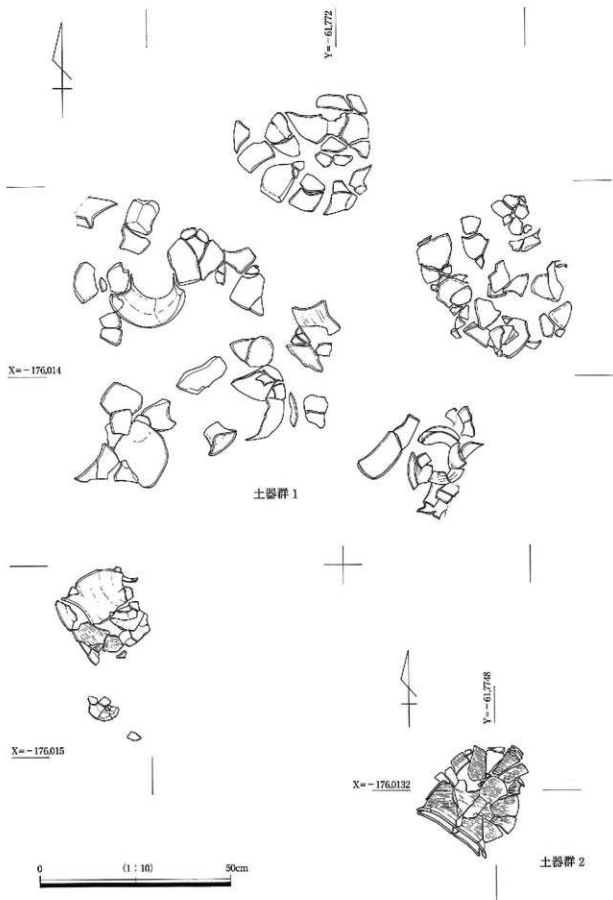


图26 B地区土器群1·2遗物出土状况

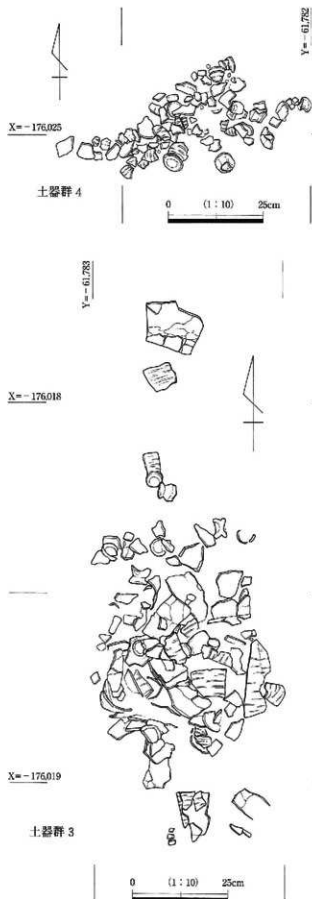


図27 B地区土器群3・4遺物出土状況

も多い。甕が主体で、壺も若干含まれているが、他の器種はみられない。このことは、土器群の性格を示すものかどうかかわからないが、ある程度器種を選別している状況がうかがわれる。

土器群2はやや離れるが、土器群1に近接しており、大きく見れば同じ土器群といえる。土器片は散乱しておらず、弥生土器甕が1点、原位置を保ったまま土圧で破壊されたものである。

土器群3は、北半部（難波側）の流路群のほぼ中央部に位置している。調査区西端部の鋼矢板付近で検出されており、さらに調査区外にひろがる可能性がある。検出面で、長径約1.1m、短径約0.6mのほぼ楕円形の範囲内に、製塩土器がまとめて廃棄されている。製塩土器は、ほとんどが脚台部だけの破片であるが、口縁部から体部破片も含まれている。ほぼ完形に復元できた個体もあるが、完形のもが廃棄されたものというよりは、体部以上を破壊された脚台部のみをまとめて廃棄したものと考えられる。土器群の破片数の傾向をみても、脚台部の破片が圧倒的に多いことから、これを裏付けることができる。漆遺跡の既往の調査でもこのような製塩土器の集積は多く検出されており、製塩作業で生じた使用済の製塩土器をまとめて廃棄したといえる。

土器群4は、溝B-38をはさんで土器群3の対岸部分に位置している。調査区東端部の鋼矢板付近で検出されており、さらに調査区外にひろがる可能性がある。検出面で、長径約0.7m、短径約0.3mのほぼ楕円形の範囲内に、製塩土器がまとめて廃棄されている。土器群3と状況が類似していることから、ほぼ同じ時期に製塩作業で生じた使用済の製塩土器をまとめて廃棄した



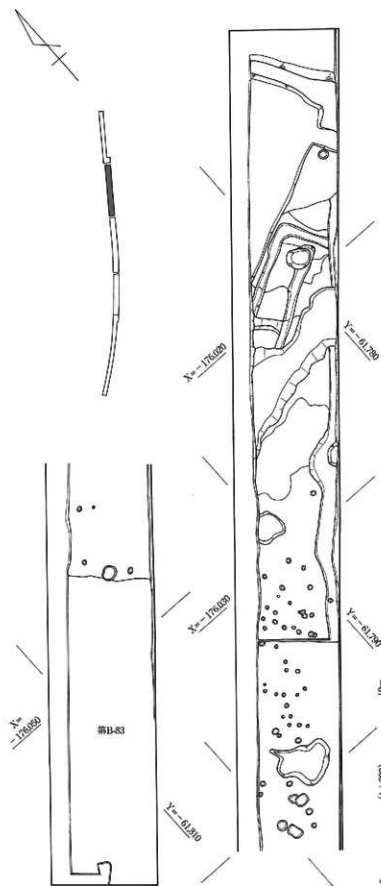


図28 B地区第8面平面図

ものと考えられる。

土器群5は、土器群3と土器群4の間に位置しており、溝B-38内にあたる。弥生土器の甕と壺が含まれており、量は少ないものの、土器群1の傾向に類似する。当初は、他の土器群と同様にまとまった量で構成されていたものと考えられるが、流路である溝B-38の流れによって、大半が流出したものとイえる。

土器群6は、北半部（難波側）の流路群の南端部に位置している。調査区東端部の銅矢板付近で検出されており、さらに調査区外にひろがる可能性がある。弥生土器甕や鉢が主体であり、土器群1などと器種構成の上では傾向が類似している。ただ、土器群の上部は、流路の流れによって失われており、完形に復元できるものはあまりみられず、残存率も50%程度のもが多い。また、全体からみると大きな相違点にはならないかもしれないが、土器が重なり合って検出されていることなど、土器群1とは検出状況が若干異なっている。ここでは、製塩土器も数点含まれている。

これらの土器群は、流路内に廃棄されたものと考えられ、特にまつりや儀礼が目的とはいえない。既往の調査例でも、儀礼的要素は検出されておらず、土器群に特別な意味は見いだせない。製塩作業をおこなう作業場が近接して存在する可能性が高いものと考えられるが、既往の調査でも検出されて

ならず、実体はまだ究明されていない状況である。土器群については、意識的に器種を選別している傾向はみられるが、現在のところ、製塩作業工程の中で生じた不要品を単に廃棄したものと考えるのが妥当であろう。

### 溝B-38 (図29、図版6)

北半部(難波側)の流路群のほぼ中央部に位置しており、規模も大きく、中心的な流路といえることができる。検出面は第8面で、溝B-86を切っており、流路群の中では比較的新しい流路といえる。調査区を横断しており、検出状態での規模は、幅1.6~3.0m、深さ約40cmを測る。方位は $W-10^{\circ}-S$ で、西方向へ流れる流路である。埋土は、にぶい黄橙色細砂混じりシルトと褐灰色細砂層が主体であり、ラミナがみられる。もともとこの流路群では大小の流路がほぼ同じ方向に流れていたが、水量の多い時期には、この溝部分を中心として幅いっぱいには広がっていたようである。このため、堆積状況は複雑で、平面で流路を判別することは、非常に困難である。判別できた溝B-39とは重複関係があるが、土層が錯綜しており、堆積状況の観察からは前後関係ははっきりしない。ただ、遺物量は少ないものの、溝B-39から須恵器が出土していることから、溝B-38のほうが先行した流路と考えることができる。

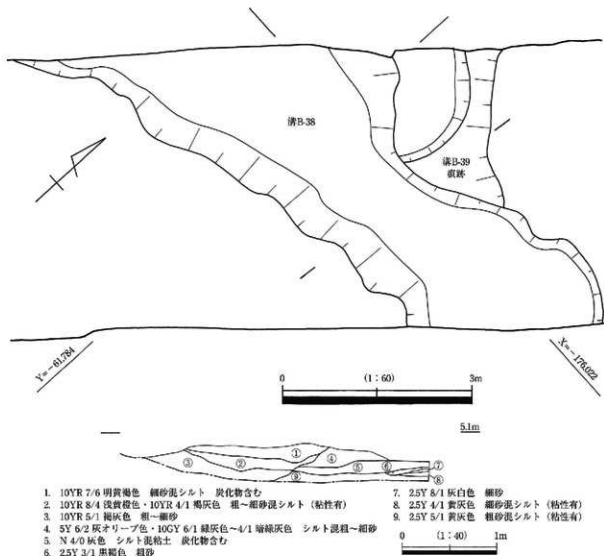


図29 溝B-38平・断面図

### 溝B-37 (図30)

北半部(難波側)の流路群の南側で検出された。調査区南端部に位置しており、大半が調査区外にひろがっている。検出状態での規模は、幅約1.5m、深さ約30cmを測る。埋土は、褐灰色シルトが主体で、細砂が混じる。部分的な検出であることから、溝状を呈していないが、礫を含んでおり、流路の一部と考えられることから溝と判断した。出土遺物は少なく、時期は確定できないが、溝B-86を切っていることから、溝B-38などととも流路群の中では比較的新しい流路といえる。出土遺物は少なく、時期は確定できない。

### 土坑B-32 (図30)

北半部(難波側)の流路群の南側で検出された。調査区北端部に位置しており、一部調査区外にひろがる。検出面で隅丸方形形状を呈しており、一辺約1.5m、深さ約30cmを測る。埋土は、淡黄色シルト混じり細砂が主体で、青灰色シルトが混在している。人為的に掘削されており、井戸として使われていた可能性が考えられる。

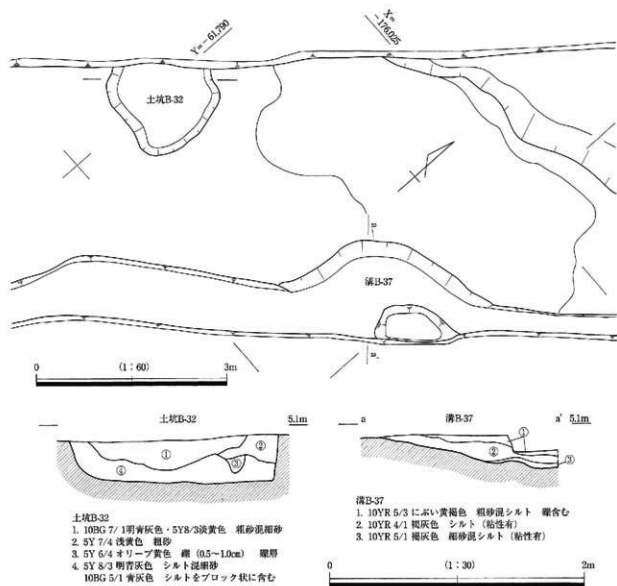


図30 土坑B-32・溝B-37平・断面図

### (3) 第6面

第8面を覆う黄褐色細砂混じりシルト層の上面で、耕作にともなう鋤溝や溝を主体とする遺構面が検出され、第6面として認識できた。北半部（難波側）と南半部（和歌山側）で遺構の状況は異なっている。

北半部（難波側）では、耕作にともなう溝が、ほぼ同じ方向で一部重複しながら並んで検出された。畑作にともなう畝溝と考えられ、検出面での規模は、幅30～70cm、深さ10～20cmを測る。方向は、ほぼN-55°-Eにそろっており、一部直交する溝もみられる。埋土は、赤灰色シルトが基本である。ただ、全体が同じ様相を呈しているわけではなく、溝B-4や溝B-6などは細砂が混じる程度であるのに対し、溝B-7や溝B-8などでは細砂が主体となっている。これらの相違は若干の時期差を示している可能性はあるが、遺物はほとんど出土していないため、時期は確定できない。また、重複関係も判別できない。

南半部（和歌山側）では、溝が検出されたが、北半部とは様相は異なっている。北半部で検出された溝より小規模であり、検出面で幅約20cm、深さ5cm弱を測る。方向は、N-45°-Eでそろっており、直交する溝もみられる。北半部の溝は、畝溝といえるが、南半部での溝は鋤溝と考えられ、方向も異なることから、別区画の耕作地ということが出来る。

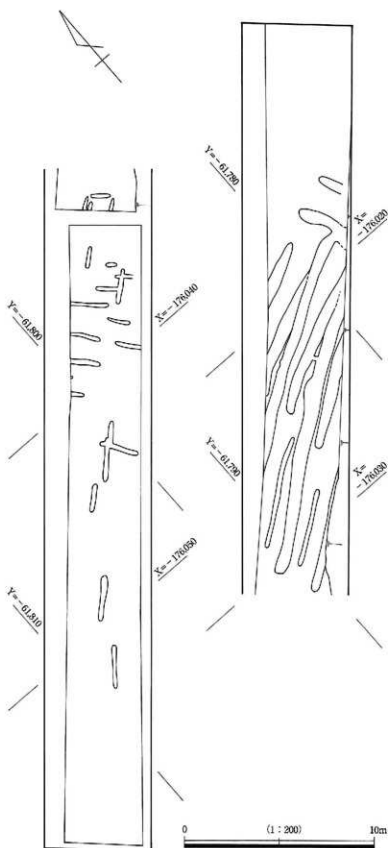


図31 B地区第6面平面図

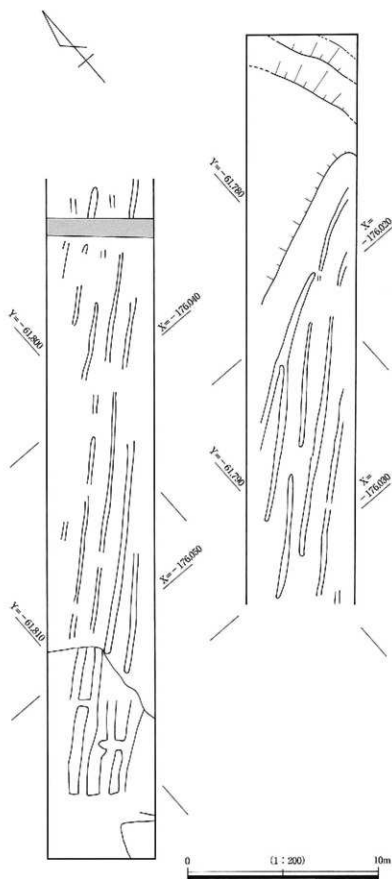


図32 B地区第3面平面図

第8面では、調査区を横切る流路が多く存在しており、耕作地としての利用はできなかったようであるが、その後流路が廃絶した結果、耕作地としての利用が始まったものといえる。第6面では、調査区を横切る流路は検出されていない。遺物がほとんど出土していないことから、時期の確定はできないが、古代末から中世前期までには開発が始まり、この部分での耕作地がつくられていったものと考えられる。

#### (4) 第3面

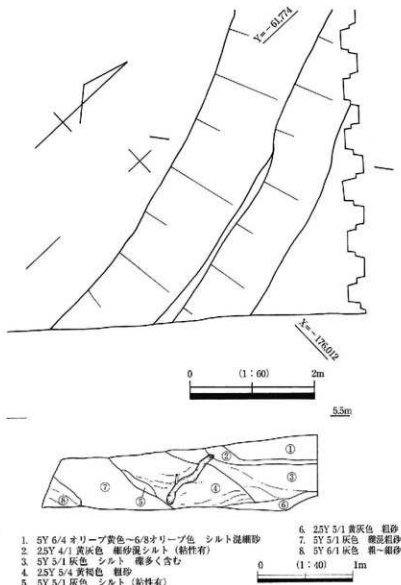
第6面を覆う5層の灰色細砂混じりシルトと4層の明黄褐色シルト混じり粗砂の上面で、耕作にともなう鋤溝や畝溝を主体とする遺構面が検出され、第3面として認識できた。A地区と同様に中世以降の耕作面と考えられる。調査区北端部で調査区を横切る水路（溝B-1）が検出されたほか、ほぼ全面で鋤溝が認められた。

#### 鋤溝（図32、図版11-5・6）

第6面と異なり、全体がほぼ同じ方向を示している。方位はN-45°-Eで、直交するものも若干みられる。ただ、北端部では、溝B-1にほぼ直交し、北側に下がる段差が認められ、この部分の鋤溝は若干この段差の方向に規制されているため、やや傾いている。この段差部分は、耕作地の区画と考えられ、北側では鋤溝などは検出されていない。鋤溝の検出面での規模はほぼ同じで、幅約20cm、深さ5cm弱である。

### 溝B-1 (図33、図版10-8)

調査区北端部で検出された、調査区を横切る水路である。A地区とB地区を分ける現在の水路のものになるものと考えられ、北側は調査区外にひろがる。南肩部を検出したのみであるが、自然堆積による流路の埋没や人為的な掘削が繰り返しおこなわれていることから、流路の形状ははっきりしない。もともとはこの部分を流れる自然流路を人為的に掘削して溝状にしたものといえる。埋土は、黄灰色粗砂混じりシルトや灰色泥混じり粗砂が混在しており、流水堆積であることからラミナも見られる。礫も多く検出されていることから、かなり水量が多く、流れが強い時期もあったようである。遺物は、陶磁器や須臾器、瓦などが出土していることから、時期は中世後期頃と推定される。溝A-1と同じ溝と考えられ、両地区の成果を合わせると、最大幅約10mの規模であることがわかる。ここでは確認で



- |                          |              |                 |      |
|--------------------------|--------------|-----------------|------|
| 1. 5Y 6/4 オリーブ黄～6.8オリーブ色 | シルト混雑砂       | 6. 2.5Y 5/1 黄灰色 | 粗砂   |
| 2. 2.5Y 4/1 黄灰色          | 雑砂混シルト (粘性有) | 7. 5Y 5/1 灰色    | 礫混粗砂 |
| 3. 5Y 5/1 灰色             | シルト 礫多く含む    | 8. 5Y 6/1 灰色    | 礫～粗砂 |
| 4. 2.5Y 5/4 黄褐色          | 粗砂           |                 |      |
| 5. 5Y 5/1 灰色             | シルト (粘性有)    |                 |      |

図33 溝B-1平・断面図

きなかったが、溝A-1で杭の痕跡がみつかったことから、構列の存在も推定される。

これ以外に、ここでは詳述しないが、線路盛土除去面である第2面も確認されている。A地区同様に耕作にともなう畝溝などがみつかったり、隣接地の耕作地となっている部分と地割りは同一である。

### 3. 遺物

B地区出土遺物は、遺構からは第8面検出の土器群、包含層では線路盛土からのものが多い。土器群では、弥生時代末から古墳時代初頭のもの为主体となっており、甕や鉢、壺などで完形に復元できるものが多い。また、製塩土器がまとまって出土しており、ほとんどが脚台部の破片であるが、完形に復元できるものもみられる。包含層からの遺物は時期が一定しておらず、後世の混入品が多い。

#### 土器群1・2 (図34、図版43・44)

北半部(難波側)の第8面で、土器群が6ヶ所検出されており、その中で最も規模が大きいものである。甕が主体で、図化できたものは9点を数える。

図34の45～51は甕である。いずれも体部外面に明瞭なタキ調整が施されており、器高は体部最大径をこえている。45は、受口状口縁をもつ中型の甕で、器高は28.8cmを測る。外面に右上がり斜め方向の

タタキ調整が施されている。内面はナデ調整が見られる。46は、やや受口状気味の口縁をもつ小型の甕である。体部外面は摩耗しており、調整ははっきりしないが、タタキ調整の痕跡が認められる。47は、45と形状が類似するが、口縁が開き気味で受口状を呈していない。外面に右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面はナデ調整が見られる。48は、中型の甕で、口縁部が短く外反している。口縁端部は丸くおさまる。体部外面にはやや右上がりの横方向のタタキ調整が施されている。内外面に煤が付着している。口縁部には、粘土接合痕が残る。49は、中型の甕で、口縁部が短く外反している。口縁端部は丸くおさまる。体部外面には横方向のタタキ調整が施されている。口縁部には、粘土接合痕が残る。内面はナデ調整が見られる。50は、中型の甕で、口縁部が短く外反している。口縁端部は丸くおさまる。外面に右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。内面には、部分的にハケ調整の痕跡が認められる。51は、甕の底部である。外面にはタタキ調整が施されている。52は、壺底部と考えられるが、表面摩耗のため、調整ははっきりしない。53は、壺の体部である。外面の剝離が著しいためはっきりしないが、タタキ調整の痕跡が認められる。内面はナデ調整が見られる。

図34の54は、土器群2で検出されたほぼ完形の中型甕である。口縁部が短く外反しており、口縁端部は丸くおさまる。体部外面にはやや右上がりの横方向のタタキ調整が施されている。内面はハケ調整の

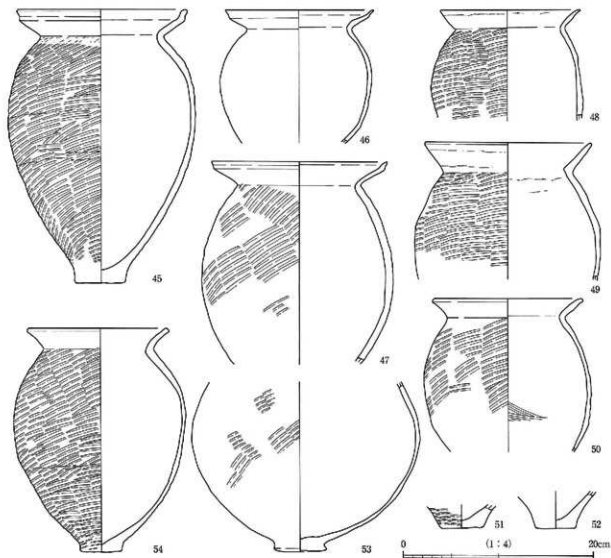


図34 B地区出土遺物1(土器群1・2)

後ナデ調整をおこなっている。内外面に煤が付着している。

土器群 3・4 (図35、図版45)

北半部(難波側)の土器群の中で、製塩土器のみで構成された土器群である。ほとんどが脚台部のみの破片であるが、中には口縁部や体部の破片も含まれている。破片の傾向をみても脚台部が圧倒的に多く、復元作業は困難を極めた。いわゆる脚台Ⅱ式と呼ばれる形式がほとんどを占めている。

図35の55は、ほぼ完形に復元できたものである。器高26.9cm、口径推定8.4cm、器厚0.3~0.5cm、脚裾部径推定4.4cmを測る。斜め上方にまっすぐ伸びる体部に、外方へふんばる小さな脚台がついている。体部外面には、全面に横方向のタタキ調整が施されているが、口縁部付近はナデ調整で仕上げられている。内面は全面にナデ調整がみられるが、底部内面は棒状工具による押さえが施されている。脚部は小さく、指押さえて接合されている。56は、55とほぼ同じ大きさで、調整もほぼ同様に施されているものである。器高26.0cm、口径推定10.0cm、器厚0.3~0.6cm、脚裾部径推定4.4cmを測る。体部や口縁部に粘土の接合痕が認められる。57は、55や56と同じ大きさのものと考えられるが、口縁部を欠損している。現存の器高22.1cm、器厚0.3~0.5cm、脚裾部径4.5cmを測る。58~60・63は、口縁部である。外面にタタキ調整、内面にナデ調整が施されているが、59・63は内面にハケ調整が認められる。

61・62・64~80は、脚台から体部下半が残存しているものである。いずれも、体部外面にはタタキ調整、内面はナデ調整が施されており、中には底部内面に棒状工具による押さえが認められるものもみら

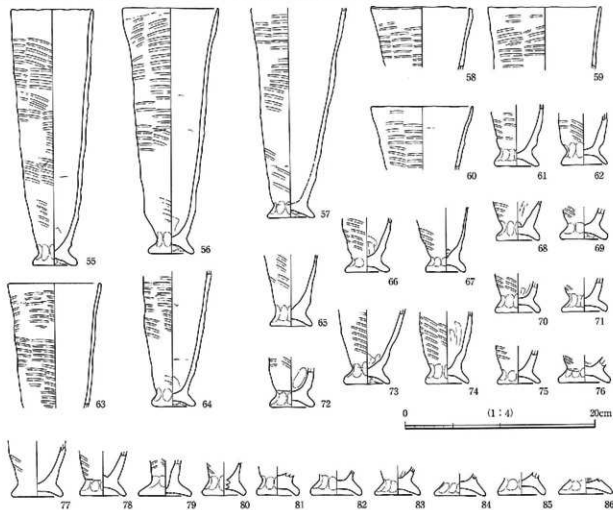


図35 B地区出土遺物2(土器群3・4)



れる。また、78は被熱のため、内面外面ともに赤く変色している。81~86は、脚台部のみで、図化が可能なのであるが、基本的にはすべて脚台Ⅱ式である。

土器群5・6 (図36、図版44)

北半部(難波側)の流路群の南端部に位置する土器群で、溝B-38の流れによって上部が流されてお  
り、土器群1と比べると残存状況はよくない。甕や壺が主体で、鉢もみられる。

図36の87・88は、土器群5から出土したものである。87は、庄内系甕である。体部外面に右上がり斜  
め方向のタタキ調整が施されており、後に横方向のヘラケズリがみられる。口縁部は外反しており、端  
部をつまみあげている。内面はナデ調整がみられる。体部はやや丸みをおびている。88は、広口壺であ  
る。体部は球形を呈している。体部外面は横方向のタタキ調整の後、縦方向のヘラミガキが施されてい

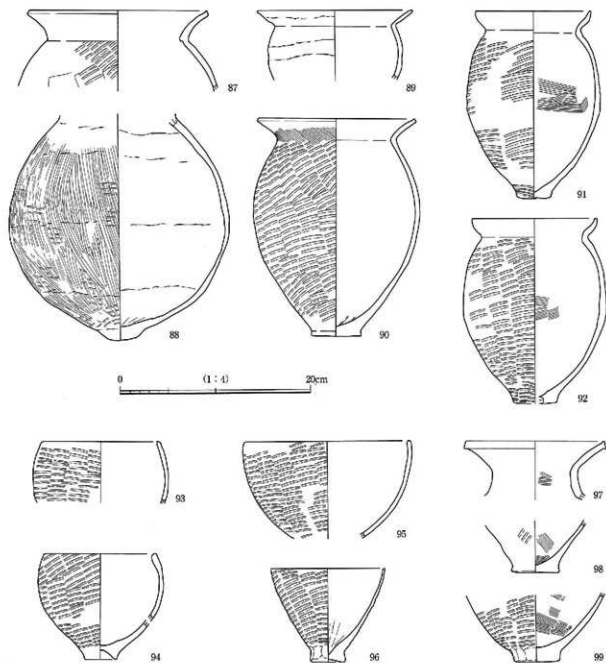


図36 B地区出土遺物3 (土器群5・6)

るが、不十分であるため痕跡が残っている。内面はナデ調整が施されており、底部内面には放射状にヘラ工具のあたりがみられる。粘土の接合痕が明瞭に残っており、全体につくりが雑である。

土器群5は、弥生時代最終末から庄内併行期の時期と考えられ、土器群1よりやや新しい印象を与える。出土量が少ないためはっきりしないが、第8面の遺構は、庄内併行期まで対応するものといえる。

89~99は、土器群6から出土したものである。89は、体部下半を欠損しているが、鉢である。口縁部は強く外反しており、縁部は丸く仕上げられている。外面および内面はナデ調整が施されており、赤色顔料が付着している可能性がある。粘土の接合痕が明瞭に認められる。90は、中型の甕である。体部外面には明瞭な右上がり斜め方向のタタキ調整が施されており、口縁部の接合部分にハケ調整がみられる。口縁部は短く外反し、器高が体部最大径をこえている。内面はナデ調整が施されており、底部内面には放射状にヘラ工具のあたりがみられる。91は、やや小型の甕である。体部外面には、やや右上がり斜め方向のタタキ調整が施されている。口縁部は短く外反しているが、やや受け口状である。内面は最終的にナデ調整で仕上げられているが、横方向のハケ調整の痕跡が認められる。92は、やや小型の甕で、91とはほぼ同じ形状を呈している。粘土の接合痕がみられるが、器壁表面の調整も類似している。93~95は、鉢で碗形を呈しており、いずれも体部外面に明瞭なタタキ調整が施されており、口縁部がやや内湾気味である。口縁部は、いずれも丸く仕上げられている。93は、体部下半を欠損しているが、内面はナデ調整で仕上げられており、口縁部は丸みを帯びて内湾する。外面のタタキ調整は、横方向である。94は、93とはほぼ同じ形状を呈しているが、口縁部の内面がやや肥厚する。外面のタタキ調整は、やや右上がり斜め方向である。底部はナデ調整で仕上げられている。95は、底部を欠損しているが、大型品であり、口縁部の内湾は93・94よりも弱い。外面のタタキ調整は、やや右上がり斜め方向である。96は、小型の

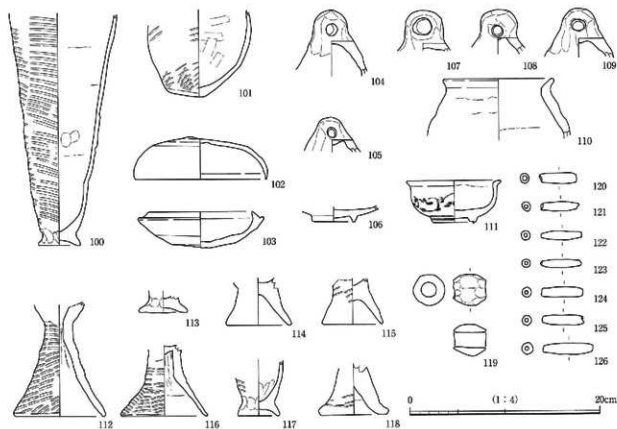


図37 B地区出土遺物4

鉢であるが、製塩土器の可能性も考えられる。甕の体部下半をそのまま鉢にしたもので、底部が上げ底状を呈しており、指押さえて成形している。体部外面に明瞭なタタキ調整が施されている。口縁部は直線的にひろがっており、93～95とは形状が異なる。97は、広口壺口縁部である。器壁表面が摩耗しているため、調整ははっきりしないが、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケ調整の後、ナデ調整が施されている。98は、小型甕か小型鉢の底部である。外面はタタキ調整、内面はハケ調整が施されている。99は碗形鉢の底部で、外面はタタキ調整、内面はハケ調整の後、ナデ調整が施されている。底部が上げ底状を呈しており、指押さえて成形している。

上器群6の時期は、器種が偏っていることからはっきりしないが、土器群5より古く、土器群1とはほぼ同じか、やや新しい時期と考えることができる。

その他の遺構・包含層（図37、図版45・46）

ここでは、土器群以外の遺構出土遺物の中で主なものと、包含層出土の製塩土器と蛸壺について記述することとする。

図37の100・101は、溝B-83から出土したものである。100は、脚台Ⅱ式の製塩土器で、口縁部は欠損するものの、ほぼ体部から底部までそろっているものである。残存高24.5cm、口径11.3cm、器厚0.3～0.6cm、脚裾部径4.4cmを測る。斜め上方にまっすぐ伸びる体部に小さな脚台がついている。体部外面には、全面に横方向のタタキ調整が施されており、脚部は指押さえて接合されている。内面は全面にナデ調整がほどこされているが、一部指押さえがみられる。古墳時代前期のものと考えられる。101は、土器器小型甕である。流路の中で砂により器壁表面が摩耗しており、口縁部は欠損する。全体に成形が粗く、器形は整っていない。外面はタタキ調整の後、ナデ調整で仕上げられているが、タタキ目が残っている。体部内面は横方向のナデ、底部は縦方向のナデが施されている。

102・103は、溝B-39から出土したものである。102は、須恵器杯蓋で、外面の一部に赤く変色した部分がある。103は、須恵器杯身で焼成は良好なものである。6世紀後半頃の時期と考えられる。

104・105は、溝B-38から出土したものである。いずれも須恵器飯蛸壺で、釣鐘状を呈しており、環状の紐穴部分が残存している。この部分は、ナデ調整で仕上げられている。

106は、溝B-1から出土したものである。施釉陶器皿であるが、底部のみ残存している。他に陶磁器や瓦が出土している。

107～126は、包含層から出土したものである。包含層の時期を明確にあらわすものではないため、蛸壺や製塩土器、土釜のみ図化した。107～109は須恵器飯蛸壺である。釣鐘状を呈しており、環状の紐穴部分が残存している。110は土師器蛸壺で、器壁表面は全面ナデ調整で仕上げられている。粘土接合痕が明瞭に残っている。111は波佐見焼染付碗であるが、仏具の可能性が。底部内面に蛇の目状に砂が付着している。112～118は、北半部（難波側）の流路群から出土した製塩土器である。112は、脚台Ⅰ式の脚台で、外方へしっかりとふんばる形状である。外面には横方向のタタキ調整が施されており、内面はナデ調整が見られる。113は、脚台Ⅱ式の脚台である。114は、脚台Ⅰ式の脚台であるが、タタキ調整はみられず、ナデ調整のみである。115は、脚台Ⅰ式の脚台で、脚台外面はナデ調整が見られる。被熱のため赤く変色している。116は、脚台Ⅰ式の脚台で、外面には横方向のタタキ調整が施されている。117は、脚台Ⅱ式の脚台である。118は、脚台Ⅰ式の脚台で、被熱のため赤く変色している。119は、大型の土釜である。ほぼ完形で残存長8.7cm、径5.0cm、孔径2.0cmを測る。表面はナデ調整で仕上げられている。120～126は、小型の土釜である。長さ4.0～5.2cm、径約1.0cm、孔径0.4cmを測る。

## 第3節 C地区

前節で述べたように、A地区からD-1地区は谷地形にあたり、A地区からC地区にかけては緩やかな下り斜面となっている。C地区は谷地形の底部に近いが、中央部分で山側から伸びる台地状の高まりが認められ、その南側で自然流路が調査区を横切っている。橋脚の下部工事箇所にあたるため、地表面から約5m掘り下げることになり、土留め支保工を全面に施している。橋脚の形状や土留め方法の違いにより、中央から南半部（和歌山側）は約50cm高くなっている。

### 1. 層序

A地区やB地区と同様に、線路盛土のため、土層が比較的良好に残存していた。この地区は、谷地形を横切る部分にあたることから、線路盛土が厚く盛られており、1.0~1.8mにも及ぶ。第3面より上層に関しては、基本的にA地区やB地区と同様の堆積状況を示している。第3面より下の土層は、中央部分の高まりの両側で異なっている。北側（難波側）は大きな流路の堆積であることから、礫や粗砂が厚く堆積しており、遺構面ははっきりしない。南側（和歌山側）でも、基本的には大きな流路の堆積であるが、中で細かい流路が重複していることから、非常に錯綜した堆積になっている。ただ、B地区と同様に、第3面の耕作土層を除去した面が部分的に確認されたため、第4面とした。この下の黄色細砂混じりシルト層を除去すると、流路の堆積である粗砂混じり礫層がひろがる。この上面で流路が検出されたため、この面を第5面とした。さらに、遺物は検出されなかったが、掘削限界面まで掘り下げ、床付け面で水平にそろえた。ここでも完掘できなかった自然流路が存在するため、流路の方向のみ確認した。その掘削途中で、上層断面および平面で小規模な地震による土層のずれを確認した。

### 2. 遺構

大きく分けて、遺構面は4面を確認することができた。その中で、第2面と第3面は部分的な検出にとどまる。第4面では、遺物をともなう溝が検出されている。下部では自然流路の堆積が厚くなっているが、全体に遺物は検出されていない。

#### (1) 最終掘削面

B地区と同様に、調査の最終段階では、土留め支保工を施したうえで、掘削限界面まで掘り下げて水平にそろえた。掘削はできなかったが、調査区を横断する流路が部分的に確認された。かなり強い流れが繰り返されていたようで、礫の堆積が目立っ

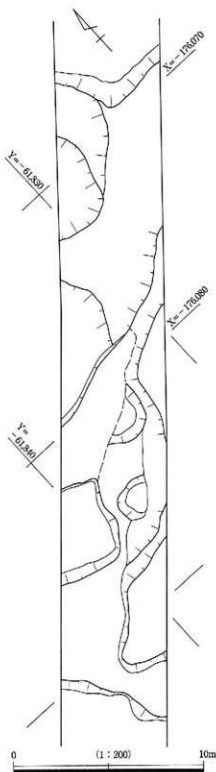
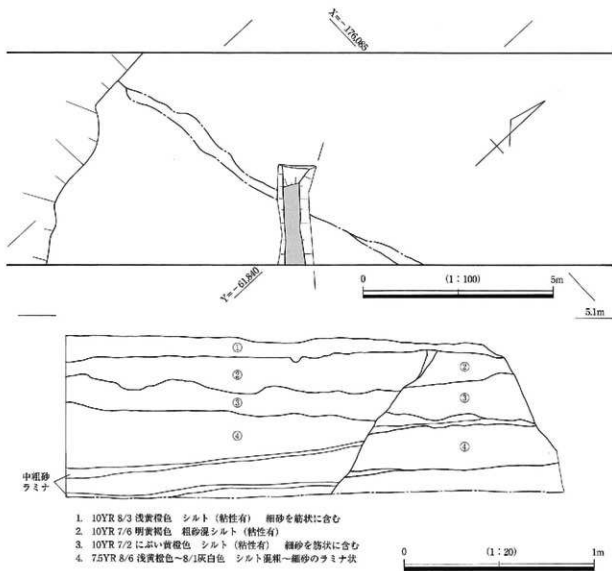


図38 C地区最終掘削面平面図

ている。礫と粗砂層が互層をなしており、堆積の違いで流路を確認した。礫の堆積が円形の窪地状を呈する部分が数カ所検出されたことから、流れの強さを物語っている。おおむね、B地区と同様に調査区を横断し、東から西方向へ流れている。調査区の中央部分に、山側から張り出す舌状台地の先端部がおよんでいることから、流路はこの部分を避けている。ここでは、人為的な掘削や成型などは確認できず、遺物も出土していない。流路も完掘していないため、時期を確定することはできない。

南半部（和歌山側）の最終掘削段階で、床付け作業中に調査区を横切る地滑り痕を確認した。床付け面で、ほぼ直線状に東西方向に伸びており、方向はN-75°-Eである。線状であるが、幅20~40cmのひろがりが見られる部分もあり、土質の違いにより形状が異なっている。小規模な地震による地滑り痕であり、土層断面の観察により約10cm上層がずれている。土層断面観察により、約55°の傾斜で南側（和歌山側）が下がっていることが確認された。地滑りの方向は、南側に向かったものと考えられる。ちょうど山側から伸びる舌状台地の南側にあたり、台地上から谷に向かって下がる方向と一致する。掘削当初に発見できなかったため、この小規模地震発生時期は特定することはできない。また、自然流路の堆積状況では、土層観察においても明確な時期をおさえることが困難であった。



1. 10YR 8/3 浅黄褐色 シルト（粘性有） 細砂を筋状に含む
2. 10YR 7/6 明黄褐色 粗砂混シルト（粘性有）
3. 10YR 7/2 にぶい黄褐色 シルト（粘性有） 細砂を筋状に含む
4. 7.5YR 8/6 浅黄褐色~8/1灰白色 シルト混粗~細砂のラミナ状

図39 C地区地滑り痕平・断面図

B地区の下層で、粘土層の乱れが認められ、この部分でも土層に乱れがみられることから、小規模な地震の影響は、時期は特定できないものの、恒常的にこの地域に及んでいたことがわかる。

## (2) 第5面

床付け面付近の下層では、全体に流路の中に堆積した礫や粗砂が錯綜しているが、礫層上面で現在の地形のもととなる起伏が明らかになった。この面を境に下では流路の堆積が錯綜しており、不安定な土層であるが、上では礫をとまうような大規模な流水堆積はみられないため、比較的安定した状況を示している。中央部では山側から伸びる舌状台地の先端部分が検出され、南側の谷地形との段差が明確になった。谷地形内の流路は小規模なものが重複しており、ほぼ南北方向に伸びている。この部分で約70cmの比高差があるが、台地上の高台部分には約30cmの落ち込みがみられる。これらの他にも起伏が多く、人為的な成形の可能性はあるものの、遺物は出土していないため、自然地形と考えることができる。

一方、台地の北側には、ほぼ直線的な溝が検出され、人為的に掘削されたものといえる。幅約1.0m、深さ20cmを測り、方向はN-50°-Eである。台地上の端部に位置しており、舌状台地の北層に沿った方向でつくられて

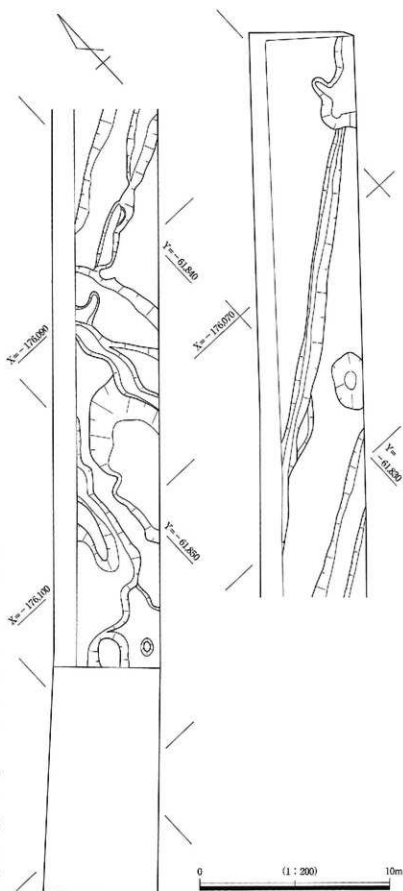


図40 C地区第5面平面図

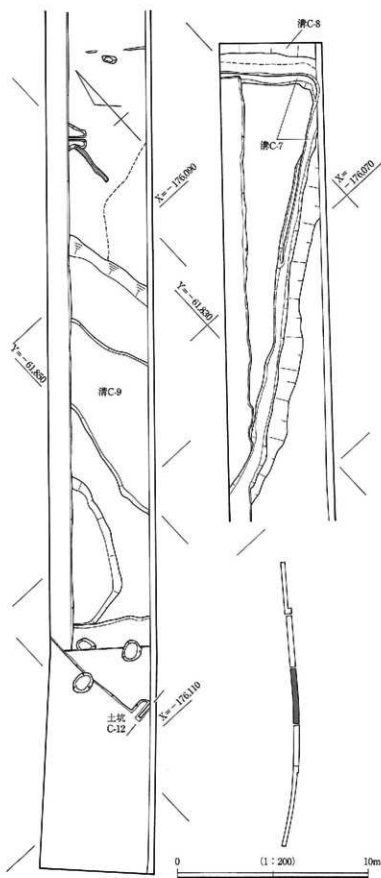


図41 C地区第4面平面図

いる。台地上の耕作地からの排水路、あるいは区画溝と考えられる。ただし、遺物の出土がないため、時期ははっきりしない。

### (3) 第4面

第5面を覆う褐色系細砂混じりシルト層の上面で、段差部分を成形してつくられた溝などが検出され、第4面と設定した。ただし、全面が同時期ではないようで、中央部の台地の北側（難波側）と南側（和歌山側）では、検出遺構からの出土遺物に時期差が認められる。

南半部（和歌山側）では、自然流路を利用した溝C-9などがつくられており、調査区を横切っている。また、性格は不明であるが、土坑C-12などの土坑も検出されている。これらの遺構出土遺物の時期は、古代以前に相当するが、溝が錯綜した部分であるため、そのまま遺構の時期をあらわしているとはいえない。南端部は、自然流路の流れがこの面でも残っており、依然として自然流路がこの部分を横切って流れていたことがわかる。

中央部の舌状台地の先端部分は、端部が成形されており、土地の区画が明確に区分されている。特に北半部（難波側）では、段の下端部に溝C-7が掘削されており、耕作地の区分を明確にしている。北端部では、調査区を横切るかたちで溝C-8が検出されており、溝C-7と一体のものと考えられる。これらの溝の掘削時期ははっきりしないものの、最終的には近代まで存続しており、出土遺物はかなり新しい時期のもの

みられる。台地の高台部は整地されており、ほぼ平坦であるが、この部分で明確な遺構は検出されていない。ピットなどは検出されておらず、おそらく居住地というよりも耕作地として利用されていたものと考えられる。ただし、台地上で、鋤溝などは一部しか検出されていない。

#### 溝C-9 (図43、図版14-1・16-1~3)

南半部(和歌山側)の流路群の中で、最も北側で検出された。調査区をほぼ南北方向に横切る溝である。検出面は、流路が錯綜してはつきりしない部分であったため、一応第4面で検出したが、礫層を掘り込んでいることから、第5面の遺構の可能性がある。底部は掘削限界に達することから、完掘できていない。検出状態での規模は、幅3.5~5.0m以上、深さ約0.7mを測り、おおよそN-5°-Eの方向に流れている。

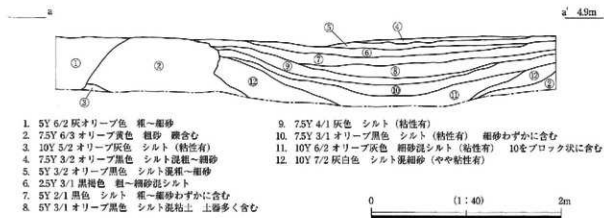
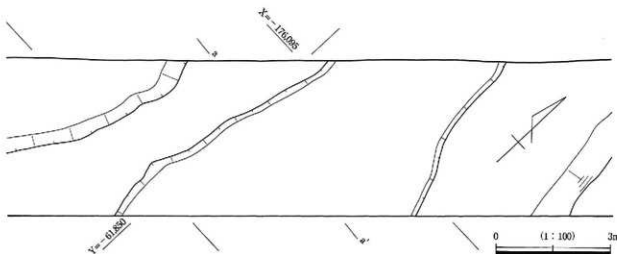
溝は自然堆積で埋まっており、粗砂とシルトによるラミナがみられ、細かいレンズ状の堆積が明瞭に確認できる。土層観察により、底部はさらに20~30cm下がるものと考えられる。はっきりとした痕跡は見られないが、もと自然流路だったものを溝として利用していたものと考えられる。掘削限界に近い深さの



1. 25Y 5/6 黄褐色 シルト (粘性有)
2. 25Y 3/1 黒褐色 シルト (粘性有)  
炭化物多く含む
3. 7.5Y 5/3 灰オリーブ色 シルト 細砂含む
4. 5Y 5/4 オリーブ色 シルト (粘性有)  
炭化物含む



図42 土坑C-12断面図



- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 5Y 6/2 灰オリーブ色 粗~細砂</li> <li>2. 7.5Y 6/3 オリーブ黄色 粗砂 礫含む</li> <li>3. 10Y 5/2 オリーブ灰色 シルト (粘性有)</li> <li>4. 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト混粗~細砂</li> <li>5. 5Y 3/2 オリーブ黒色 シルト混粗~細砂</li> <li>6. 2.5Y 3/1 黒褐色 粗~細砂混シルト</li> <li>7. 5Y 2/1 黒色 シルト 粗~細砂わずかに含む</li> <li>8. 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト泥粘土 上層多く含む</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>9. 7.5Y 4/1 灰色 シルト (粘性有)</li> <li>10. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト (粘性有) 粗砂わずかに含む</li> <li>11. 10Y 6/2 オリーブ灰色 粗砂混シルト (粘性有) 10をブロック状に含む</li> <li>12. 10Y 7/2 灰白色 シルト混細砂 (やや粘性有)</li> </ol> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

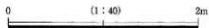


図43 溝C-9平・断面図



部分から、土器片がまとまって出土した。細片であるため、形状ははっきりしなかったが、整理作業の段階で弥生土器であることが判明した。時期は弥生時代後期と考えられ、A地区やB地区で検出された時期の土器がこでも出土していることになる。C地区内では、きわめて出土量は少ないが、この部分まで当時の活動範囲がひろがっていたことがわかる。

#### 土坑C-12 (図42、図版16-4)

南半部(和歌山側)の流路群の最も南側で検出された。調査区端部に位置しており、南側が調査区外にひろがる。溝C-9と同様に自然流路が錯綜している場所であることから、検出面ははっきりしておらず、時期の決定はできない。ただ、溝C-9が使われていた時期とはそれほど差はなく、ほぼ同時期頃と考えることができる。規模ははっきりしないが、平面形は円形を呈している。底部は掘削限界のため、深さ約50cmまでで止めている。埋土は黄褐色シルトが基本であるが、部分的に炭化物を含む。井戸として掘削されたものと考えられるが、遺物はほとんど出土していない。ただ、流路が交錯していることから、井戸を掘削するには不適當な立地条件であり、疑問点も残る。

#### 溝C-7・8 (図44・45、図版16-5~7・17-1~4)

北半部(難波側)で、舌状台地の下端に沿って掘削された溝C-7が検出された。耕作地の水路としてつくられたものといえるが、ほぼ直線的で、区画もあわせて意識しているものと考えられる。台地部

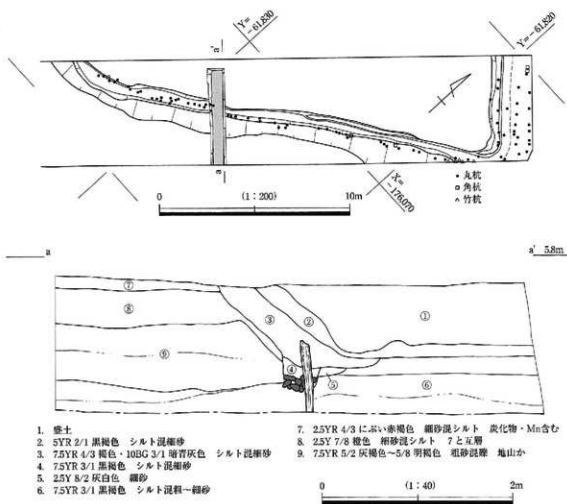
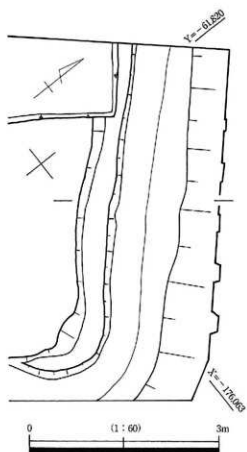


図44 溝C-7平面図、調査区横断面図

分も成形されており、斜面が一様になっている。検出面での規模は、幅40~80cm、深さ約20cmを測る。底部のほぼ全面に径約5cmの玉石が敷き詰められており、溝を成形している。また、台地側には、径約4cmの杭が連続して打ち込まれており、なんらかの土留めを施していたものと考えられる。断面観察の結果、溝C-7は、検出面より台地側につくられていたが、埋没した後にやや谷側にずれた位置で再び掘削され、近代まで利用されていたものといえる。埋土は、初期に堆積した層が黒褐色シルト混じり細砂で、部分的に台地上からのシルトブロックがみられる。上層にはぶい黄色細砂が堆積しており、しばらくはゆるやかな流水状態であったことがわかる。

この溝が最初に掘削された時期は不明であるが、中世末頃にはつくられた可能性が強い。ただ、出土遺物は近世の陶磁器が多く、中世の遺物はほとんどみられない。補強のため石を底に敷き詰めた時期も近世と考えられ、この時期に杭による段の補強を同時におこなっていたものといえる。狭い範囲に杭の痕跡が多くみられることから、頻りに補強を繰り返していたことがわかる。また、底部に敷き詰められた石には、水路として利用されていた時期のヘドロが一部残存しているため、滞水状態であり強い流れはなかったことを示している。

調査区北端部を横切ったかたちで、溝C-7と溝C-8が検出された。溝C-8は、調査区端部にかかっており、北半部は調査区外にひろがるため、全容ははっきりしない。ここでも杭の痕跡が多くみられ、区画をかなり意識していたものと考えられる。C地区とB地区を分かち大きな区画溝と考えられるため、溝C-7はこの部分で屈曲し、平行して並ぶ。併存していたものと考えられるが、区画溝である溝C-8に規制されたかたちで溝C-7がつくら



1. 7.5YR 3/1 黒褐色 細砂混シルトのラミナ状
2. 10YR 3/1 黒褐色 シルト混細砂 シルトをブロック状に含む
3. 2.5Y 6/4 ぶい黄色 粗〜細砂
4. 7.5YR 4/1 黒褐色 シルト混粗砂 (やや粘性有)
5. 7.5YR 3/1 黒褐色 シルト混粗〜細砂
6. 7.5YR 7/2 明褐色 シルト混粗砂 礫含む

図45 溝C-8平・断面図

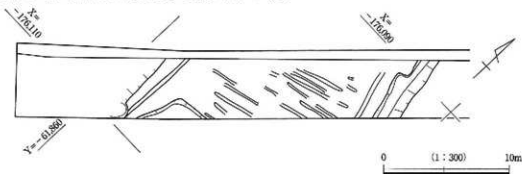


図46 C地区第3面平面図

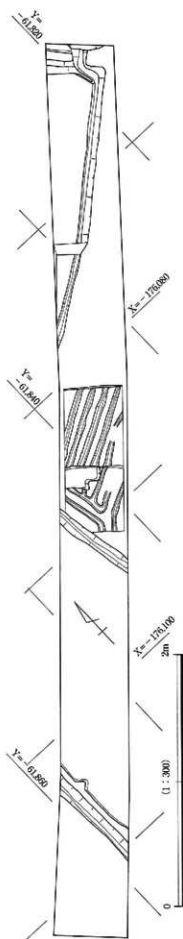


図47 C地区第2面平面図

れていることから、溝C-7の方が若干新しい溝ということが出来る。

溝C-7は、近世まで利用されていたが、線路盛土が施される時点では、ほぼ廃絶しているようで、補強のため敷き詰められていた石なども埋設している状況である。台地との段差は残っているため、区画溝は最終的に側溝のかたちで残る。

#### (4) 第2・3面

第4面を覆う黄橙色細砂混じりシルト層の上面で、耕作にともなう鋤溝を主体とする遺構面が検出され、第3面として認識できた。ただ、この遺構面は、南半部（和歌山側）の舌状台地の南側で検出されたのみであり、北半部（難波側）では上面の第2面と区別できなかった。

舌状台地の先端部から一段下がった部分で、東西約15mの区画がつくられており、その中で一定方向の鋤溝が検出されている。この部分で緩い斜面を成形しており、台地上の耕作地をさらにひろげたものといえる。この区画の西（調査区南半部（和歌山側））であるが、方位による位置関係では西側）は、さらに一段下がっており、ここからは鋤溝などは検出されていない。ここは、耕作地には適さず、流路として使われていたと考えられる。遺物量が少ないため、時期は確定できないが、おおむね近世に耕作地として利用されていたものといえる。

線路盛土除去面を第2面とした。この面は線路建設直前の遺構面であるため、明治30（1897）年頃の実年代が明確なものである。中央部の舌状台地上を中心として耕作地がひろがる。基本的には、現在の地割りと同一である。ほぼ同じ規模の鋤溝が平行してつくられており、幅約1.0m、深さ10cm以下を測る。全面にこのような鋤溝が展開していたものと考えられるが、線路盛土を盛る段階で表面が荒らされたようで、部分的にしか検出することができなかった。

北半部（難波側）では、舌状台地の下端に沿って溝C-7を踏襲した溝がつくられている。溝C-7のような石敷きは施されておらず、簡単な溝を掘削しているのみである。耕作地の区画を明確に示しているが、台地上からは鋤溝などはほとんど検出されていない。また、台地下部分でも遺構は検出されていない。北端部において、溝C-7は溝C-8の手前で屈曲し、ほぼ平行にのびていたが、その隅の部分に幅約1.3m、比高差約20cmの畦畔がつくられている。溝C-7を踏襲する溝は、この畦畔を横切り、溝C-8へつづいていることから、排水路として利用されていたものといえる。

一方、南半部（和歌山側）においても、舌状台地の下端に沿って溝がつくられており、区画を明確にしている。基本的には、第3面とほとんど変わらない。台地と一段下の区画との比高差は約50cmあり、整地によりほぼ平坦な部分を形成している。耕作地として利用されてい

たものと考えられるがここでも残存状況が良好ではないため、第3面ほど鬚溝などは検出されていない。さらに一段下の部分は、比高差は約30cmあり、ここでも整地によりほぼ平坦な部分を形成している。いずれも近世の開発により耕作地をひろげていったものといえることができる。

### 3. 遺物

C地区出土遺物は、遺構からは第5面の可能性のある溝C-9や第4面検出の溝C-7・8、包含層では線路盛土からのものが多い。溝C-9からは弥生時代後期の遺物が、溝C-7・8からは主として近世の遺物が出土している。包含層出土遺物に関しては、A地区やB地区と状況は同じである。時期は一定しておらず、後世の混入品が多い。

#### 溝C-9 (図48、図版48)

南半部(和歌山側)の流路群の中で検出されており、調査区をほぼ南北方向に横切る溝である。下層から弥生土器の細片がまぎらって出土した。かなり摩耗しており、復元は困難であった。その中で図化したものは、図48の127~132である。

127は甕で、体部上部から口縁部である。器壁表面の摩耗や剥離が著しいため、調整ははっきりしないが、体部外面にタタキ調整が認められる。128は、長頸壺口縁部である。器壁表面の摩耗や剥離が著しいため、調整は不明である。129は、甕か鉢の底部である。底部径は、3.7cmを測る。器壁表面の摩耗や剥離が著しいため、調整ははっきりしないが、体部外面にタタキ調整が認められる。内面はナデ調整が施されているものと考えられ、底部には木の葉圧痕が認められる。130は、甕か鉢の底部である。底部径は、4.0cmを測る。器壁表面の摩耗や剥離が著しいため、調整ははっきりしないが、底部で一部ナデ調整がみられる。底部に木の葉圧痕が認められる。131は、壺の底部である。底部径は、3.1cmを測る。調整ははっきりしないが、内面でわずかにハケ調整がみられる。底部に木の葉圧痕が認められる。132は、壺の底部である。調整ははっきりしないが、内面でわずかに工具の痕跡がみられる。底部に木の葉圧痕が認められる。いずれも小破片であり、調整もはっきりしないため、時期は確定しにくいですが、弥生時代後期と考えることができる。

#### 溝C-7・8 (図48、図版47・48)

溝C-7は、北半部(難波側)で舌状台地の下端に沿って掘削された溝で、底部に石が敷き詰められ

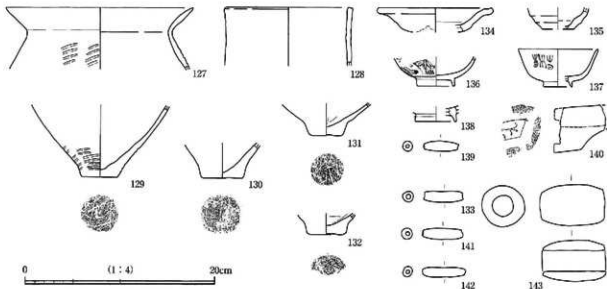


図48 C地区出土遺物1 (溝C-7・8・9)

ていた。掘削時期ははっきりしないが、近世に利用されたものであり、遺物の時期も一致している。

図48の134～142は、溝C-7の遺物である。134は、唐津焼溝縁皿である。釉は灰色で、内面には胎土目あるいは溶着表が残る。135は、備前焼徳利である。底部のみで、体部外面は回転ヘラケズリの後ナデ調整が施されている。136は、波佐見焼染付碗である。下半部のみであるため、体部外面の文様は部分的であるが、草木文が描かれているものと考えられる。高台内に「大川□□」と記されている。137も波佐見焼染付碗である。器高5.0cm、口縁径は復元長で8.3cmを測り、小型品である。138は、波佐見焼染付碗の高台部分である。高台に沿って体部を打ち欠いており、この部分のみを再利用したものである。140は、軒平瓦である。139・141・142は小型の土錘である。

溝C-8は、調査区北端部で検出されているが、B地区とC地区を分かつ水路として現在まで存続している溝である。この溝から143の大型土錘が出土した。ほぼ完形で、全長6.9cm、径4.3cm、孔径2.2cmを測る。表面はナデ調整で仕上げられている。

#### 包含層（図49、図版47・48）

ここでは、包含層出土の蛸壺と土錘、石製品について記述することとする。

図49の144～146は、土師質蛸壺である。出土地点は分散するが、いずれも中世の包含層から出土したものである。釣鐘形の環状工具の紐穴部分のみ残存している。ナデ調整で成形されているが、146は、紐穴が小さく、外面にはヘラ状工具の痕跡がみられる。

147～149は、いずれも中世の包含層から出土したもので、大型の土錘である。147はほぼ完形の管状土錘で、全長6.4cm、径4.1cm、孔径1.9cmを測る。表面はナデ調整で仕上げられている。148はほぼ完形の有溝土錘で、全長8.4cmを測り、表面はナデ調整で仕上げられている。149はほぼ完形の管状土錘で、全長7.7cm、径5.7cm、孔径2.5cmを測る。150～163は、出土地点は分散するが、中世～近世の包含層から出土したもので、小型の管状土錘である。ほぼ大きさは同一である。164は棒の両端に孔をあけた有孔土錘で、孔径は0.6cmを測る。

165は石棒で、下層の礫層から出土したものである。縄文時代の遺物であるが、混入品であり、縄文土器などは検出されていない。166は欠損しているが、緑泥片岩製の石製品である。

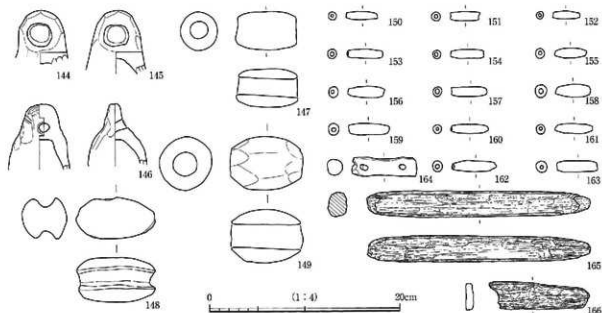


図49 C地区出土遺物 2

## 第4節 小結

ここで、湊遺跡の範囲内である、A地区からC地区の成果について簡単にまとめておく。

まず、再三述べてきたように、この部分は、台地上から谷状地形に下がっており、谷状地形では調査区を横切るかたちで自然流路が多く検出された。特にB地区では、流路の堆積による砂層がみつまっているほか、部分的に礫層などもみられることから、恒常的に比較的強い流れがあったことがわかる。掘削限界までは掘り下げて調査をおこなったが、流路が錯綜しており、複数の重複がみられるものの、平面形でとらえることは困難である。流路内の砂層からは、土器群以外でも遺物がわずかながら検出されており、実態は不明であるが、調査区付近で集落が営まれていたことが推測される。

また、同じくB地区の流路からやや離れた部分の粘土層において、断面観察により、地震によるものと考えられる土層の撓拝が確認されたほか、C地区においては、砂層内で上層のずれがみつかっており、軟弱な地層における地震の痕跡が比較的良好に残っている状況を見ることができた。これらの原因となる地震の規模はあまり大きなものではなく、噴砂などは確認されていない。ただし、これらの痕跡は遺構や遺物を伴っておらず、この地域で人々の生活が営まれる以前の土層での検出にとどまっている。

一方、人々の生活色がうかがわれるのは、A地区とB地区で検出された土器群である。従来湊遺跡で検出されている土器群と類似しており、まとめて廃棄された様相を呈している。A地区では、溝内から弥生時代後期後葉の甕を主体とした土器群がみつかっており、完形品が多い。これらの土器は、この場所で廃棄されたものであり、原位置をほぼ保っているものということができる。残念ながら弥生時代の建物跡などの遺構は調査区内で検出されておらず、土器群のみが単独でみられる状況である。

B地区においても、自然流路内より弥生時代末から古墳時代初頭の甕や壺を主体とした土器群が検出されており、A地区と同様に完形品が多い。ただし、時期的にはやや新しいものである。湊遺跡を代表する製塩土器もB地区の土器群の中からまとめて出土している。製塩土器は、脚台部分がほとんどであるが、中にはほぼ完形のものもみられ、未使用品と考えられる。製塩土器のまとまりの中には、他の土器はほとんどみられないほか、他の土器群からは製塩土器の出土はほとんどないことから、土器群廃棄の際になんらかの規制がかかっていた可能性がある。

B地区の中央部で、ピット群がみつまっていることから、この部分に建物群が存在したことは確かであるが、復原することはできなかった。流路が錯綜する部分からはずれており、比較的安定した立地条件である。遺物の出土量が少ないため、時期ははっきりしないが、土器群と同時期の可能性が高い。集落を構成するほど規模は大きくなく、建物が数棟建てられていたものと考えられる。

C地区は、谷状地形の最深部にあたるが、中央部に小規模な舌状台地ともいえるべき高台部分があり、その先端部が調査区内に及んでいる。谷状地形の中で下流に向かって流れる流路が二股に分岐する部分にあたり、両側が流路によって削られた結果、台地状に残ったものであることが確認された。ただし、このような地形では、居住には適さないことから、遺構や遺物の検出はほとんどなく、耕作に伴う溝や鋤溝などがみつかるのみである。

具体的な集落は検出できなかったが、製塩土器などの土器群がみつまっていることから、今までと同様に実態がつかめていないものの、製塩作業をおこなっていた集団が付近に居住していたことは確かであるろう。

## 第6章 上町東遺跡の調査成果

ここでは、上町東遺跡の範囲内である、D-1地区からF地区の調査成果を述べる。[大阪府文化財分布図]によると、C地区とD-1地区を分かつ水路が、湊遺跡と上町東遺跡の境界線であることから、D-1地区からF地区は上町東遺跡の範囲内となる。

A～C地区よりもさらに狭長な調査区であるため、これらをひとつにまとめることは適切ではないとの判断から、調査区別に記述することとする。隣接する調査区間で統一をはかるべきであるが、ここでは事実報告にとどめる。既往の調査で隣接地の調査成果が明らかになっている部分もあることから、この成果も一部盛り込んで今回の調査成果の一助とした。遺構の記述に関しては、基本的に古いものから新しいものへという順序をとることとしたが、地山面のみが遺構面という地区もあるため、必ずしも時期順にとらえられているとは限らない。遺物が出土し、時期が確定した遺構を中心としている。遺物に関しては、遺構出土のものを中心に選んだが、包含層出土のものもあえて含んでいる場合がある。遺跡の中心は、調査区南隣の台地上の集落部分と考えられる。中心的な集落などは、現在のところみつかっていないが、12～14世紀代の区画溝や掘立柱建物などが検出されており、遺物も多く出土している。

### 第1節 D-1地区

前章で述べたように、調査区のうちA地区からD-1地区は谷地形にあたり、A地区からC地区にかけては緩やかな下り斜面となっている。この谷地形は、C地区で舌状台地の先端が確認されるなど、単純ではないことが判明したが、D地区では一気に台地上までのぼる急な上り斜面となっており、谷地形の斜面の形状が北側と南側で著しく異なる。D地区内で比高差約2.8mの急斜面が調査区を横切っており、その北側と南側でかなり様相が異なることから、北側の谷部分をD-1地区、南側の台地上部分をD-2地区として地区を分けることとした。

D-1地区は、橋脚の下部工事箇所にあたるため、地表面から約5m掘り下げることになり、土留め支保工を全面に施している。橋脚の形状や土留め方法の違いにより、最終掘削面において、南半部（和歌山側）は約50cm高くなっている。遺構面が掘削限界面よりさらに下がる可能性が予測されたため、安全基準内で、中央部分に深さ1mのトレンチを6箇所設置して、土層の確認をおこなった。調査区は、上町東遺跡の範囲内であるが、遺跡の縁辺部にあたる。

#### 1. 層序

D-1地区は、谷地形の最も深いところを横切っていることになり、線路建設の際、大量の土砂が盛られている。結果的に、掘削限界面まで掘り下げても、線路盛土を完全に除去することはできなかった。北半部（難波側）は、掘削限界面においても依然として線路盛土中であった。線路盛土の断面観察により、当時の盛土工法が計画的におこなわれていたことがわかる。線路盛土の詳細に関しては後述する。かろうじて南半部（和歌山側）で、線路建設開始時期である、明治30（1897）年当時の地表面を検出し、その下の中世遺構面までは確認できた。掘削限界面より下の状況は、6箇所設定したトレンチの土層確認でおこなった。

## 2. 遺構

前項で述べたように、線路盛土が予想以上に深い部分まで達していたことから、他の調査区と違い、明確な遺構面は、掘削限界面付近で検出されたもののみである。線路盛土除去面であるため、A～C地区との対応関係でいえば、第2面および第3面ということになる。なお、調査区が全体に屈曲しているため、調査区内の方角を表す表現としてA～C地区で使用していた「北半部」や「南半部」は不適切となることから、D-1地区以降の上町東遺跡部分では、「東半部（難波側）」「西半部（和歌山側）」を使用することとする。

### (1) 最終掘削面

B・C地区と同様に、調査の最終段階では、上留め支保工を施したうえで、掘削限界面まで掘り下げた水平にそろえた。D-1地区とD-2地区を分かつ急斜面部分は、地山まで掘削し、自然地形を検出し

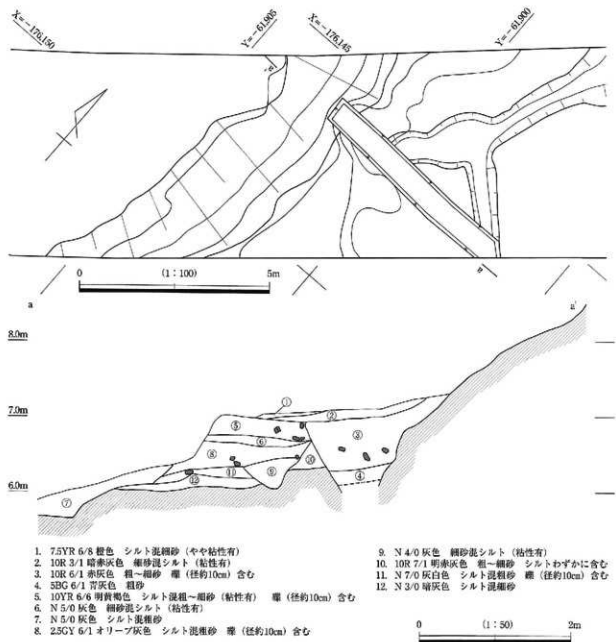


図50 D-1地区段丘崖コンター図・土層断面図



たかたちになっており、土留め支保工を施していない。最終遺構面は、床付け面として水平にそろえたため、本来の地形を表しているわけではない。ただし、ほぼ水平に近いものの、D-2地区に向かってゆるやかな斜面となっていることから、西半部（和歌山側）では、第2面および第3面相当面を検出することができた。

#### 段丘崖部分（図50）

D-1地区とD-2地区を分かつ段丘崖は、比高差が2m以上あり、もとは自然地形である。C地区の西半部（和歌山側）を横断する流路が流れを変えた時期に、この部分が流路の強い流れにより削られたものと考えられる。この斜面部分の土層断面を観察した結果、斜面の上からの盛土によって、人為的に拡張されている様子が確認された。拡張は、台地の先端から約3mの長さでおこなわれている。また、拡張は2度にわたっており、1度目は径10cm程度の礫を含む細砂が主体で、2度目は全体に径10cm程度の礫を含むが、細砂層とシルト層が互層になっている。段丘崖の下端部には、当初から排水溝が掘削されており、拡張後も新たに溝がつけられている。

この拡張部分からは、主に近世の陶磁器や土師器、瓦などが出土している。このことから、この拡張は、近世におこなわれており、線路盛土が施される以前ということが出来る。拡張部分の上面では、特に整地した状況は認められないことから、D-2地区に向かってひろがる台地上の耕作地を拡張したものとは考えにくく、この部分に台地上の整地土を集めたものといえる。

#### 土層確認トレンチ（図51、図版19-2～5）

ここでは、最も下層の状況を示す、掘削最終面からさらに掘り下げた土層確認トレンチの成果をまず述べることにする。トレンチの形状は、縦1m、横1m、深さ1mを基本形として、調査区の中央ラインに沿って、6箇所を設定した。東（難波側）から順に番号をつけており、西端はトレンチ6である。基本的には、山側（南側）の壁断面を観察したが、一部西側（和歌山側）の土層確認をおこなったものもある。全体に遺物量は少ない。最も深い面では、T.P.4.5mに達する。

トレンチ1 東端のトレンチであるが、この部分は湧水が激しいため、予定通り掘削ができず、約30cm掘り下げた部分で調査を終了した。線路盛土除去面の耕作地にともなう旧耕作土が検出できたのみである。遺構は検出されなかった。

トレンチ2 トレンチ1と同様に湧水が激しいため、予定通り掘削ができず、約30cm掘り下げた部分で調査を終了した。トレンチ1で検出した旧耕作土の下層の盛土が検出された。

トレンチ3 最終遺構面が約50cm高い部分に設定され、深さ1mを確保することができた。上部には線路盛土が残存しており、その下には線路盛土除去面の耕作地にともなう旧耕作土がみられる。さらにこの旧耕作土の下には、耕作地整地の際の盛土層が確認された。この盛土層は、拳大の粘土ブロックが多く含まれており、平面でもはっきりわかるほどである。

トレンチ4 トレンチ3とほぼ同じ状況である。上から、線路盛土、旧耕作土、耕作土整地後の盛土の順に堆積している。

トレンチ5 線路盛土はこの部分では既に除去されているため、旧耕作土層と耕作土整地の際の盛土が確認された。ただ、西壁（和歌山側）で、耕作土層上面から下がる溝状の落ちがみられ、拳大の礫が多く含まれており、遺構の可能性が高い。

トレンチ6 水平堆積がみられ、シルト層や細砂層などが互層をなしていて、流水堆積の様相を呈している。旧耕作面下の盛土層より下の土層部分にあたるが、トレンチ5で検出された溝状

落ち込みがこの部分までのびている可能性がある。直接の関連性ははっきりしないが、遺構内の堆積と考えることもできる。

トレンチの断面観察の結果、調査区中央部のトレンチ3・4部分で、最も線路盛土が深いことがわかった。このため、東半部（離波側）では、線路盛土除去面が東方向に向かってややのぼっており、遺構は検出されていないものの、耕作土がひろがっている。

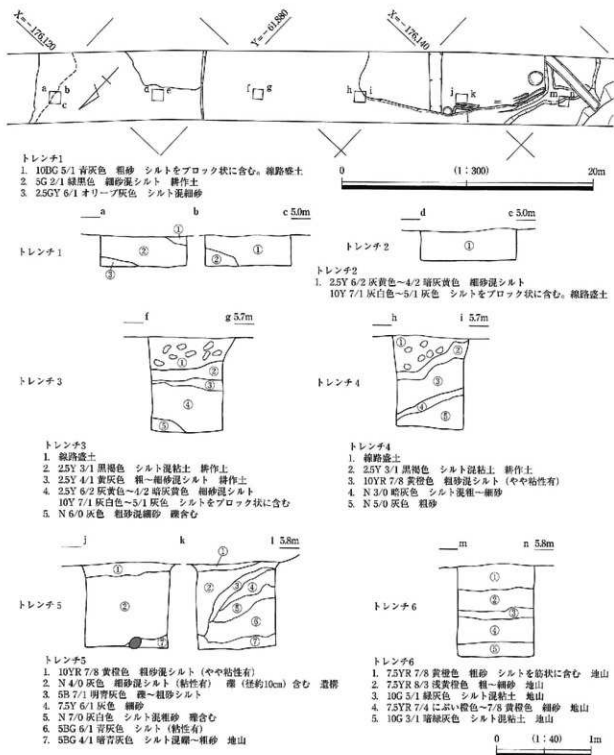


図51 D-1地区最終掘削平面図、土層確認トレンチ断面図

## (2) 第3面相当面

西半部（和歌山側）では、逆に西方向の急斜面に向かってゆるやかにのぼっており、旧耕作土層下の遺構面（第3面相当）が検出された。この部分は、中央部分に比べるとやや高く、掘削限界面付近で、第2面相当の盛土除去面や第3面相当の中世遺構面が確認できた。第3面相当面が検出された範囲は狭く、急斜面に近い部分の一部に限られる。この部分より東側（難波側）では、掘削限界面の下へ下がっていくことから、検出できなかった。この面では、人為的に廃棄された礫の集積が認められたのみで、耕作にともなう溝などの遺構はみられない。

### 礫群（図52・53、図版20-4・5）

第3面相当面が検出された範囲は狭いが、急斜面に近い部分で土坑状の落ち込みが検出され、礫がまとまって出土した。検出された時点では想定していなかったが、周辺を精査した結果、土坑状の落ち込みが確認され、その中におさまることが判明した。礫群が検出された部分は、掘削限界面付近であることから、落ち込みの底部まで掘削することができず、全容ははっきりしない。検出面では、土坑状落ち込みの平面形は不定形で、形状を特定することはできないが、円形を呈している可能性があり、径約8mほどの規模が考えられる。ほとんど掘削できなかったため、深さは不明であるが、20cm以上である。

礫群は、落ち込みのほぼ中央部分で検出され、当初検出状況から4グループに分けられた。掘削段階では、このグループ毎に遺物の取り上げや実測をおこなったが、重複関係や遺物の時期差などは認められない。このため、グループ毎に段階的に廃棄されたものというよりは、全部で一つの礫群と考えるほうが妥当であるといえる。

土層断面の観察から、これらの礫群は1層か2層ほどの堆積状況であり、あまり厚く堆積したものであるということが出来るが、底部まで完掘していないため、断言はできない。礫群は、グループによ

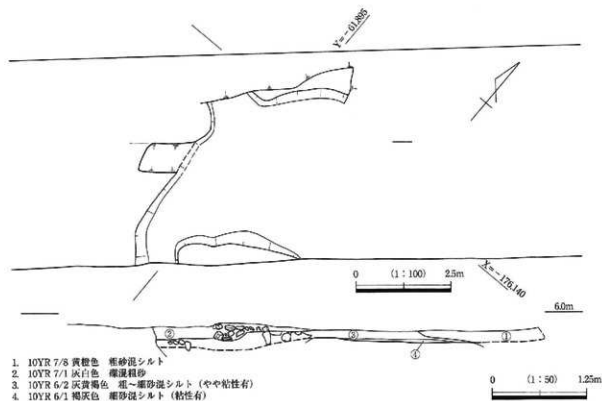


図52 D-1地区礫群完掘状況・断面図

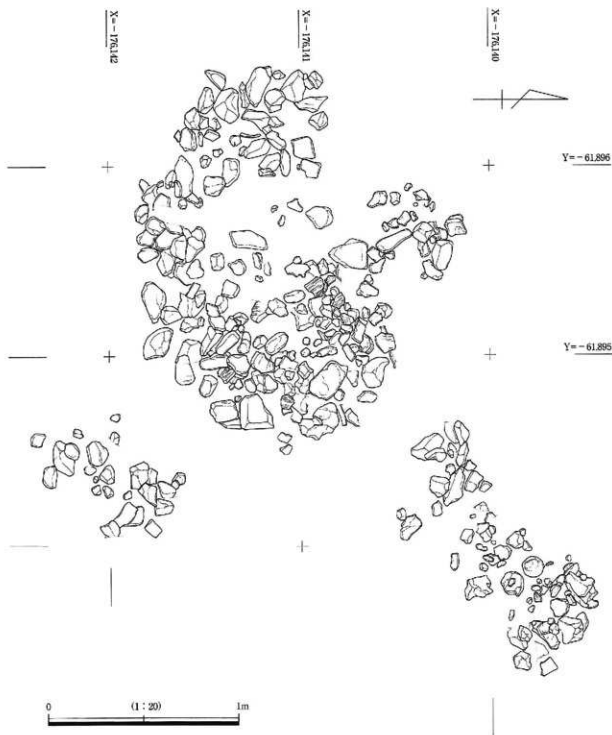


図53 D-1地区礫群遺物出土状況図

る特徴は特になく、すべて状況は同じである。いずれも、径10~20cmの礫（角礫が目立つ）が主体であり、その中に土器などの遺物が混じるという状況である。土坑状落ち込みは、掘削限界面までの観察では、灰黄褐色細砂混じりシルトが下に堆積しており、その上層に礫群がのるかたちである。礫のまわりには灰白色粗砂がみられ、下の層とは異なっている。検出状況から判断すると、土坑の底に礫を敷き詰めたという状況ではなく、単にまとめて廃棄したものと考えられる。遺物は、瓦質土器や漆焼甕、土器器焙烙などであり、中世末から近世初頭のものといえる。

### (3) 第2面

前項で述べたように、D-1地区では、線路盛土が予想以上に深くまでおよんでいることから、掘削限界面においても除去できない部分が存在する。この範囲は、調査区中央部から東半部（難波側）におよんでいるため、第2面相当の盛土除去面は、西半部（和歌山側）と東端部で検出されたのみである。第2面相当の盛土除去面では、耕作地を区画する溝やテラス部分が検出され、鋤溝も若干みることができるといえる。

東端部では、線路盛土を盛る際に入られた大型の土管が検出された。現在のC地区とD-1地区を分かつ水路の前身と考えられ、水量が多いことから、大型の土管をつないだ水路が2列平行してつくられている。一部、土圧でつぶれた部分もあるが、ほぼ完全な状態で残存していた。土管は、1本が径40cm、長さ70cmのもので、連続して直線的な水路となっている。土留め用の鋼矢板打設の際に破壊されたため、全容はわからなかったが、A地区でも同様の土管列が検出されている。土管は規格品と考えられるが、製造所などの刻印はみられない。線路建設の際につくられたものであるが、現在には使用されていない。ある時期に廃絶し、現在使用されている水路に移ったものであるが、その時期は不明である。

東半部（難波側）では、この水路以外に溝状の落ち込みがみられる。L字状を呈しており、幅約3.2m、深さ約60cmを測る。溝状を呈しているが、溝として使用されていたものというよりは、耕作地の区画を表す落ち込みと考えられる。

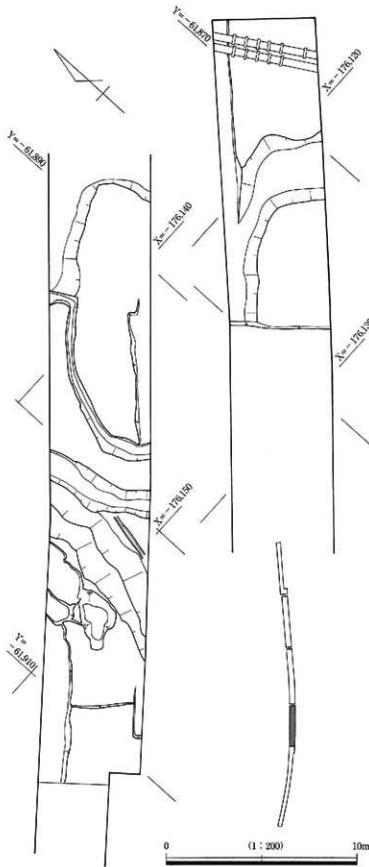


図54 D-1地区第2面平面図

西半部（和歌山側）で検出された耕作地の区画溝は、地形にあわせてつくられており、直線的ではない。段丘崖の下端部分の溝（溝D-61）は、斜面の形状に沿ってつくられたものであるが、調査区内の南側で、区画溝と同じ方向に向かい平行に伸びることから、ちょうど両側に溝をもつ畦畔の形状を呈する。斜面の下端に沿ってつくられた畦畔と考えられる。

溝D-61は、急斜面の下端部につくられた排水溝の最終形である。幅約1.0m、深さ約60cmを測り、断面の形状はV字形を呈している。前項でも述べたように、急斜面部分は拡張がおこなわれており、その度に下端部に排水溝が掘削されている。遺物量は少ないが、瓦質火鉢や土師器鍋、湊焼甕、近世陶磁器などが出土しており、近世初頭の時期であると考えられる。

この部分の耕作地は、土層断面観察によると、線路盛土の前に黄灰色細砂混じりシルトによる盛土が、

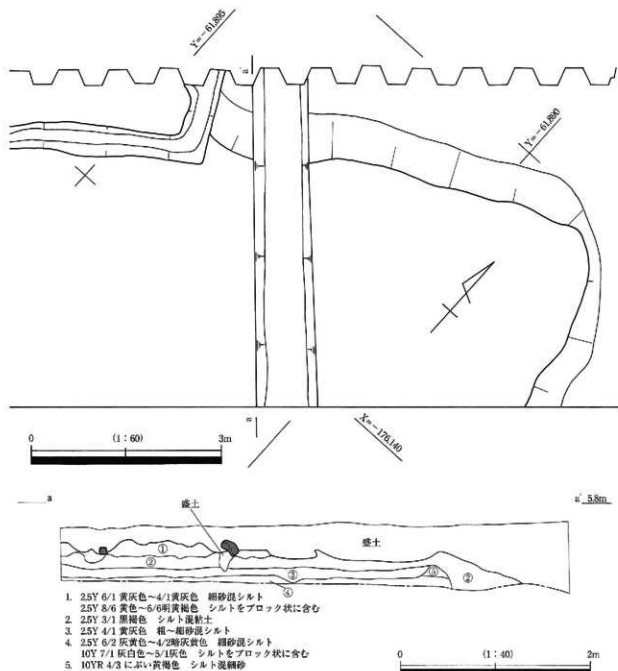


図55 D-1地区調査区横断面図

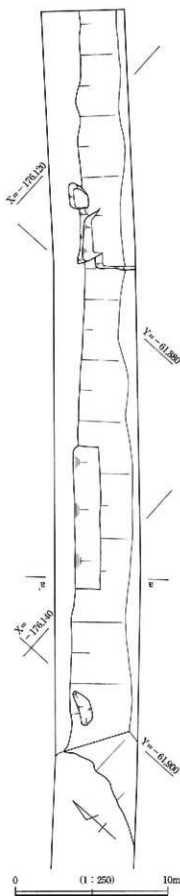


図56 D-1地区線路盛土平面図

約20cmの厚さで施されていることがわかる。黒褐色粘土を主体とする耕作土は、約20cmの厚さで堆積しており、掘削限界面まで続いている。耕作土からの遺物量は非常に少なく、土錘がみられるのみである。

線路盛土が盛られる時期の状況は、ちょうど掘削限界面に近いいため、案外はっきりと検出することができず、不明な部分も多い。ただ、谷地形の低い部分で耕作地を維持するため、排水溝や区画溝の掘削が頻繁におこなわれていることがわかる。

#### (4) 線路盛土（築堤）

線路盛土は調査区全体にひろがっているが、D-1地区で厚く堆積していることから、土層断面の観察が比較的可能で、盛土の工法を知ることができたため、ここで述べることにする。

前にも述べたように、調査区の線路は、明治30（1897）年10月に開通したものであり、その後複線化工事や電化工事などはおこなわれたものの、基本的な路線は変わっていない。特に、A地区からD-1地区にわたる区間は、谷地形を横切っていることから、築堤がつけられており、当時の土木工事の方法がわかる例として貴重なものである。通常、電車が運行している線路部分を大規模に掘削することはほとんどないことから、近代の土木工事の例ではあるが、ここで項を設けることにした。

明治30年当時は、全国で鉄道敷設の機運が高まっていた時期で、本路線に関しても、当初は大阪市内から堺までの路線のみを想定していたが、これが開通後、和歌山までの延伸が企画され、明治30年10月には堺から泉佐野まで、11月には泉佐野から尾崎まで開通している。翌年9月には、和歌山まで開業し、急ピッチで工事が進んでいたことがわかる。現在の南海本線は、関西の私鉄の中で最も古い歴史を持つ路線であり、堺や泉州の繊維工業と密接な関係をもって発展している。

残念ながら、現在のところ、調査区部分の工事に関する記録などはみつかっていないことから、実体はわからないが、土層断面の観察により、盛土の施工方法をある程度知ることができる部分がある。

D-1地区では、盛土の山側部分を縦断するかたちで、約半分を検出している。線路や枕木、砂利を取り除いた時点で、線路盛土が露出した。形状は蒲鉾形を呈しており、下端部はかなり下がることから、安全上段階的に掘り下げることにし、下端部をオープンで掘り下げられる限界面まで下げた後、写真撮影および実測をおこない、この部分の盛土の上部を取り除く。さらに土留め支保工を施した後、さらに下端部まで掘削し、線路盛土全体の形状を明らかにした。この時点で再び写真撮影および実測をおこなった。調査区に隣接した仮線路では、車両が運行しており、安全上の制約が厳しかったが、分割施工により、厚さ約2.7mの線路盛土の土層断面を作成することができた。

線路盛土の下面には、当時の旧耕作土層がそのままみられることから、特別な基礎工事は特におこなっていないことがわかる。線路盛土の断面観察により、2時期の盛土があり、最初に盛られた盛土と追加された盛土が明確に認められる。南海電気鉄道株式会社の記録と対比すると、最初の盛土は明治30年の開業時につくられたもので、追加された盛土は、大正11（1922）年12月に完成した複線化工事によるものと考えられ、約25年の差があることがわかっている。

断面観察では、最初につくられた線路盛土の芯となる部分は、径10cm程度の礫を多く含む礫層で構成されており、基礎部分として補強材を入れてつくられている。あまり構造的にしっかりしたものとはいえないが、下端部分に大きい礫を意識的に配しており、内部にはやや小型の小礫を中心に盛り上げている。この礫層は、段階的に固めながら積み上げており、筋状の堆積状況が観察できる。礫と細砂が混合され、人為的に突き固めたものであるが、まだ現在のように重機のない時代であるため、おそらく「もっこ」などを用いて、運ばれたものを大型の道具で固めていったものと考えられる。かなり堅く突き固められており、現在の道具を用いた人力掘削においても、掘削に苦勞するほどであった。この線路盛土の基礎部分となる礫層の段階で、すでに線路盛土の完成形の斜度である25~30°を確保している。

基礎部分の礫層の上に、粘性の強いシルトや粘土をのせているが、これも基礎部分と同様に強く突き固めている。下端部分は比較的均質なシルト層であるが、上部は礫やシルトが混在する土砂を集めて突き固めており、「もっこ」単位と考えられるブロック状のかたまりが明確に認められる。ブロックの大きさは、圧縮されているものもあるため均一ではないが、径約20cmを測るものが多いようである。このブロック状のかたまりは、線路盛土の上部をほとんど覆っている。ブロック状のかたまりは、D-1地区で顕著に検出されており、掘削限界面付近でもみられる。ただ、他の地区ではあまりみられず、特徴的な盛土であるため、近隣のある程度限定された地域で採取されたものと考えられるが、特定はできていない。また、下端部分付近で平行する杭列が検出された。線路盛土の崩落を防ぐために打ち込まれたものと考えられ、下端よりやや内側に位置している。約1m間隔で並んでいるが、重複して打たれているものはなく、杭の下部は残存していた。

線路盛土は、礫を主体とする基礎部分に粘性の強いシルトを上から固めて成形した構造をもっていることがわかった。最初の段階の盛土表面には、薄く表土が堆積しており、植物などが生息していたことがわかるが、再度この上に礫を主体とする土砂がのせられ、拡張がおこなわれている。この拡張は、大正11年の複線化工事にともなうものと考えられるが、工法には顕著な違いは認められない。拡張は上端で約1mの規模であり、最初の盛土の斜面に沿って盛土がおこなわれている。盛土は2層に分けることができ、先に礫を含む細砂やシルトを突き固めて基礎部分をつくっている。この部分もかなり堅く、人力掘削には苦勞するほどであった。この上は、比較的粘性の強いシルトを主体とした層で固められており、表面を仕上げている。この部分では、最初の線路盛土の上層でみられたブロック状のかたまりは、それほど顕著ではなく、土砂の採取場所が異なっているものと思われる。

線路盛土からの遺物は少なく、土鍾や陶磁器などの破片がわずかに出土するのみである。線路盛土に使用されている土砂は、特に厳選されている様子はみられないが、礫や粗砂類などと粘土などの粘性の強いものを明確に分けて盛っている状況が認められる。工事が急ピッチでおこなわれる中、このような盛土工法により、現在まで100年以上崩れていない技術は、工事水準の高さを物語っているといえよう。

これらの線路盛土をさらに埋めている礫層が検出されているが、これは現代の盛土と考えられ、線路の枕木で使用されていた大釘や架線で使用されていた磁器製のガイシなどが出土している。



### 3. 遺物

出土遺物は、遺構からは第3面相当面で検出された礫群、包含層では線路盛土のほか、急斜面の拡張部分や掘削限界面付近の旧耕作土からのものが多い。礫群からは、中世後期から近世初頭の遺物が出土している。包含層の遺物は、近世のものが主体であるが、中世の混入品も多くみられる。

礫群 (図57・58、図版49・50)

第3面相当面で検出された土坑状の落ち込みの内部で、礫がまとまって出土したものである。礫に規則性は認められず、特に意識的に礫を敷いたような状況ではない。礫の間から瓦質土器や土師器などが出土している。

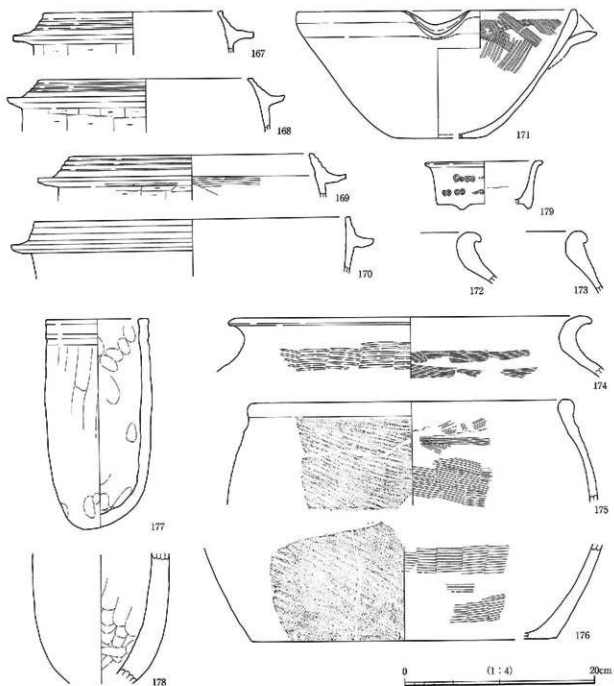


図57 D-1地区出土遺物1 (礫群)

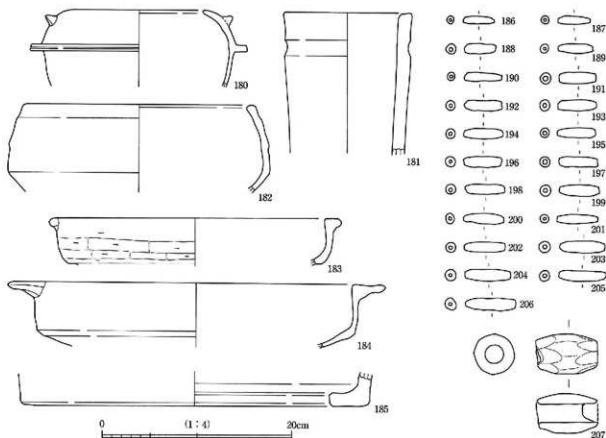


図58 D-1地区出土遺物2

図57の167～170は、瓦質土器羽釜の口縁部である。いずれも口縁部が内傾するタイプで、口縁部に段をもち、体部外面に横方向のヘラケズリ調整を施している。内面はナデ調整が施されているが、167と169にはハケ調整がみられる。大きさは揃っていないが、ほぼ同じ形を呈しているものと思われる。170の体部外面は黒く変色しており、煤が付着している。

171は、瓦質土器播鉢である。片口が明瞭に残っており、注ぎ口がかなり開いている。体部は浅鉢状に大きく開いており、口縁端部の下部はやや鈍角になっている。体部外面は全体に摩耗していることから、調整ははっきりしないが、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。やや調整が粗く、粘土紐の痕跡がみられる部分もある。内面は、下半が摩滅していることから調整は不明であるが、上半は斜め方向の細かいハケ調整の後、卸し目がつけられている。

172・173は、瓦質土器甕の口縁部である。頸部がほとんどなく、口縁部断面に丸みをもつものである。いずれも体部外面に横方向のタタキ調整が施されている。口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられているが、172は体部内面にハケ調整がみられる。

174は、瓦質土器甕の口縁部である。頸部は短く屈曲し、口縁部を外方に湾曲させている。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられているが、体部内面に細かい横方向のハケ調整がみられる。

175は、澆焼甕の口縁部である。頸部はほとんどなく、口縁部は小さい玉縁状をなしている。調整はやや粗く、内面には口縁部と体部の粘土継ぎ痕が認められる。体部外面には、やや斜め方向のタタキ調整が施されている。体部内面に細かい横方向のハケ調整がみられる。

176は、澆焼甕の底部である。平底で、体部下半は直線的に外へ開く。体部外面には、やや斜め方向

のタキ調整が施されている。わずかに底部近くでヘラケズリ調整が認められる。底部外面はナデ調整で仕上げられている。体部内面に横方向のハケ調整がみられる。175とはほぼ同じ器形であるが、やや大きさが異なるため、同一個体の可能性は低いものと考えられる。

177・178は、土師器蛸壺である。177は、丸底で器厚約1cmの真蛸壺である。口縁部は横方向のナデ調整で仕上げられており、縄をかけるへこみをつくっている。体部外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施されているものと考えられるが、表面調整がはっきりしない部分もあるため、指ナデで仕上げられている可能性もある。底部外面は指おさえの後、ナデ調整が施されている。体部内面は指押さえで仕上げられており、指頭圧痕がみられる。178は、体部下半のみの破片であるが、丸底で器厚2.0~2.5cmの真蛸壺である。表面調整がはっきりしない部分もあるが、内外面とも、指おさえの後、ナデ調整が施されている。

179は、瓦質土器の香炉である。平らな底部からやや外方に開く体部をもち、口縁部はさらに外方に屈曲している。体部外面にスタンプ文が施されており、底部の3ヶ所に短い脚をもつタイプである。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げられている。

図58の182は、土師器鍋である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至っている。体部外面には、タキ調整がみられる。口縁部から体部内面にかけては、ナデ調整で仕上げられている。

やや時期差は認められるものの、ほぼ16世紀後半までにはおさまるものと考えられ、第3面相当の礫群が形成された時期を特定することができる。

#### 包含層（図58、図版49・50）

ここでは、旧耕作土や急斜面の拡張部分、線路盛土などからの出土遺物をまとめて述べることにする。前にも述べたように、時期差は認められるが、基本的には近世以降のものである。

図58の180・181は、旧耕作土から出土したものである。180は、瓦質土器の香炉である。口縁部が丸みをおびて内湾しており、さらに双耳がつけられている。体部下半を欠損するが、鋳部を境に体部も丸みをもっている。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げられている。体部外面に煤が付着しており、使用方法に不明な点もある。181は、土師器蛸壺である。内外面ともナデ調整で仕上げられており、口縁部付近には縄をかけるへこみをつくっている。器厚は、約1.3cmを測る。

183・184は、線路盛土から出土したもので、土師器焙烙である。183は、双耳の把手がついているが、孔は未貫通である。体部外面は、横方向のヘラケズリ調整が施されており、口縁部から内面にかけては、ナデ調整で仕上げられている。外面には煤が付着している。184は、双耳の把手がつくタイプで、孔は貫通している。体部外面のヘラケズリ調整はわずかにみられる程度で、ほかには内外面ともナデ調整で仕上げられている。

185は、盛土から出土したもので、破片のためはっきりしないが、土師質五徳の底部と考えられる。

186~206は、線路盛土やほかの盛土、旧耕作土などから出土した土錘である。いずれも小型のもので、長さ3.4~5.4cm、径0.8~1.3cm、孔径0.3~0.4cmを測る。出土地点は分散しており、時期も特定できないが、全体にやや長さには差はあるものの、孔径はほぼ一定であることから、同じ太さの棒状具に粘土を巻いて製作していることがわかる。207は、線路盛土から出土したもので、大型の土錘である。ほぼ完形で、残存長6.5cm、径4.2cm、孔径2.0cmを測る。表面はナデ調整が施されている。

いずれも線路盛土などから出土していることから、原位置を保っていないが、比較的漁具が日立つことから、近世においてこの地域周辺で漁業を営んでいたことを表しているものといえる。

## 第2節 D-2地区

D-2地区は、A地区からD-1地区までひろがっていた谷地形から一転して段丘崖を経て、台地上に位置している。線路建設の際に表土が削平されている部分が多く、これまでの様相とは異なっている。上町東遺跡は中世が主体の遺跡であり、既往の調査でも湊遺跡のような古代以前の遺構や遺物はほとんどみつかっていない。また、この地区からF地区にかけては、泉佐野市教育委員会や（財）大阪府埋蔵文化財協会により、隣接する仮線路部分の調査が既におこなわれており、その調査成果が今回の調査の一助となった。

### 1. 層序

D-2地区は、いままでの谷地形とは異なり、台地上に位置することから、線路盛土の堆積は比較的薄い。その盛土方法も谷地形部分とは異なり、旧耕作土の上にそのまま盛っているわけではなく、ある程度整地をおこなっていることから、表土が削平されている部分もみられる。調査区内では、包含層はほとんど残存しておらず、旧耕作土除去面が地山面という部分が多い。線路建設の際の整地よりも、それ以前の近世に耕作地を整地した段階で、すでに包含層まで削平している状況がみられる。このため、全体に攪乱が多く、遺物量は比較的少ない。遺構の検出状況も、地山面まで削平が及んでいることから良好ではない。したがって、ここでは遺構面を複数確認することはできず、地山面のみで遺構を確認するかたちとなった。

### 2. 遺構

他の調査区とは違い、遺構は地山面で確認できたもののみである。明確な時期を示す遺構面ではないため、他の調査区との対応関係ははっきりしない部分も多い。近世以降の攪乱や整地により失われている部分もあるが、基本的には中世の遺構や遺物が主体で、それ以前の遺構や遺物はほとんど検出されていない。D-2地区は、今回の調査区の中で最も高い位置にあるため、線路敷設にあたって整地がおこなわれたものと考えられ、ほぼ全面にわたって攪乱や削平をうけており、地山面でも遺構の検出は容易ではなかった。

東半部（難波側）は線路建設の際の削平が著しく、特に北側の調査区端部に沿った部分は幅約1mにわたって溝状に掘削されており、遺構の検出はできなかった。また、南側も同様に約1m幅で削られていることから遺構の検出はできず、結局中央の幅約1.5mのみで遺構検出をおこなった。さらに、架線の電柱や付属施設建設にともなう攪乱などが相次いで検出され、東半部（難波側）で遺構面が残存している部分は非常に狭い範囲であった。

中央部から西半部（和歌山側）は、さらに広く深い攪乱がみつかっており、遺構検出は困難をきわめた。この部分では、地山面まで及ぶ削平も著しく、遺構の残存状況は悪い。

以上のようにきわめて条件が悪い中、ピット群や土坑が検出されたほか、遺物もまとめて出土していることから、ある程度時期を特定することができた。

ピット列（図60～63、図版26・27-1・2）

中央部でピット群を検出した。きわめて狭い範囲での検出であるため、建物や構列などの復元は困難であった。隣接した仮線路部分の調査が、平成5年度に（財）大阪府埋蔵文化財協会によっておこなわれており、ここでピット群が検出され、掘立柱建物が復原されている。この成果から掘立柱建物や構列

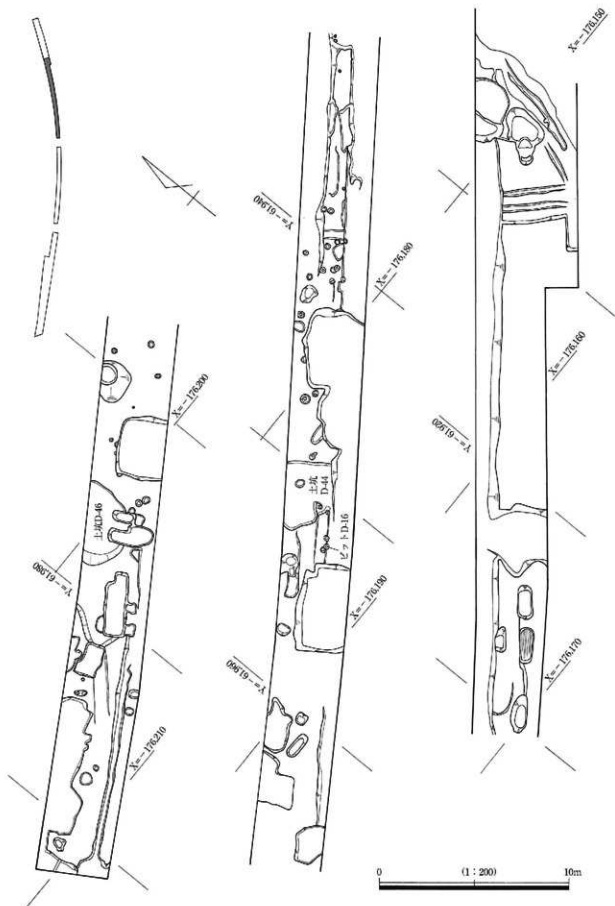


図59 D-2地区最終遺構面平面図

の方向を割り出し、それをもとにD-2地区のビット列の復元をおこなった。

ビット列1は、西半部（和歌山側）で検出された。ビットD-13・47・48で構成されており、掘立柱建物と考えられるが、周囲からはビットは検出されていない。ビットD-13を中心にして、ビットD-47とビットD-48がほぼ直交している。ビット間の距離は同一ではなく、ビットD-13とビットD-48が20m、ビットD-13とビットD-47が1.8mを測る。遺物はほとんどみられないが、ビットD-13から土師器小片が出土している。今回の調査区内でははっきりしないが、隣接した協会調査区では、約3m南に位置する掘立柱建物が検出されている。協会調査区の601-OBと611-OFは、方位がN-39°-Eであり、ビット列1もほぼ同じ方向であるため、関連性は強いものと考えられる。

ビット列2～4は、中央部から東半部（難波側）で検出された。ビット列2は、ビットD-16・21・22・23で構成されており、一方向のみ検出されていることから、構列の可能性が高い。ただ、検出された部分の幅が狭く、未検出のビットの存在も十分考えられることから、掘立柱建物の可能性もある。ビット間の距離は一定ではなく、2.2～3.1mを測る。遺物はほとんどみられず、ビットD-16・23から出土したのみである。ビットD-16では、底面から土師器が出土したが、残存状況が悪いため、復元できなかった。ビットD-23の遺物は、土師器や瓦器の小片である。また、隣接した協会調査区では、約12m南に位置する掘立柱建物や構列が検出されている。協会調査区の602-OBと614-OF、615-OFは、方位がN-45°-Eであり、ビット列2もほぼ同じ方向であるため、関連性は強いものと考えられる。

ビット列3は、ビットD-30・35・41で構成されており、ビット間の距離は1.9～2.1mを測る。遺物は出土していない。ビット列4は、ビットD-29・36・40で構成されており、ビット間の距

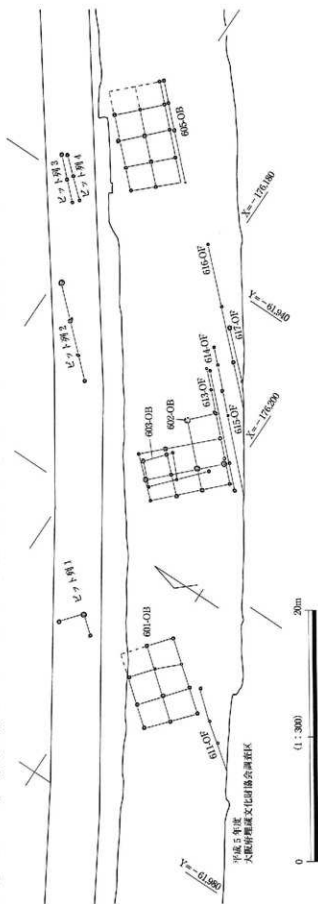


図60 D-2地区・協会調査区掘立柱建物模式図



離は1.8~2.0mを測る。ピットD-29からは土師器鍋・蛸壺、ピットD-40からは瓦器の小片が出土しており、中世後期と考えられる。この周辺ではピットが集中して検出されており、これらのピット列も掘立柱建物を構成する部分と考えることができる。ピット列3とピット列4は平行しており、前出の協会調査区の602-OBと614-OF、615-OFとはほぼ同じ方向である。また、約4m南には協会調査区で605-OBが検出されており、同じ方向である。

D-2調査区と協会調査区をあわせても幅約15mしかなく、この成果のみで集落構成を復原することは困難であるが、掘立柱建物やピット列の復原により、方向に大きく2パターンあることがわかった。この差は、時期差によるものかどうかははっきりしないが、西側(和歌山側)と東側(難波側)で分けることができる。すなわち、西側では方位がN-39°-E、東側ではN-45°-Eにほぼ合っており、意識的に方向をあわせてつくられているといえることから、それぞれに関連性を考えることができる。

全体の規模は不明であるが、この部分に集落が営まれていたことが確認され、D-1地区との境界である急斜面から約35m離れて、谷地形を望む位置に立地していたことがわかる。時期の確定はできないが、中世前期に営まれていたものと考えられる。

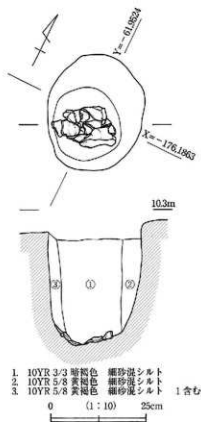


図62 ピットD-16遺物出土状況・断面図

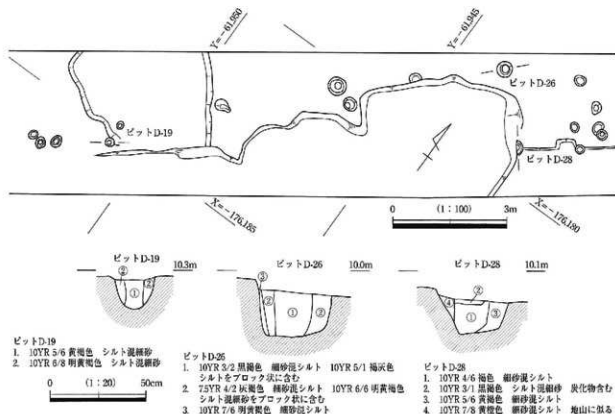


図63 D-2地区ピット平・断面図



### その他のピット

ピット列2～4の周辺には大きな攪乱があり、全容はなかなかはっきりしないが、ピットが集中して検出されている。いずれも掘立柱建物などの柱穴と考えられるが、復原はできなかった。

ピットD-19は、柱痕が残っているが、攪乱や土坑と隣接しており、ピット列は復原できなかった。遺物は瓦器碗小片が出土しているのみである。ピットD-26は、調査区北端部に位置しており、攪乱と隣接していることから、ピット列の復原はできなかった。土師器羽釜や小皿、瓦器碗などが出土しているが、いずれも小破片である。ピットD-28は、西半部を攪乱で壊されているが、土師器や瓦器碗小片が出土している。

ピット列を含め、D-2地区で検出されたピット群は、復原が難しく、遺物量も少ないことから、全容をとらえることは困難であるが、中世前期に営まれていた集落と考えることができよう。なお、協会調査時の遺物は、12世紀末～13世紀（13世紀中頃～後半を主体とする）が主体で、15世紀末の遺物も混じるということである。

### 土坑D-44（図64、図版27-3・4）

調査区のほぼ中央部で検出され、ピット列2と重複している。北側は調査区外にひろがっているほか、南側は攪乱で壊されており、さらに上部は削平されているため、全体形状をはじめ全容ははっきりしない。残存長で東西約3.5m、深さ約20cmを測る。埋土は、現状で2層に分かれており、上層は灰褐色シルト混じり細砂、下層は黒褐色細砂混じりシルトで地山がブロック状に含まれる。中央部で径20～30cm

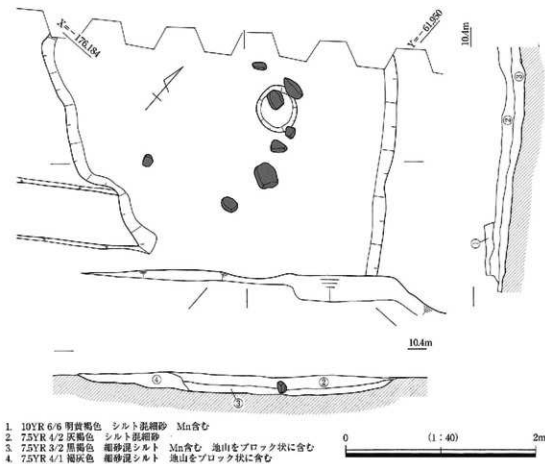


図64 土坑D-44平・断面図

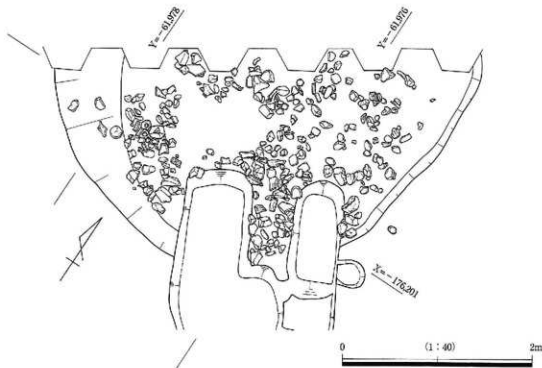


図65 土坑D-46礫検出状況図

の礫が検出されており、廃絶時に廃棄されたものといえる。付近の地山にはこのような礫は含まれていないことから、近接して礫を用いた構築物が存在していたことがうかがわれる。また、この土坑がなんらかの工房跡で、作業用に使われた礫の可能性も考えられる。南側の協会調査区では、土坑D-44から東に約5m離れた位置で蛸壺焼成土坑(426-OX)がみつかり、示唆的である。ただ、埋土からは工房跡を示すような状況は確認できていない。

遺物は、主に上層から出土しており、量は少ないものの土師器小皿や瓦器碗などがみられる。中世前期のもので、前出のピット列と同時期に存在したものといえる。

#### 土坑D-46(図65、図版27-5)

西半部(和歌山側)のピット列1の西で検出された。調査区の北側に位置しており、北側の約半分が調査区外にひろがるため全容は不明だが、ほぼ円形を呈していると考えられる。南側の一部が攪乱で壊されているほか、上面のほとんどを削平されているため、当初は確認できず、底面に散乱する礫の検出によって土坑の全形が判明したほどである。掘削当初の旧耕作土層除去面で、底面の礫群が露出しており、すでに土坑の上面は削平されていた状況であった。規模は、径約4.5mと考えられるが、検出時で深さは10cm程度しか残っていなかった。

底部全面に、拳程度の礫がかなり多く散乱した状態で検出されているが、意図的に敷かれたものかどうかは判断できない。土坑D-44と比較すると、礫の大きさは小さく量は多い。前にも述べたように、付近の地山には礫は含まれていないことから、近接して礫を用いた構築物が存在していたことも考えられる。ただ、上面が削平されていることから、さらに多くの礫が集積されており、敷き詰められていた可能性は高いといえよう。なお、調査区南側の協会調査区では、このような礫の集積した土坑などは検出されていない。ただ、協会調査区では、土坑D-46から南に約10m離れた位置で蛸壺焼成土坑(276-OX)がみつかり、なんらかの関連性を考えることができる。

礫に混じって、多くの遺物が出土した。破片がほとんどで、形を復元できるものはないが、瓦質土器羽釜・甕・播鉢、土師器羽釜などがみられる。中世後期の遺物が主体であり、ピット列や土坑D-44と比較すると、やや新しい時期に属するものと考えられる。

なお、協会調査区では、このほかに埋土に焼土が含まれている土坑や火をうけて赤変した粘土塊などもみつかっているが、今回調査区ではそのような遺構や遺物はみられない。

### 3. 遺物

D-2地区出土遺物は全体に少ないが、なかでも土坑やピットからの出土が多い。包含層はほとんどが削平されていることから、遺物は少なく、わずかに旧耕作土や線路盛土内からの出土品がみられる程度である。遺構出土品はほぼ中世におさまるが、包含層からの遺物は混入品もみられるものの、近世以降のものがほとんどを占める。

#### 土坑D-44（図66・67、図版51・52・55）

北半部が調査区外にひろがり、南半部も攪乱で壊されているため、全容ははっきりしない。遺物は、主に2層に分かれた上層から出土しており、量は少ないものの土師器小皿・蛸壺や瓦器椀・小皿などがみられる。

図66の208・209は、土師器小皿である。208は、灰白色で口縁部周辺を横ナデ調整、底部内外面とも一方向のナデ調整が施されている。内面には煤が付着しており、黒くなっている。灯明皿として使用されたものと考えられる。209は、ほぼ完形で浅黄褐色である。全面にナデ調整が施されている。210は、土師器椀である。外面や断面は灰白色であるが、表面が摩滅しているため、調整は不明である。形状から瓦器椀の可能性も考えられる。211は、瓦器椀である。口縁部外面は、強い横ナデにより凹線状を呈している。外面は横ナデの後、指頭圧痕が顕著に残っている。内面には横方向のヘラミガキが数条施されており、見込みの暗文は斜格子状である。

図67の235の土師器土錘も出土している。半分は欠損するが、棒の両端に孔をあけた有孔土錘で、孔径は0.5cmを測る。表面はナデ調整で成形されている。

明確な時期を示す資料は乏しいが、瓦器椀などから12世紀後半頃のものと考えられる。

#### 土坑D-46（図66・67、図版51・52）

北半部が調査区外にひろがり、上面は削平されていることから、全容ははっきりしない。底面で多くの礫がまとも検出されており、これらの間から、瓦質土器羽釜・甕・播鉢、土師器羽釜などが比較的多く出土しているが、破片がほとんどで、形を復元できるものはない。

図66の212は、灰白色の土師器小皿である。口縁部周辺はナデ調整が施されており、底部は指オサエによる調整痕が残る。内面には灯明芯の痕跡が残っており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

213・214は、瓦質土器羽釜である。いずれも口縁部が内傾するタイプで、口縁部に段をもち、体部外面に横方向のヘラケズリ調整を施している。内面調整ははっきりしない部分もあるが、横方向のハケ調整がみられる。形状はやや異なるが、口径がほぼ同じであるため、同じ大きさと考えられる。

215は、紀伊型の土師器羽釜口縁部である。小破片であり、摩耗のため表面調整ははっきりしないため、詳細は不明である。紀伊地方から搬入されたものと考えられる。

216・217は、瓦質土器播鉢の口縁部である。216は体部が浅鉢状に大きく開くタイプで、口縁部部の下部はやや鈍角になっている。体部外面は、ナデ調整の後、指オサエによる調整痕が残る。内面はナデ調整が施されており、一部卸し目が認められる。217は片口が明瞭に残っており、注ぎ口の下には丁寧

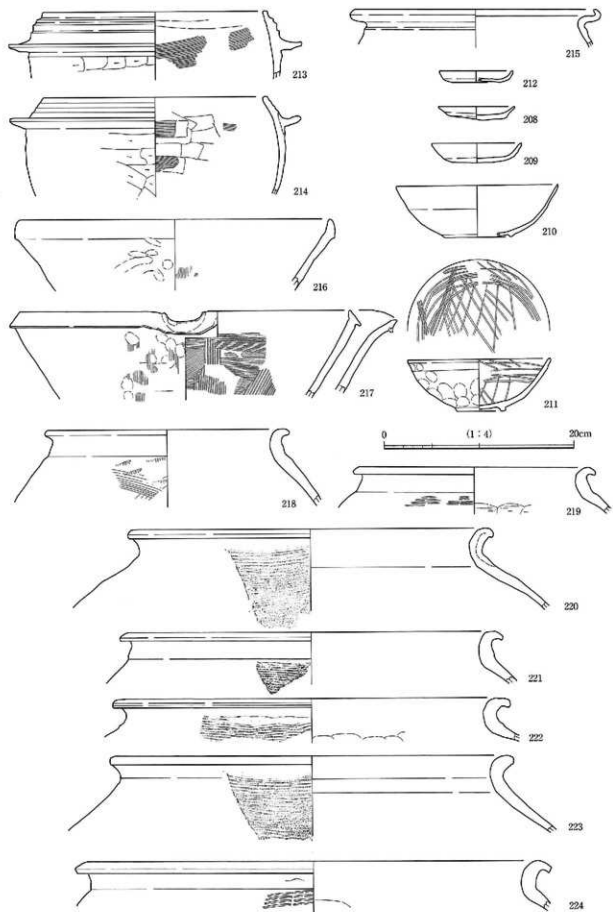


图66 D-2地区出土遗物1(土坑D-44·46)

な指オサエによる調整痕が認められる。ナデ調整により、口縁部の外側を断面三角形に突出させている。体部外面は、指オサエの後縦方向のハケ調整が施されている。やや調整が粗く、粘土紐の痕跡がみられる部分もある。内面は横方向のハケ調整が施されており、一部卸し目が認められる。

218～220は、瓦質土器甕の口縁部である。218は、口縁部の外反は短く、横方向のナデ調整により頸部を成形している。体部外面はタタキ調整の後、ハケ調整が施されており、タタキが消されている。内面は表面剥離のため、調整のはっきりしない。219は、218と同様に口縁部の外反は短く、横方向のナデ調整により頸部を成形している。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。内面はハケ調整の後ナデ調整で仕上げられているが、一部当て具痕がみられる。220は、頸部が短く屈曲し、口縁部を外方に湾曲させている。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されているが、一部粘土継ぎ痕が認められる。口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。

221は、瓦質土器羽釜の口縁部である。小破片のため詳細は不明であるが、口縁部の外反は短く、横方向のナデ調整により頸部を成形している。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられているが、一部当て具痕がみられる。

222は、土師器甕の口縁部である。頸部が短く屈曲し、口縁部を外方に湾曲させている。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されているが、一部粘土継ぎ痕が認められる。口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられているが、一部当て具痕がみられる。

223・224は、いずれも小破片のため詳細は不明であるが、瓦質土器甕の口縁部である。223は、頸部が短く屈曲し、口縁部を外方に湾曲させているが、比較的短い。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられている。224は、横方向のナデ調整により頸部を成形しており、口縁部を外方に湾曲させている。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。口縁部から内面にかけてはナデ調整で仕上げられているが、一部当て具痕がみられる。

図67の225は、土師器蛸壺である。体部の器厚約1cmの真蛸壺で、口縁部は厚く仕上げられている。表面調整は、内外面ともにナデ調整の後指オサエが施されており、この調整の中で口縁部に縄をかける

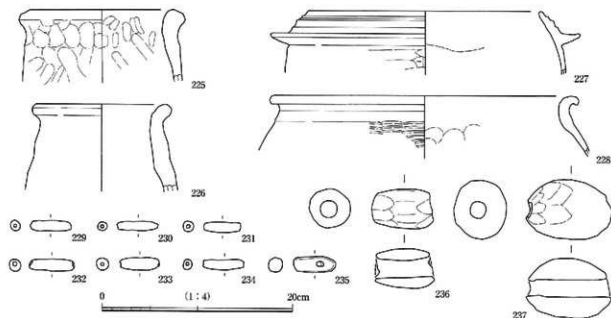


図67 D-2地区出土遺物2

へこみをつくっている。

土坑D-46出土遺物は、各種におよんでいるが、いずれも小破片であり完形品や形状を復元できるものがなかった。このため確定することはむずかしいが、時期差も認められるものの、瓦質土器などからおおむね14世紀末から15世紀中頃におさまるものと考えられる。

#### ビットD-29 (図67、図版52)

ビット列4を構成するビットのうち、ビットD-29から、図67の226の土師器蛸壺が出土している。上半部のみであるが、表面はナデ調整で成形されており、口縁部の縄をかけるへこみもつくられている。真蛸壺で、口縁部は厚く仕上げられている。口径は復元長で13.1cm、器厚は約1.7cmを測る。時期ははっきりしないが、中世後期頃のものといえる。なお、土師器鍋が同時に出土している。

#### 包含層 (図67、図版51・52)

前にのべたように、調査区全体が削平をうけていることから、包含層はほとんど残存しておらず、遺物量も少ない。表面は旧耕作土や線路盛土、その後の整地などにより、元位置を保っている遺物は少ないものと考えられる。

土坑D-46に近い部分の包含層から図67の227・228が出土している。土坑D-46と同時期の遺物であるため、整地の際に周辺に分散した可能性がある。

227は、瓦質土器羽釜の口縁部である。口縁部が内傾するタイプで、口縁部に段をもち、体部外面に横方向のヘラケズリ調整を施している。摩耗のため、内面調整ははっきりしないが、横方向のハケ調整の後、ナデ調整で仕上げられているものと考えられる。鈿部の下面は横方向のヘラケズリ調整で上げられているが、体部とは逆方向である。228は、瓦質土器甕の口縁部である。口縁部の外反は短く、横方向のナデ調整により頸部を成形している。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。口縁部から内面にかけてはナデ調整で上げられているが、一部当て具痕がみられる。

229～234は、旧耕作土から出土した土師器土錘である。いずれも小型のもので、長さ3.9～4.7cm、径1.0～1.3cm、孔径0.3～0.4cmを測る。出土地点は分散しており、特に集積はみられない。長さに差はあるものの、孔径はほぼ一定で、製作方法に共通性がみられる。

236・237は、大型の土錘である。236は、旧耕作土から出土しており、ほぼ完形である。残存長6.6cm、径4.1cm、孔径1.8cmを測る。表面はナデ調整で上げられている。237は、線路盛土から出土したものであり、完形である。残存長9.1cm、径6.2cm、孔径1.8cmを測る。表面はナデ調整で上げられている。

土錘の時期ははっきりしないが、近世の上層から出土しており、普遍的にみられることから、漁業を営む集落が存在したことを示している。

## 第3節 E地区

E地区は、D-2地区からひろがる台地上に位置している。比較的高い位置にあるため、D-2地区と同様に、線路建設の際やそれ以前の耕作地の整地などによって表土が削平されている部分が多く、遺構の保存状態は良好ではない。ここでも、線路の架線にとまなう電柱や信号設置のための攪乱が目立っている。ただ、西半部（和歌山側）では、ピット群や耕作にとまなう溝が多く検出され、比較的密集した状態である。

### 1. 層序

前述したように、D-2地区と同様に線路盛土の堆積は薄く、表土まで削平されている部分もみられる。特に東半部（難波側）は、線路建設にとまなう整地が、深く地山面を越えた部分までおよんでいることから、遺構や遺物はほとんど検出されていない。これに対し、西半部（和歌山側）では、旧耕作地の整地のためか、地山面が一段下がっており、これにとまなう旧耕作土層や包含層が良好に残存していた。したがって、西半部（和歌山側）では、部分的に旧耕作土除去面である第3面を確認することができた。第3面の下に堆積する褐灰色シルト層は、さらに古い時期の耕作土層と考えられ、この層を除去した最終遺構面である地山面においても、ピット群や耕作にとまなう溝が多く検出された。

### 2. 遺構

西半部（和歌山側）では、遺構面が2面確認できたものの、東半部（難波側）は、盛土除去面がそのまま地山面であり、様相は異なる。東半部（難波側）は、地山面でもほとんど遺構が検出されておらず、線路建設の際やそれ以前の耕作地の整地で削平されてしまったものといえる。D-2地区と同様に、最終遺構面である地山面における遺構や出土遺物は、基本的には中世のものであり、それ以前のものほとんどみられない。

#### (1) 最終遺構面

いままで述べたように、東半部（難波側）は地山面までおよぶ削平をうけているほか、攪乱が多いことから、遺構はほとんど検出されていない。さらに、包含層も残っていないため、遺物もほとんど出土していない。

一方、西半部（和歌山側）では、地山面が一段下がっていることもあり、包含層や地山面における遺構は比較的良好に残存している。この部分では、耕作にとまなう溝が多く検出されたほか、ピットもみられる。比較的密集した状態で検出されているが、ピット群と溝群が同時に存在したことは考えられず、やや時期差があるものといえる。

隣接した仮線路部分の調査が、平成7年度に泉佐野市教育委員会によっておこなわれており（95-1区）、掘立柱建物や区画溝などが検出されている。ここでは、上層から鋤溝は検出されているものの、耕作にとまなう溝群はあまりみられず、約5m離れた位置での遺構検出状況は異なる。区画溝で囲まれた掘立柱建物が検出されていることから、屋敷が想定され、ちょうどE地区とF地区を区切る現在の道路と、屋敷の区画溝がほぼ重なっていることになる。この屋敷の北側の区画溝は、今回の調査区との境界付近にのびていることから、E地区は屋敷に隣接した部分ということになり、区画溝の外側にあたるものと考えられる。さらに、E地区で検出された溝群は、ほぼ直交したかたちで大きく2方向に分けることができ、南側に隣接する屋敷の区画溝の方向と合っていることから、関連性が考えられ、屋敷地に規制さ

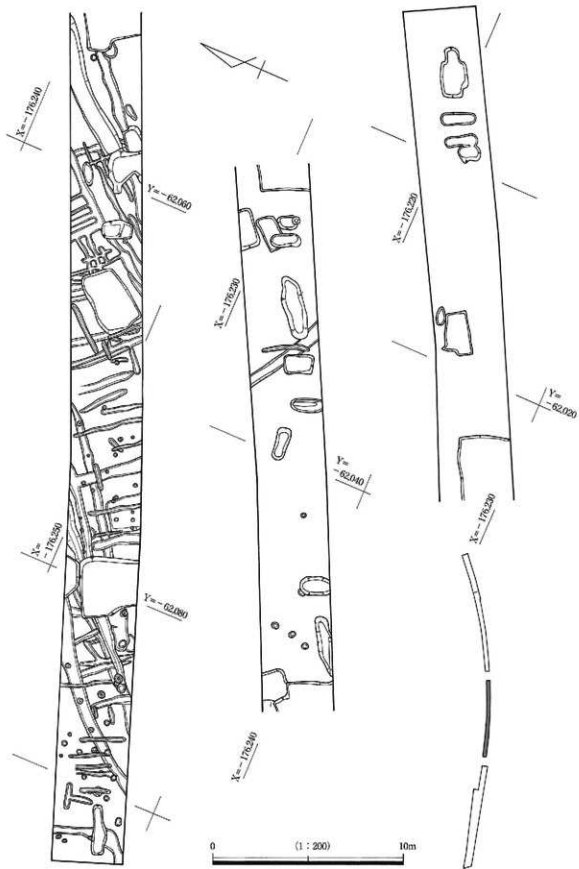


图68 E地区最终横剖面平面图



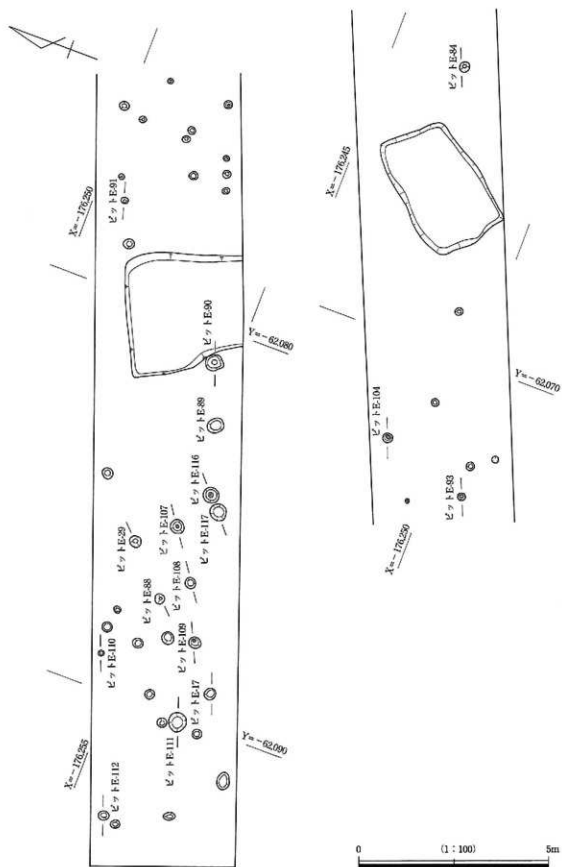


図69 E地区ビット群平面図

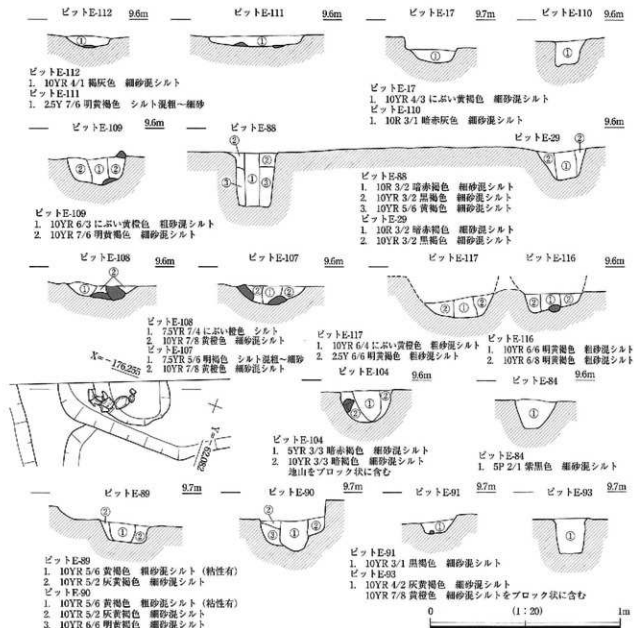


図70 E地区ビット断面図、ビットE-89平・断面図

れた土地利用がおこなわれていることがわかる。

#### ビット群 (図69・70、図版30-2~4)

屋敷地に隣接した部分であるため、建物群の想定は難しいが、特に西端部(和歌山側)でビットがまとまって検出されている。時期の確定はできないが、溝群よりもやや古くなるものと考えられ、両側で検出された屋敷の区画溝以前に営まれていた掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

D-2地区と同様に、きわめて狭い範囲の調査区であるため、建物や構列などの復原は困難であった。隣接した泉佐野市教育委員会調査区で復原された掘立柱建物や区画溝の方向などの成果をもとに、復原作業にとりかかったが、結局ビット列を復原するまでには至らなかった。ビットの上面は、整地などによる削平をうけていることから、残存状況は悪く、失われたビットも多いものと考えられる。ビットの中には、柱痕が認められるものも多いことから、復原はできなかったものの、この部分に掘立柱建物が存在したことは確かである。

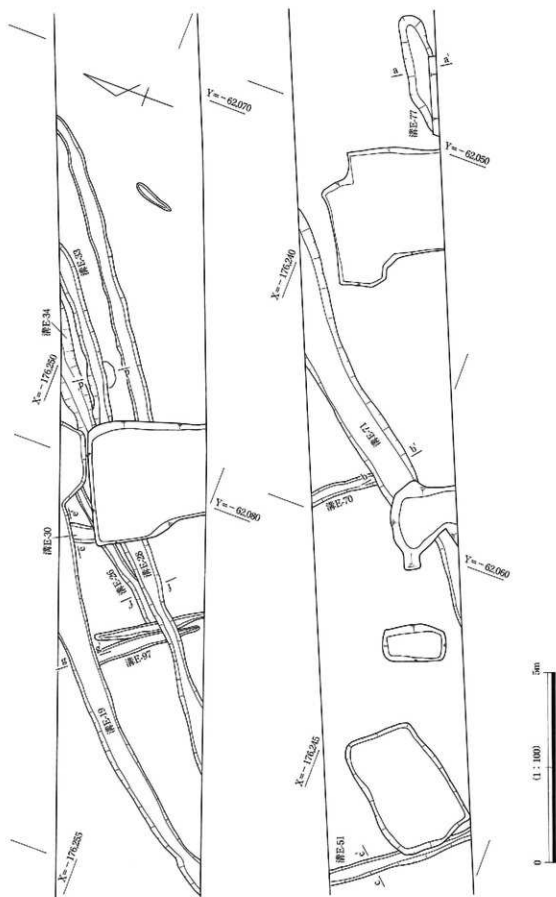


图71 E地区红树林平面图

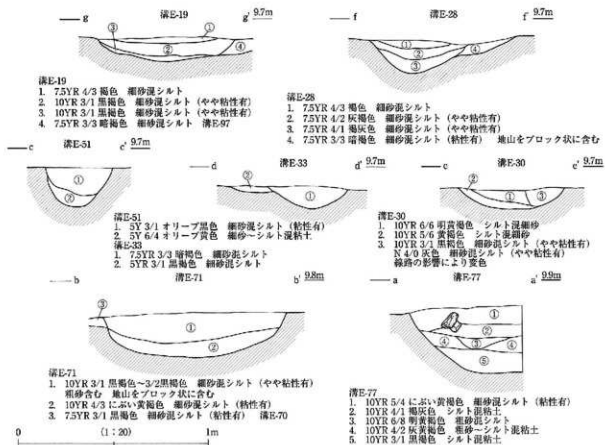


図72 E地区溝断面図

はっきりしないが、関連性がうかがわれるピットのまとまりをいくつかあげることができる。

ピットE-29とE-88は、約1.7mの間隔があり、掘立柱建物の柱穴の一部を構成する可能性がある。いずれも柱痕が土層断面観察で確認されているほか、破片のため形を復元できなかったが、瓦器が出土している。また、ピットE-107とE-108は、約1.5mの間隔があり、ピットE-29とE-88の並ぶ方向とは若干方向が異なるものの、掘立柱建物の柱穴の一部を構成する可能性が考えられる。いずれも、現状で深さは10cm程度しか残存していないが、底部に根石の一部と考えられる礫が敷かれており、同様の意図をもってつくられたものといえる。さらにピットE-109やE-116、E-117などは、ピット列を復原することはできなかったが、土層断面観察で柱痕が確認されており、径40cm程度の規模になることから、掘立柱建物の柱穴の一部であると考えることができる。

ピットE-89は、ピット群のほぼ中央部南側で検出されたが、北半部を線路敷設に伴う帯状の攪乱により削られている。柱痕ははっきりしないため、柱穴とは断定できない。底部から瓦器碗が出土しており、地鎮のための土器埋納ピットの可能性もある。

ピットからは、瓦器碗や小皿、土師器などが出土している。遺物は小破片が多いため、形を復元できるものはほとんどみられない。また、中には底部から径10cm程度の石が出土したピットも検出されており、根石と考えられるものもみられる。小破片のため、時期の確定はむずかしいが、ピットE-89出土の瓦器碗などから類推すると、南側の調査で出土した遺物よりやや古い要素がみられることから、屋敷がつくられる以前にこの部分に掘立柱建物が存在したといえる。

溝群（図71・72、図版30-5～7）

西半部（和歌山側）で、溝がかなり密集した状態で検出された。規模の違いはあるものの、ほぼ2方向に分けることができ、東西方向はN-55°-E、南北方向はN-35°-Wにおおむね集約される。隣接する屋敷の区画溝と比較すると、ほぼ同じ方向のものと直交するものがみられる。前にも述べたように、ピット群と重複しているが、検出状況から溝群のほうがやや新しい時期のものであるといえる。溝群の中でも重複関係から時期差が認められ、若干の違いはあるものの、おおむね東西方向のものほうが南北方向のものに比べて古い。ただし、この重複関係も明確なものでないため、はっきりとした時期差といえるかどうかは難しい程度のものである。

これらの溝は、おおむね耕作にともなうものと考えられ、畑作で利用されていた溝といえる。溝埋土の土層観察によると、大きく分けて暗褐色系の細砂混じりシルトと黄褐色系の細砂混じりシルトの堆積がみられる。おそらく暗褐色系の埋土は旧耕作上、黄褐色系の埋土は流水により堆積したものと考えることができる。数回にわたって掘削されており、重複も顕著であるが、溝埋土はほぼこの土層にまともっており、あまり長期間使用されていた状況ではない。

溝からは、瓦器椀や小皿、土師器などが出土している。遺物は小破片が多く、形を復元できるものはほとんどみられない。時期の確定はむずかしいが、溝F-77出土の瓦器椀などは、隣接する泉佐野市教育委員会調査区出土の瓦器

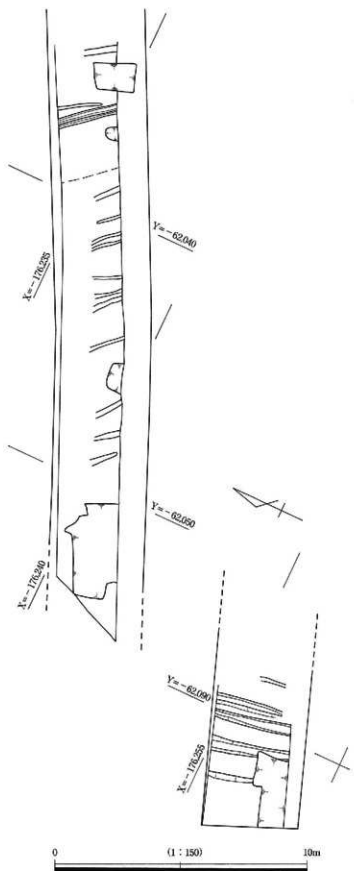


図73 E地区第3面平面図